

作業科学研究

Japanese Journal of Occupational Science

第5巻 第1号

2011年12月

巻頭言

作業を強調した時代からの飛躍・・・・・・・・・・・・・・・・港 美雪 1

第14回作業科学セミナー佐藤剛記念講演

作業の知識を活かすこと，生み出すこと

～1人の作業療法士の経験から～・・・・・・・・村井 真由美 2

第14回作業科学セミナー基調講演

作業科学研究の現在と未来・・・・・・・・ Clare Hocking 14

第14回作業科学セミナー教育講演

私の作業科学・・・・・・・・ 吉川 ひろみ 31

研究論文

ある脳卒中者が経験した作業の変化～指向性～・・・・・・・・ 小田原 悦子・他 36

幼児の作業の可能化を目指す幼稚園教員との協働的アプローチ

～作業療法士が提供する情報の扱い方に焦点をあてて～・・・・ 仲間 知穂・他 45

資料

第14回作業科学セミナー演題発表抄録・・・・・・・・・・・・ 52

日本作業科学研究会会則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

投稿規定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

作業を強調した時代からの飛躍

港 美雪

NPO法人ハピネスたかはし会
元・吉備国際大学作業療法学科

1980年にElizabeth Yerxa氏は、作業の知識を増やす新しい学問として、作業科学を提唱しました。その後1989年、南カリフォルニア大学大学院博士課程に作業科学専攻が設置され、事実上、学問としての作業科学が誕生したことになります。以来、作業科学は、人間の生活において作業がいかに中心的な存在であるのか、またいかに健康、社会的発展などへ影響力を持っているのかを示し、作業の重要性を強調してきました。このことは、人々の生活の作業に関わり、健康や生活の建て直しに貢献する作業療法の根拠となる学問として作業療法を支えることにつながりました。また、作業は、例えば人間が何をどのように行うのか、そしてその体験や結果を通して、どのように個人的、社会的意味につながり、健康や社会発展へ影響を広げるのかを考えてみるとわかるように、とても複雑です。作業科学は、このような作業の複雑さを探求する研究へと私たちを導いてきたと言えます。さらに、作業科学は、作業療法に新しい支援の視点や方法を提案してきました。

このように多岐にわたり影響力を発揮してきた作業科学ですが、日本の作業療法士が初めて知る機会を得たのは、札幌で、故佐藤剛先生によって第1回作業科学セミナーが開催された1997年です。その後、広島、静岡、大阪、岡山、東京、福岡、沖縄など、全国各地で14回の作業科学セミナーが開催されています。2006年に日本作業科学研究会が発足、作業科学研究のジャーナルが2007年に初めて刊行され、本号をもって5冊目が発刊されました。日本におけるこのような作業科学を広める取り組みは、作業を強調し続け、作業療法の世界にも影響を与えてきました。例えば、日本作業療法士協会の作業療法の定義には、生活作業を実現する視点はなく、現在も未だ発展はありませんが、作業療法の現場からは、「作業」、「意味ある作業」、「健康」などの言葉が聞こえてくるようになりました。2011年に開催された第45回日本作業療法学会では、「意味ある作業の実現」がテーマとして取り上げられ、生活作業を実現する視点が日本の作業療法の土俵にあがったと言えます。そして、来年度（2012年）の同学会では、「健康な生活を創造する作業療法の科学」がテーマとなっており、生活作業に関わる作業療法へと大きく動き出します。

札幌で開催された第1回の作業科学セミナーから15年、来年2012年7月に、再び同地で第16回作業科学セミナーが開催されます。この感慨深い札幌での作業科学セミナーを前に、私はこのセミナーを節目として、作業科学の未来と、そして日本作業科学研究会の未来について語り合う時が来たのではないかと感じています。これまでの作業を強調した時代から、どのように次の時代へと飛躍していけるのでしょうか。作業とはどのような視点から捉え理解することができるのか、どのように作業科学を実践につなげていけるのか、どのように作業科学は社会へ影響力を発揮できるのか、どのような作業科学研究がなされていくのか、どのように人がつながり刺激し合い力を合わせられるのか、私たちは何ができるのか・・・日本作業科学研究会の取り組みが推進力となり、描かれていく未来が、とても楽しみで仕方ありません。

作業の知識を活かすこと、生み出すこと～1 人の作業療法士の経験から～

村井真由美

公益財団法人 慈愛会 介護老人保健施設 愛と結の街

作業科学に出会うまで

作業療法士（OTR）の養成校に入学する前に、作業療法（OT）とはクライアントと OTR が生き生きと作業を共にしている絵図を私は思い浮かべていた。クライアントが楽しみながら病気や障害から回復していくのだろうと夢を描いていた。入学してから、臨床実習に出てから現実とは随分違うのだと実感するようになった。特に臨床実習では各現場で求められることが異なり、たくさん勉強しなければならないことはわかった。今から約 20 年前の話だが、身体障害領域では上肢機能、認知・高次脳機能、日常生活活動（ADL）、趣味（手工芸など）、レクリエーション、職業前評価と訓練（職業適性検査）など、精神障害領域は対人関係の向上や生活のリズム作り、精神症状の悪化の予防など、発達障害は正常発達、感覚統合、遊びなどがキーワードで、私が今携わっている老年期障害に関しては始まったばかりで OTR 達も手探りという状況だった。一体、OT の共通項は何なのだろう、と私の頭の中は混乱していた。「作業」というキーワードでまとめることができたなら随分救われたのかもしれないが、あの頃は求められることを必死でするしかないが、分野が変わると今までの知識や経験があまり役に立たないかも知れないという恐怖心があったことを覚えている。

最初に就職したのは身体障害者リハビリテーションセンターだった。私はアイデンティティクライシスどころか OTR としてのアイデンティティさえもわからなかった。先輩達がしていることの真似やクライアントの希望にそのまま応じているだけだった。OTR として何かが違うと思いながら周囲にモデルも打開策もなかった。OT の説明ができず、「手のリハビリです」、「理学療法士が基本動作なので OTR は応用動作です」などと必死で答えていた。いつも心の中は苦渋に満ちていた。カンファレンスで理学療法士が体幹・下肢機能に加えて上肢機能を、言語聴覚士が認知・高次脳機能障害を、看護師が ADL について説明した後、自分は何を話せばいいのか途方に暮れることもあった。今となっては感謝しているが、同僚の理学療法士の言葉が胸

に刺さった。OTR が少ない時代にハンドセラピーを担当していた理学療法士が「俺、あんた達のしていることできるよ。OTR がやめても代わりできるから。痛くも痒くもないよ。」と言った。私が自分と同じ年の頭部外傷後四肢麻痺の男性を担当した時に関節可動域訓練やストレッチをしていた私に対し、一緒に担当していた理学療法士が「この子の生き甲斐は？仕事は？あんたと同じ年なんだよ。俺たちと同じことをしてどうするの？」と私に言った。私は心の中で、「こんな重度の障害を持っている人に生き甲斐や就労なんて無理。就労はソーシャルワーカーの仕事で私には関係ない。何で私ばかりに言うの？本人もお母さんも少しでも元の体に、って言っているのに。」と思いながら何も答えられず、泣くしかなかった。同僚 OTR 達は「大変だったね。いつも言うこときついよね」と慰めてくれた。今では同僚の理学療法士達に感謝している。これらの言葉の意味や重みがとても身にしみる。もし、私の関節可動域訓練やストレッチが上手だと言われていたら今の私はいないかも知れないと思う。

私は悩みながらも OT らしいことをしようとして OT プログラムの中に作業を取り入れようとした。よく使ったのは折り紙やちぎり絵だった。「指先の力がつきますよ」、「おうちでも訓練を兼ねてできますよ」と説明した。中には本当に趣味となり、手指の機能がよくなり、作業の素晴らしさを実感させられたクライアントがいたが、たいていは OT 室のみの限られた時間の作業だった。「ちぎり絵をするとイライラして気が狂いそうだからやめていいですか」とクライアントに言われたことがあった。前述の理学療法士達や他職種、クライアントに「その作業をして何になるの」、「その作業をしたら何かできるようになるの？」と聞かれることがあったが、「手指機能が良くなると思います」、「楽しみになります」、「高次脳機能障害が良くなると思います」と答え、「具体的には？」、「楽しくないって言うていたけど」、「OT 以外の時間はしてないって」と言われたら黙るしかなかった。

結局、その職場は 2 年で退職し、自信を持って OT

を語り、実践できるようになりたい一心で20代を進学や教育現場で働き、お金と時間を費やすことになった。

札幌医科大学大学院で作業科学を学ぶ

1995年に縁あって、「作業科学—作業的存在としての人間の研究」¹⁾の第34章の翻訳に関わる機会があり、1998年に札幌医科大学で行われた第2回作業科学セミナーに参加した。このセミナーでWell elderly study^{2,3)}の存在を知り、ただ何か作業をすればいいというものではないのだ、と衝撃を受けた。紆余曲折を経て2000年春に札幌医科大学大学院に進学した。当時の授業は作業科学の教科書¹⁾を読んでディスカッションするものであった。教科書¹⁾には、「チンパンジーと母親と子どもの作業」という章があり、知人が学位論文作成のために動物実験をしていたことを思い出し、学位を得るには動物実験は避けられないのかと思った。「ホームレスの日常生活における時間、空間、および地理学」、「学者としての仕事」、「作業としての配偶者選択」、「針手芸と作業」では作業を心理学、社会学、歴史学などと多角的に捉えており、おもしろいと思ったがそのようなクライアントを担当しない限り役に立たない知識だろうし、何でも“作業”になってしまうのではないのかと思った。“作業”について学ぶことは楽しいがOT実践には役に立たないかも知れないと思った。今となっては無礼な考えだったと自覚しているが、大学院の3年間で人生最大の趣味の時間とし、運良く修了できたら普通のOTRとして働こうと人知れず決意していた。

学位を取るには論文を書かなければならない。作業科学は実践にあまり役に立たないかも知れないと思いながら、自分が訳した34章¹⁾は初めて自分にこんなOTがしたい、と思わせてくれたものもあったので、自己の実践の中から浮かんだ疑問を研究テーマに選んだ。それは「人が選ぶ作業は過去に選んできた作業と関係があるのではないか」である。大学院進学前の数年、高齢者領域で働く機会があった。クライアントに対し、全員同じように対応することに疑問があり、集団の中で作業に参加しないクライアントに何ができるのかと苦悶していた。過去の作業との連続体としての現在、未来の作業に援助できる方法はないかと思い、研究に着手した。それは前述の第34章¹⁾の「人間は作業を通して自己を形成する」や「生存者(survivor)は(中略)その人は過去の生活と、作業的存在としての感覚を取り返すことを切に願っているのである」という文章に背中を押されたのである。

作業科学を学び実践が変わった

作業科学を学び、研究をした結果私のOTは変わった。一つ目は「作業の専門家」と名乗れるようになった。“OTは分野によってやるのが全然違いますよね”という言葉に対し、「身体、精神、発達、老年期のどの領域でも作業遂行上の問題があれば作業をすることが難しくなります。OTRはそれぞれの領域でクライアントの作業ができるようになることを支援しています。いかなる障害に対しても作業ができるように支援するのがOTRです」と言えるようになった。あるクライアントが「あんたはあちこちでいろんなことをしていて食事のところにいたり、お習字したり、手芸したり、畑仕事もしているじゃないか。何の仕事なのさ」と私に言った。私は「食事も習字も手芸も畑仕事も“作業”と呼ばれ、“作業”ができるようにお手伝いする仕事です。人によってしたい作業が違うのです」と答えた。こう答えた後に“作業科学に出会うまで”で述べたような苦し紛れのOTの説明ではなく、やっとOTの説明ができるようになったと思えた。二つ目に作業をすることでクライアントの近い将来がどのような状況になるか予測、説明することができるようになった。疾患や障害の予後予測ではない。例えばある作業がどの程度の援助でどの程度の頻度で行うことになるであろうというようなことである。三つ目は作業を基盤とした実践だけになった。マット上での徒手的な介入や平行棒での歩行練習など行わなくなった。四つ目にクライアントが作業をする上で心身機能の問題が作業遂行に影響し、そのような問題に関する知識を持っているOTRが作業の可能化を支援するのだ、と改めて認識した。そのために医学的な知識が大切であると思った。それ以外に人の意志、価値、習慣、環境、作業等の知識^{4,5)}も必要であることがわかった。作業についてじっくり学ぶ前はクライアントの心身機能の問題をなるべく解決したらいかなる環境でもやっていけると思っていた。言い換えると心身機能の改善がなければ一生作業ができない状況も起こりうる、ということである。動作の連続体として作業ができて認知的な問題がある、クライアントの動機付けや習慣に則していなければ作業ができるようになることが難しいということを知った。

実践に役だった作業の知識の例

「作業科学」の教科書¹⁾の話題に戻る。第1章の「折り込まれた活動と作業の概念」の中に“図1-1 母親は一つの作業と別の作業を折り込んでいる。この写真で

は、料理をする一方で注意深く目を娘に向けている”という写真があった。大学院入学と機を同じくして AMPS (Assessment of Motor and Process Skills : 運動とプロセス技能の評価)⁶⁾講習会の講師養成のトレーニングを受けていた。AMPS 課題の中にはトーストを焼いて、卵料理を作って、飲み物を準備するというものがある。作業は一度に一つだけ行われるだけではなく、複数の活動を同時進行で行い、「朝食の準備」という一つの作業が成り立つということがわかった。このことを図 1-1 の写真から学んだ。今までクライアントが自宅に帰ったときに OT で調理ができたのに自宅で朝食を作れず、在宅生活の継続が困難という理由で再入所したことに對し、クライアントのやる気のなさだと思っていた。入所中 OT では単品を時間帶も、実施時間も考えず作ることだけをしていた。何がクライアントにとっての朝食だったのか、朝食作りの前後の作業には何があり、お互いがどう関係していたかを考えることがなかったのである。岡ら⁷⁾は、自分らしい生活に繋がる作業の要因として「自分らしい作業の行い方」や自分らしい作業がどのようなものかについての本人の考え方を表す「作業観」というカテゴリーを挙げている。OTR は作業遂行に関する知識があるので、この疾患や障害ならこのやり方で、この程度でできればよい、ということを考え、提示し、クライアントと練習を行う。しかし、クライアント独自の作業のやり方や作業観の重要性を無視すると現実と自分らしさが乖離し、クライアントは作業を続けることをやめてしまうのかも知れない。OTR は自身の知識とクライアント独自の作業のやり方や作業観とをすりあわせ、協働できたときに最も専門家として最適の支援ができたと言えるのではないかと考える。

自分らしさという点では、第 34 章「作業的ストーリーテリングと作業的ストーリーメイキングのためのテクニックとしてのグランディッドセオリー」¹⁾で Richardson 博士の洋服や杖の選択についての話題がでてきた。この章を読むまではそれぞれの障害にあった服や杖があり、そのことをよく知っているのは OTR で、クライアントにその中から選んでもらうことが普通だと思っていた。障害をもってもなお自分らしい洋服や杖を選ぶ過程にクライアントが参加するということは当時の私には驚くべきことであり、これぞ OT だと嬉しく思ったものである。

第 17 章「霊長類における環境の豊かさー作業科学との関連」¹⁾では、捕獲され、檻の中にいるサルがむき出しの床の上で暮らし、自動給餌器で食物を与えられ

る状況では、1 日を食物探索に用いる時間は 2% で、30% 以上を攻撃的に費やし、床におがくずを敷くなど食物の処理を難しくする環境にすると探索活動の時間が増え、攻撃性は減少した、と述べられている。サルと人間は一見遠そうに見えるが、することがないつらさを経験することが実践現場では多々ある。ある怒りっぽいクライアントがいた。OT はインタビューし、したい作業、できるようにになりたい作業がないか尋ねたが、作業をする気分になれない、でいつも話が終わった。OTR は本人の好きなプロ野球の話や新聞等の資料を用いて積極的に行い、作業の糸口を探した。その時間のクライアントは楽しそうにしているが、しばらくすると「作業療法って予定に書いてあるけど 1 回も来ることがない。何もしてもらったことがない」と立腹した。OT 評価と介入の過程を説明すると「そんなことを言った覚えはない」とクライアントは答えた。失語症や知的低下があるクライアントなので半分仕方ないと私は思っていた。ある日、このクライアントに呼ばれた。いつものように私が経緯を説明し、クライアントが立腹しながらそんなことは言っていない、というのがオチだと思っていた。その日のクライアントは泣きながら「何もすることがない。つらいんだよ」と言った。話をよく聞くと発症前は本や雑誌を読むことが好きで、手帳に日々の出来事や健康状態を細かく記録する習慣があった。発症後は活字が理解できず、写真しかわからない。手帳に記録したくても字が書けないということだった。私はクライアントが読み書きという行為を含む知的活動がしたいのではないかと推測した。同僚の言語聴覚士 (以下、ST) に相談したところ、読み書きの言語機能はかなり障害されており、字の模写も困難だろうとのことだった。注意障害のため、同じ問題を長時間することは難しく、短時間でいろいろな課題をした方がよいとのことであった。苦心の末、見つけたのは計算、線つなぎ (数字が打たれた点をつなぐと絵ができる)、左右の絵の間違い探し、あるマークの部分の色塗りすると絵が浮き出るといった脳トレーニングドリルであった。ST によると計算は一桁の繰り上がり、繰り下がりなしのものであれば可能とのことだった。難しい問題になると混乱することがあるので避けた方がよいとのことだった。実際に 1 桁の計算問題を提示した時には「バカにしやがって」と立腹された。大学の有名な先生が簡単な計算を繰り返すことが脳の血流に良いと言っています、私はあなたにとって一番良いものを準備しました、と私はクライアントに説明した。クライアントは渋々応じたが結果的に楽し

そうにしていた。宿題と称して渡した計算以外の課題を居室や廊下で行っている姿をよく見るようになった。間違い探しについては「俺、こんなの好きだったんだよ。新聞の、よくやってた」と話してくれた。STも協力して言語に関する宿題を出してくれたので日中することができ、そのクライアントは立腹することが少なくなった。このクライアントと出会って、第17章¹⁾のことを思い出した。

第32章「老年期に意味ある存在を生きる」¹⁾ではヘルスケアの支援者(HCA)という団体に所属している高齢者に人生の物語、人生で用いているストラテジー、価値・目標等及び年をとることについての意味について話を聞くという研究の紹介がある。老年期領域で働く私にとってこの章は全て関心があるのだが、特に7つの「適応ストラテジー」が挙がり、その中で“リスクと挑戦”というストラテジーに関しては興味深かった。OTRとして働いているとクライアントへの介入に対し、「失敗したらどうするのですか」、「失敗させないように」ということをよく聞く。ただでさえ、障害や老化現象などによってつらい思いをしているクライアントへの配慮かも知れないが、作業の中でリスクを冒し、挑戦する機会をクライアントから奪って良いのかという疑問を私は持っている。明らかに生命の危険がある、あるいは他者への影響が大きいなどのリスクは避ける必要があると思う。私の人生は失敗が多い。だからこそ成長しているのだと思う。もし私の障害を負った後の人生が成功体験ばかりだと気味が悪いだろうなと思う。2009年に開催された第13回作業科学セミナーのワークショップで話題提供して下さった畑間英一さん、葉山靖明さんは大変活動的でリスクの高い作業を行っていた。二人とも「リスクは好きです」と答えたのが印象的だった。作業科学を学ぶことにより、作業とリスクの関係、リスクのある作業を行う人ということを考えるようになった。

2003年に私にとって待望の本が出版された。PierceのOccupation by Design⁸⁾である。初めて参加した第2回作業科学セミナーでPierceの研究の紹介が行われた。セミナーの中で参加者はセミナー参加前日の作業を時系列で書き、その作業の意味—楽しみ(Pleasure)、生産性(Productive)、休息(Restoration)がどの程度が一つの作業について10段階でどの程度かを記入した。同時に時間、空間、社会文化的にどのような作業であったかを記入した。私はセミナーが北海道で行われたので蟹好きの家族のために「蟹を買って送る」という作業を行った。「蟹を買って送る」という作業はよりよい

蟹を選ぼうという楽しみがあり、様々な店を見て回り、値段や蟹の種類、大きさを比較することで生産性を感じた。買い物をした後は癒されるような気持ちになった。作業の形態としては私が1人で蟹を買うというものであるが、その先には家族がいた。家族が喜ぶだろうという楽しみがあった。蟹を送った後に家族にいつ頃届く、と電話をするという作業を行った。単に「蟹を買って送る」という作業には3つの作業の意味がブレンドされており、時間、空間、社会文化的な要素があることに気がついた。Occupation by Designは作業の研究の集大成から作られたものであると考えるが、作業の意味については「作業の主観的側面」とし、Pierceはアピール(魅力)と呼んでいる。空間、時間、社会文化に関しては「作業の文脈的側面」とし、インタクトネス(自然な状況)と呼ばれている。PieceはOTR側の要因として「作業デザイン過程の要素」として、セラピストのデザイン技能、協働的作業目標の生成、目標に対する介入の正確な適合、という“的確さ”を挙げている。簡単に言えば、作業が人にとって魅力あるもので、自然な状況で、セラピストが的確にその作業をクライアントと共にに行った場合に治療的力を発揮するということではないかと考える。Pieceの仕事は作業の知識をOTに生かす一つの取り組みだと私は思う。

Occupation by Designを痛感した例⁹⁾を紹介する。80代の女性で脳血管障害後軽度右麻痺を有するクライアントの自宅復帰に関わった。独居であり、宅配弁当、ヘルパーの家事援助を受けながら生活するが、毎朝の食事と弁当、ヘルパーが入らないときの食事の準備が必要のために調理練習をOTで行った。評価でAMPS⁶⁾を行い、作業遂行分析に基づいて練習を行った。3ヶ月の介入後の再評価では作業遂行能力の変化が見られなかった。自宅へ帰られた後、私の職場の通所リハビリテーション(以下、通所リハ)に通って来られていたので4ヶ月ごとにAMPSを実施し、作業遂行能力の追跡調査を行った。評価するごとにプロセス技能が有意に向上していた。老健では週2回、午後2時から練習していた。自宅での食事の準備中は空腹であり、特に朝食は日によって通所リハの送迎までにすませなければならない。作業をする頻度が増えたことと空腹や食事後の作業との兼ね合いという自然な状況が作業遂行能力を向上させたのではないかと考える。老健で練習する時間は満腹であり、急ぐ必要はなく、夕食は確保されている。専門職として評価結果を元に介入したが、この作業の文脈的側面を理解していればもっと良い介入ができたのではないかと考え、その後調理を練

習するクライアントに対しては、空腹になる午前 11 時くらいから始め、昼食時間になったら帰棟しなければならないという設定でできるだけ自然な状況で練習を行うようにした。調理以外の作業に関しても制限はあるが、できるだけ文脈的側面を配慮し、自然な状況でできるように検討、実施している。作業の主観的側面に関しては、入所当初のクライアントは緊張しており、どちらかというと休息の意味を持つような作業をしたいということが多い。徐々に環境に慣れてくると楽しみ、生産性の高い作業へと移行していく。人が置かれた立場で一番したい作業に魅力があり、魅力のある作業は最も治療的力を発揮すると実感している。OTR はタイミング良く魅力ある作業参加への橋渡しをしなければならず、そのためには的確な作業デザインが必要なのであろう。Occupation by Design の絵は私にとってバイブルであり、いつも頭の中に描いている。

作業の知識を産み出す

「札幌医科大学大学院で作業科学を学ぶ」でも述べたが博士論文作成のために研究に着手した。研究のきっかけは私が通所リハで非常勤をすることがあり、職員から通所リハのプログラムに参加しない利用者の相談をよく受けたことであった。指導教官の Zemke 教授に「何もしない利用者さんにはどんな作業を提供したらいいのか研究したいです」と話すと、「なぜ作業をしないことがいけないの？何もしない人には理由があるんじゃないの？何もしないようでは何かしているのでは？したくもない作業を提案されるのはその人にとってどうなのかしら？」と返ってきた。作業科学者から“なぜ作業をしないことがいけないの？”と言われたことが衝撃だった。作業について自分がよくわかっていないことに気がついた。「通所リハを利用している高齢者が生涯を通じて参加してきた作業と作業を選ぶパターンについて調べる。関係性を探る」という目的で 4 名の通所リハに來られている高齢者にインタビューを行った¹⁰⁾。インタビュー結果を作業の形態、機能、意味の側面から時系列的に分析した。4 名のインフォーマントそれぞれの作業には作業テーマ 7)があり、作業の形態は時系列によって変わり、作業テーマはそれぞれ機能や意味を表していた。「人が選ぶ作業には過去に選んできた作業と関係があるのではないか」という疑問については 3 つの関係性がわかった。一つは、「生涯を通じて作業の形態、機能、意味が同じ」である。過去に経験し、好きな作業を現在も選択している場合もあり、過去に嫌い、苦手と感じている作業は現

在も選ばないということがわかった。二つ目は、「作業の形態は変化しても機能、意味は類似している」である。早川氏（仮名）は通所リハで様々な活動に参加していた。若い頃から多趣味なのだろうと予想していたが、反して仕事一筋で趣味はなく、現在参加している活動は通所リハを利用してから始めたということである。早川氏の仕事の話を分析すると働きながら夜学に通い、短期大学卒の資格を得た、など継続して学習、挑戦していたことがわかった。早川氏は通所リハで川柳を行っており、同人誌に投稿し、時々入選していた。それぞれの作業の形態は異なるが、挑戦することや知的な活動という作業テーマとして繋がっていることが推察された。三つ目は、「作業の形態は同じでも機能、意味は異なる」である。山田氏（仮名）は通所リハで民謡を踊る活動に参加していた。過去の作業として婦人会で踊りを習っており、地域のイベントで踊っていたという話をしてくれた。それはとても楽しみだったとのことである。当時未熟なインタビュアーの私は「だから踊りを今もやっているんですね」とコメントした。山田氏は「違うよ。私がデイで踊っているのは楽しみなんかじゃない。リハビリなんだよ。ああ、まだこんな風に今日も手が動くな、とかまだまだこういうのはできないな、とか考えながら手足を動かすのさ」と答えた。作業の意味を誤解されることは作業をする本人にとって不快であることは私も経験する。作業の形態だけを見て第三者が判断することがあるが、作業科学者として作業の意味を慎重に捉える重要性を認識させられた。これらの研究結果から、人はライフサイクル、心身機能、環境等の変化がありながらも作業を継続、再開する場合と変化に伴って作業の変更をしていくことがわかった。作業の形態、機能、意味の点から連続性の多様性があることがわかった。自分の研究結果は手前味噌であるが私の実践に役立っており、作業に関して単に昔していたからまたしてみましようではなく、継続・再開することの意味、新しい作業を始めるにあたって込められる作業テーマなど考えて面接、提案、実施をしている。

私の「人が選ぶ作業は過去に選んできた作業と関係があるのではないか」という研究疑問に関連する様々な概念があると考えた。Clark と Richardson の Occupational-story telling と Occupational-story making（作業的ストーリーテリングと作業的ストーリーメイキング）¹⁾、Occupational identity（作業的アイデンティティ）^{5,11-18)}、Occupational transition（作業移行）^{15,19-21)}、Occupational development（作業発達）^{19,22-24)}、Occupation

と continuity (作業と連続性)²⁵⁾という概念と関係がありそうだ。学習し、探せばもっとたくさん関連づけられる概念や研究例と出会えるだろう。これらの知識を身につけることで作業を語る言葉が増え、OTRであれば実践に反映できると考える。

作業の知識を得るには、まずは文献を読むことに尽きると思う。先に挙げた「作業科学」や吉川の「作業って何だろう」²⁶⁾、年刊誌である「Journal of Occupational Science」や日本作業科学研究会が出版している機関誌「作業科学研究」がある。日本作業科学研究会が Journal of Occupational Science の要旨の和訳作業を行っている。ぜひ参照いただきたい。正直、よくわからないこともあるだろう。私が当初感じていた「OT 実践とは関係ない」という思いが生じるかも知れない。17巻2号(2010)の「アイデンティティの作業遂行と場：移住過程における作業とアイデンティティと場の交点の概念化」¹⁸⁾という論文について、移住については私たちのクライアントに直接関係ないかも知れない。しかし、新しい環境に移ったという点では類似しているかも知れない。新しい環境に移った人の作業遂行やアイデンティティにはどのような特徴があるのか知ること入院、入所を経て新しい環境に移ってきたクライアントの介入に役立つかも知れない、という視点で読むと楽しめると思う。

どのような作業の知識が必要か

作業というものを捉えることは複雑ゆえに作業の知識に関してはまだ手つかずの部分が多く残されていると思う。人の作業に関わる OTR としてどのような作業の知識があれば更に OT 実践や他に役立つのだろうか。

たとえば初回評価の際に「(したい、できるようになりたい作業は)ありません」、「作業の前に手が動くように、歩けるようになりたい」とクライアントに言われることはないだろうか。カナダ作業遂行測定(COPM)²⁷⁾などを用いて面接した際に、全員が最初から作業への関心を表明するわけではないことを経験している OTR は多いと思う。私もその1人であり、他のリハビリテーション専門職に比べて肩身が狭いと思っていた。しかし、梅崎の論文²⁸⁾を読み、OBP(作業に焦点を当てた実践)の条件と障壁の一員として「クライアントの状況」というカテゴリーを挙げている。研究参加者の H 氏の語りの中の「(略) 必要なタイミングで出せば十分存在価値があるっていうか。(略) 何で作業に焦点が当たらないかっていうのは、弱っているときにその人にあっているからだと思う。」という

下りに触れ、作業を行うタイミングというものが存在するのではないかと思った。現在の医療、介護保険下で OT を診療報酬の対象として開始する場合は発症の時期や入院(所)が起点となっている。この起点の段階ではクライアントによっては作業を行うタイミングではないため、あるいは弱っている状況のために作業に関する希望が出ないのかも知れない。OT が人気のないリハビリテーション職種であるからクライアントが OT の希望を出さないのではなく、タイミングの問題であるかも知れないと思うようになった。私たちが一度は学習した Maslow の自己実現理論²⁹⁾では生理的欲求、安全の欲求の上に所属や愛、承認、自己実現の欲求が存在する。病気や不慮の事故などのセーフティネットは安全の欲求の要因に関する言われている。作業を行う、始めるタイミングの研究が蓄積されたら OT の保険請求が発症や入所日を起算とするのではなく、本人が作業を行いたいと表明した時からになるかも知れないという多少乱暴な期待を持っている。私の職場である老健でも入所当初は環境に慣れることなどで精一杯な様子で加算の算定ができる期間に OT がうまくできないクライアントがいる。あるクライアントは入所してかなり経過した後で「手芸がしたい」と希望された。そしてその手芸が楽しみで大切な作業となり、心身機能が向上した。経営のことを考えると加算算定期間に希望してくれたらいいのに、と邪な考えが浮かんだが、同時にこのクライアントにとって当然の過程とも思えた。やっと作業をする気になれたのである。場合によっては加算対象期間外という理由でクライアントが作業を始めることを拒むことが考えられる(筆者はそうならないように努めている)。このようにどのようなきっかけで作業が始まるかというエビデンスがあれば OTR の仕事が報酬として保障される可能性があるだけでなく、クライアントが作業を始めるためにどのような働きかけが有効か、あるいはどのようなタイミングが有効なサインかを OTR がつかみやすくなるかも知れない。もう一つ、クライアントが一つの作業ができるようになった後に、他の作業へと展開していくことを経験したことがないだろうか。このエビデンスが証明されたら OT は有効な介入方法と更に認められるかも知れない。作業が始まる時、作業が広がることについて私の知人が研究し、投稿中とのことである。掲載されたら是非読んでいただきたい(注：この講演当時は投稿中であつたが、後日掲載された。福田久徳、他：病後の作業再開を可能にした背景。作業療法, 30(4), 445-454, 2011.をご参照いただき

たい)。

クライアントは作業を始めるタイミングについて、常に自分でしたい、できるようになりたい作業を初期評価時点で表明しているだろうか。長期間、自らの意志を持って作業をする経験が少ない人は新たな場所ですんなりと作業を始めることができるのだろうか。そして OTR は認知的な問題や重度の障害を有するために自己の意志の表出が困難なクライアントに応じることはできないのだろうか。経験のある OTR ならば決してそうではないということを知っているはずだ。それではどうしたらよいのだろうか。私は、前述の研究¹⁰⁾でインフォーマントがどのように作業を選んだかについても聞いた。対象となったインフォーマントからは4つの選び方が挙げられた。学生や職業人などその場で求められる作業を行う「義務」の他に、「自主的に作業を選ぶ」、「他者の勧めによって作業を選ぶ」、周りの人がしているから自分もするというような「環境に合わせて作業を選ぶ」の4つが挙げられた。全てのインフォーマントが全ての作業の選び方を生涯を通じて用いていることがわかった。自主的に何もかも選んでいるように見えたインフォーマントでも人生の中では他者の勧めや環境に応じて選ぶことがあった。インフォーマントは人生の初期段階では選択の自由が少なかったが、人生後期では自主的に選ぶことが多くなっていた。1人のインフォーマントは、「他者がするから自分もする」というやり方を多く取っていた。これらのことから高齢者には馴染んだ作業の選び方があるという可能性が伺えた。私は自己の研究から初回面接・評価で作業に関する希望がなくてもあらゆる方法を試みるようになった。たとえば、他のクライアントの例を紹介する、作業をしている場面を見学してもらう、作業を実際に体験してもらう、仲の良いクライアントに声をかけてもらう、などである。自主的に口頭で作業を選ばなくても、結果的にクライアントが作業につながれば良いと考えている。火のないところに煙が立たないように作業をしたくなるような環境や人脈(火だね)を使うことによって人は作業に繋がる(煙)ように支援するようになった。

OTR であれば人と作業の関係について疑問に思うことがいくつか挙がるのではないだろうか。研究職である、あるいは大学院生であれば研究は容易かも知れないが、状況によっては研究することが困難なこともあるだろう。できるだけ信頼性、妥当性の高い研究ができることにこしたことはないが、勇気を持ってできることから発表することを期待したい。自分が持った

研究疑問を明らかにすることで誰かが救われるかも知れない。近年、大学院で学ぶ環境が整備されている。研究したいと思ったら大学院の門をたたき、研究に詳しい人と繋がることを勧めたい。

作業のレンズ

作業科学を学んで良かったと思うことが OT 実践以外にある。それは様々な作業の知識が体にしみこんできて身近なことや社会で起こっていることがひと味違って見えるようになったことである。このことを端的に表している写真が、吉川³⁰⁾の「ウィックス氏が持参したメガネ(作業のレンズ)」である。Wicks は吉川の講義要旨の中で「作業科学に出会ってから、(中略)大きな変化がありました。まず、作業のレンズで世界を見るようになりました。それは常に作業科学者であるということです」と述べた後に自身の経験が記してある。私は大いに共感した。作業科学に出会い、作業の知識を持った人は誰でもこのことを体感したことがあるのではないだろうか。

2010年に機会があり、内閣府が主催している共生社会を作るための「青少年コアリーダー育成プログラム」³¹⁾の派遣青年としてドイツに約10日間行くことができた。OT やリハビリテーションに局限した研修ではないので私が OTR としてのスキルアップのために行くとしたら得るものは少なかったかも知れない。私はドイツを作業のレンズでしっかり見てこようと決意した。ドイツの人はどんな作業をしているのだろうか。それはどんなものでどのような意味があり、どのように役立っているのか、という視点で見たり、聞いたりしようと思った。このプログラムは「高齢者」、「障害者」、「青少年」の3領域があり、私は「高齢者」を選択した。その派遣先がドイツだった。ドイツでは行政機関や高齢者の入所施設、ボランティア団体、研究所、地域の拠点、多世代住宅など多様な場所を訪れ、意見交換を行った。1泊2日でホームステイがあり、ドイツの日常生活を経験することができた。特に印象に残ったことを紹介する。ドイツの高齢者はとても元気な印象を受けた。夜遅くまで飲み、週末はハイキングに出かけていた。緯度が北海道と同じか北なので冬は寒く長く、室内でコツコツできる刺繍が人気の作業のようだった。陶磁器の国なので居室や自宅には豪華な食器棚と食器が飾られていた。飾るだけでなく、来客が来た場合は惜しげもなく使い、先祖代々少しずつ同じシリーズを集めているとのことだった。食器やグラス類はよく磨かれていた。室内はどこも清潔で掃除が

よくなされており、物が少なかった。観察しただけでも様々な作業が浮かび出てくるようだった。見学した中で印象的だったのが高齢者のボランティア団体の活動だった。ドイツはキリスト教文化が色濃く、ボランティアの歴史や実践が充実している。「現代史センター」という団体のボランティアの案内で首都ベルリン市内を視察した。第二次世界大戦のことや東西ドイツが統一されるまでの苦難な状況の説明があった。「私たちは思い出をお墓に持って行くのではなく、今の人に伝えたい。そのためにこのような活動を行っている」という作業の意味が心に残った。この団体は高齢者にしかできないこととして昔のファッションの話や学校に出向いて火のおこし方なども伝授しているとのことであった。年をとっているからこそできること、ということ大切に、質を維持するために研修を行いながら活動しているとのことであった。「ソーシャルワークベルリン」は創始者のトレセンロイター氏が約40年前に高齢者を支援した経験から始まった団体である。高齢者が高齢者を助ける自助グループであり、高齢者施設を訪問し、クリスマスパーティーを開催して施設にいる高齢者を招待しているなど非常に幅広い活動を行っていた。美しい2階建ての建物は長年の活動と交渉で国と市の助成と寄付金で借入金なく建てたとのことである。1人ずつ質問できることができたので私は幹部の方々に「皆様はとても健康そうに見えます。皆様がしている活動と健康の関係は何かありますか」と尋ねた。対応して下さった幹部は80~90代の方だったので全員一度は大病を患ったそうである。しかし、またソーシャルワークベルリンに戻って働かなければ、と思い、病気を克服したとのことである。逆にメンバーが病気になった場合は必ずポストを開け、帰ってこられるようにしている。たとえ病気や障害があったとしてもできない部分は他の人が支援して仕事を続けられるようにしているとのことだった。彼ら／彼女らは口々に「この活動は私にとっての義務だ」と言っていた。代わりはいくらでもいる、というような世の中になったような気がする昨今、かけがえのない存在として作業をする機会を大切に確保しつつける姿に非常に感動した。三つ目のボランティア団体「ヘンネフ高齢者事務所」ではコミュニティバスの運行、パソコン教室担当、カフェ担当、ボランティア同士の交流促進担当など各担当が活動について語って下さった。通訳を介してではあったが、自己の担当活動に誇りを持って取り組んでいることが伝わってきた。ケアホームという高齢者入所施設を訪問したときに、ドイツは入所

施設に必ず入所者代表委員会というものを設置しなければならないという法があるそうである。オーバーさんという95歳の男性が説明して下さい。食事やレクリエーション、待遇など暮らしやすいようにするために入居者の意見を聞き、経営側と交渉しているとのことである。なかなか意見が出にくく、各部屋を回って意見を代筆する、映画上映会を企画する、その後に参加者からインタビューする、など努力していた。オーバーさんはこの活動がとても楽しく、生き甲斐だと語った。元教師のオーバーさんは車いすと補聴器を使用していたがとてもお元気そうであった。そしてドイツでは「多世代」がキーワードであったような印象を受けた。日本の公民館のような地域の拠点を政府のモデルプロジェクトで作っていた。訪問した「クリエイティブハウス」では多世代が交流するような取り組みが必須とのことであった。高齢者と子どもがお互いの遊びを体験し合ったプログラムでは最初はお互いに偏見を持っていたが、次第にお互いの遊びを楽しむようになったとのことである。高齢者が子ども達は電子ゲームばかりやって、と思っていたがゲームのおもしろさにはまり、子ども達は高齢者の遊びを古くさいと思っていたが熱中したとのことである。他、担当者がプログラムの中で講師や参加者が主体的で積極的なものは人気があり、参加者同士で遠足に行くなど、作業が拡大する傾向にあるという話も興味深かった。運営側がおもしろいだろうと深く考えず作ったプログラムは参加者が少なく、消滅しやすいとのことだった。ケルンにあった「多世代ハウス：LEDO」（*日本ではコレクティブハウスと呼ばれ、首都圏にあるようである）は団地のような居住地であるが、建設前から住民を募り、仲良く暮らせるように作業を通してマッチングしているとのことであった。地元の大学と協同でアート作品を作る、カーニバルという祭りに皆で参加する、ということが例として紹介された。仲良くなり、相性を知るには会話だけでなく、恐らく作業が有効なのではないかと思った。多世代住宅には老若男女、障害のある人もない人も、単身者も世帯も、動物も住民としてお互いに支えながら楽しそうに生活していた。住宅のある街が良くなるようにバス停や小道の設置を行政に働きかけているそうである。ここで紹介したことは研修の中の一部に過ぎない。作業のレンズで臨んだことで何倍も楽しめたような気がする。毎年2月に日本が派遣国の3領域で活動する青少年を招へいし、NPO マネージメントフォーラムという社会活動を行っている、あるいは行おうと考えている日本人青年と「社会のニ

ーズを把握し、活動を企画する」、「活動の広報を行う」、「活動資金の調達の仕方」という3つのトピックでディスカッションをするというプログラムがある。このプログラムは参加費が無料で審査はあるが応募条件は3領域での活動経験があり、23~40歳であることである。大抵12月中旬が申込締め切りなので、作業に焦点を当てた社会活動を行っている、行いたい海外に行くことが難しいという人はぜひ参加していただきたい。海外から招へいされた青年達にはNPO マネージメントフォーラムの後にその年に指定された都道府県に行き、3領域の日本の現場を見て、ディスカッションする「地方プログラム」がある。

今回の経験で国や地方自治体が青少年の国際交流に力を入れていることを知った。他の国も同様のようだ。私の参加した海外研修や高木の「オーストラリアン作業科学センター研修報告」³²⁾のように探せば機会が見つかるはずである。年齢制限があるが、ぜひ参加して欲しいと思う。そして日本が更に作業のレンズを通して違って見えるに違いない。

他の人と繋がる

最後に、作業の知識に関係する人と繋がることを勧めたい。私の作業科学を通じた友人達が哲学者や文献から作業を表すような言葉や文章を教えてくれる。私も見つける。作業科学を通じて知り合った人達と念願の作業科学セミナー（第13回、福岡、2009年）を開催することができた（図1）。母校も職場も違う仲間であり、共通点は作業科学に関心があるということだけである。第14回作業科学セミナーの実行委員の母体であるさとう会も同様であると思う。発足約1年で作業科学セミナーを開催することができた。素晴らしいことであると思う。このようなつながりは何かを産み出すことができると信じている。知識や実践、活動を造り出すだけでなく、社会を変えることができるかも知れない。作業科学に関心のある方々が何らかの形でつながって欲しいと思う。作業科学セミナーはその一つの形である。

つながることには様々なことがあるが、次に作業科学に貢献しそうな他学問領域の人とのつながりを提唱したい。OTR以外の人は作業科学者か、という疑問については既に日本作業科学研究会の会員にOTR外の方がいることや「作業科学」の様々な領域の研究者の貢献から伺い知ることができる。参加した研修会で出会ったOTR以外の講師に対し、作業科学セミナーで講演して欲しい、一緒に研究したらおもしろそう、と勝



図1 第13回作業科学セミナー実行委員会（福岡、2009）

手に感じることもある。これらの方々は「作業」という言葉を用いていないが、共に手をとれば作業科学はより広く、深みを増していくと思う。

私の職場が年1回開催している教育講演会のことである。介護支援相談員の友人が研修会で出会ったという鹿児島大学工学部建築学科の鈴木健二准教授が講師だった。「高齢者の暮らしやすい環境」というテーマだったので換気や採光などの専門的な話だと思っていた。鈴木准教授の話は具体的な技術的な話ではなく、高齢者向けの病院や施設の構造を研究した結果、人の生きる力を奪う環境が多く、それは建築家の責任だと話した。何とか生きる力を取り戻せるように、と願う現場の職員と話し合い、建築の専門として残さねばならない柱や壁、反対に改造できる柱や壁を工夫し、既存の施設を生きる力を引き出すような改装に取り組んでいるとのことであった。私は鈴木准教授の言った「生きる力を引き出す環境」は「作業したくなる、できる環境」と置き換えることができるのではないかと思った。グループホームでのタイムスタディー（時系列で職員の作業内容と動く範囲を調査）では、優れたグループホームの職員は入居者のプライバシーを保護しつつ、リスクを予測した動きをしているとのことだった。反対のグループホームは入居者を1カ所に集めた処遇や職員が全くなくなる空白の時間ができるとのことだった。研究の視点が独特であるという印象を受けた。鈴木准教授は、授業の中で学生に新居に引っ越す時に持って行きたいモノを調査していた。その結果は各学生が大切にしているモノのテーマが象徴されているとのことだった。第14回作業科学セミナーで基調講演をしたHocking は日用品が人々にとってどんな意味を持つか、

そして物を所有し、使用することで人々のアイデンティがどのように作られ、周囲に伝えられているかというテーマについて研究しているという報告があった³³⁻³⁵⁾。物と作業の関係の多角的な捉え方が明確になると何らかの知見になるかも知れない。他分野の研究者が行っているから作業科学が二番煎じになるのではなく、同じ現象についてそれぞれの学際分野が研究することでそれぞれの専門分野から世の中に貢献することができ、作業科学者は他の学際分野と交流していけたら理想的だと私は考えている。鈴木准教授との出会いで「建築学」に関心を持つことができた。不勉強な私は建築学と作業科学はあまり関係がないのではないかと思っていた。この機会に鹿児島大学工学部建築学科のホームページ³⁶⁾を見てみた。地域計画・建築計画の友清研究室は、「建物を造るには設計が必要ですが、その建物はどのような機能を持つべきか、どの程度の規模が好ましいか、どのような地域に配置するのが適切か等、基礎データが無いことには設計できません」とある。都市計画・歴史意匠の木方研究室には「建築や都市は一握りの専門家や一時代の技術によって造られるものではなく、多くの人々の知恵と努力の積み重ねによって成り立っています。(中略) 建築や都市に何が求められているかを考え、計画、デザインへと結びつけていきます」とあった。そして鈴木研究室は「建物とは、ただ単に建物を造れば良いものではありません。特に多くの人々が利用する公共の施設では、建物を利用する人たちにとって使いやすく、快適な空間であることが求められます」という研究室の紹介文があった。科研費(文部科学省研究費)の研究紹介では、「医療制度改革に伴う療養病床からユニット型介護施設への転換に関する研究」、「少子高齢と人口減少に対応した生活サービス拠点の再構築」、「離島・過疎地域での居住継続を可能とする小規模高齢者施設と地域ケアに関する研究」というテーマが挙げられていた。私にとって一見、建築家が挙げた研究テーマとは思えなかった。建築家はデザインや耐震性など技術的なことのみに関する専門家と勝手に思っていたからである。建築の専門家と作業の専門家が繋がると素晴らしい研究ができるのではないかと想像している。このように思えたことも作業科学に出会ったからだと思う。作業のレンズで講演を聴いていなければただの興味深い話で終わっていただろう。他にも作業科学に寄与しそうな他領域の専門家がいるかも知れない。そのような方に出会ったらぜひ紹介して欲しい。できれば作業科学セミナーに招へいできたら良いと思う。



図2 崩壊して21年後のベルリンの壁(ドイツ, 2010)

壁が壊れるとき

話はドイツに戻るが、研修中に「ベルリンの壁」を見ることができた(図2)。ベルリンの壁が崩壊したのはいつかご存じだろうか。1989年11月19日だそうである。そのとき私は作業療法学生だった。その2年前は高校生であり、ドイツは東西に分かれており、分かれていることは様々な過程を得た後の政治的信条の違いによってだ、ということを社会で学んだ。壊れるはずがない壁が壊れた、と驚愕の思いでテレビニュースを見たことを鮮明に覚えている。作業科学がいつこの世に生まれたのをご存じだろうか。同じ1989年、米国南カルフォルニア大学に誕生した。作業科学は順調な成長を遂げたのではなく、様々な困難と対座したことがあった^{1,26)}。時代が巡り巡って今がある。ドイツは東西ドイツが統一し、発展している。作業科学は多くの国、OTR、作業科学に関心のある人の間で発展している。私も作業科学と出会ったことによって発展していると思いたい。ベルリンの壁を見て考えた。私たちにはいろんな壁があるのではないかと。作業科学を学びたいけどよくわからない、作業科学の知識を生かしたOT実践をしたいけど現場や医療・介護保険のしくみが、クライアントのしたい作業ができようになりたいけど現実の制約が、作業に関する研究がしたいけど時間がない、知識がない、周囲に詳しい人がいない、大学院に行くことに踏み切れない、など多くの壁が目の前を立ちはだかる。ベルリンの壁は「壊れるときが必ず来る」と私に教えてくれたような気がする。壊れるはずのない壁は機が熟すれば壊れるときが来る。壊れた後には必ず素晴らしい未来があると私は信じている。私のホストファミリーのBarbara Sawadeは旧東ドイツ

の出身で、統一前後は苦労があったが、ベルリンの壁が崩壊後 20 年の今は自由でとても良い、と語っていた。

おわりに

どのような作業の知識が役に立っただろうか。あるいは役に立ちそうか。どのような作業の知識があれば人や社会の役に立つと思うか。本講演では 1 人の OTR としての経験について話させていただいた。先に挙げた問いに各人に答えて欲しい。その先に助かる人、社会があると思うから。

文献

- 1) Zemke R, et al (著), 佐藤剛 (監訳): 作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店. 2000.
- 2) 加藤貴行 (訳), 高橋龍太郎 (監修・解説): 自立して生活する高齢者への作業療法. JAMA<日本語版>, 6 月号, 74-81, 1998. (原文: Clark F, et al: Occupational therapy for independent-living older adults. JAMA, 278(16):1321-1326, 1997)
- 3) Jackson J, et al: Occupation in lifestyle redesign: the well elderly study occupational therapy program. Amer J Occup Ther, 52(5):326-336, 1998.
- 4) カナダ作業療法士協会 (著), 吉川ひろみ (監訳): 作業療法の視点—作業ができるということ. 大学教育出版. 2000.
- 5) Kielhofner G (編著), 山田孝 (監訳): 人間作業モデル [理論と応用] 改訂第 3 版. 協同医書出版社. 2007.
- 6) Fisher A et al: Assessment of motor and process skills. 7th edition. Three Star Press Inc. 2010.
- 7) 岡千晴, 他: 自分らしい人生を作業で描くプロセス. 作業科学研究, 3(1):29-35, 2009.
- 8) Pierce D: Occupation by design—building therapeutic power. F.A. Davis. 2003.
- 9) 日本 AMPS 研究会: クライアント中心の作業を基盤とした作業療法実践. AMPS (Assessment of motor and process skills)事例集第 3 版. 2008.
- 10) 村井真由美: 通所リハビリテーションを利用している脳血管障害を有する高齢者の作業選択パターンに関する研究. 札幌医科大学大学院保健医療学研究科博士後期課程理学療法学・作業療法学専攻作業科学分野. 2001.
- 11) Christiansen C: Identity, personal projects and happiness: self-construction in everyday actions. JOS, 7(3):98-105, 2000.
- 12) Braveman B et al: Occupational identity: exploring the narrative of three men living with AIDS. JOS, 8(2):25-31, 2001.
- 13) Laliberte-Rudman D: Linking occupation and identity: lessons learned through qualitative exploration. JOS, 9(1): 12-19, 2002.
- 14) Segal R: Occupation and identity in the life of a primary caregiving father. JOS, 12(2):82-90, 2005.
- 15) Vrkljan BH, et al: Linking occupational participation and occupational identity: an exploratory study of the transition from driving to driving cessation in older adulthood. JOS, 14(1):30-39, 2007.
- 16) Wiseman LM, et al: Life history as a tool for understanding occupation, identity, and context. JOS, 14(2):108-114, 2007.
- 17) Phelan S, et al: Occupational identity: engaging socio-cultural perspective. JOS, 16(2): 85-91, 2009.
- 18) Huot S, et al: The performance and places of identity: conceptualizing intersections of occupation, identity, and place in the process of migration. JOS, 17(2):68-72, 2010.
- 19) Townsend E, et al. (編著), 吉川ひろみ他 (監訳): 続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正. 大学教育出版. 2011.
- 20) Wiseman L, et al: Understanding occupational transitions: a study of older rural men's retirement experience. JOS, 16(2):104-109, 2009.
- 21) Jonsson H, et al: Retirement: an occupational transition with consequences for temporality, balance and meaning of occupations. JOS, 7(1):29-37, 2000.
- 22) Rozario LD: From ageing to sageing: eldering and the art of being as occupation. JOS, 5(3): 119-126, 1998.
- 23) Price P, et al: Learning to promote occupational development through co-occupation. JOS, 16(3):180-186, 2009.
- 24) Wiseman JO, et al: Occupational development: towards an understanding of children's doing. JOS, 12(1): 26-35, 2005.
- 25) Whiteford G: Artistry of the every day: connection, continuity and context. JOS, 14(2): 77-81, 2007.
- 26) 吉川ひろみ: 「作業」って何だろう—作業科学入門. 医歯薬出版株式会社, 2008.
- 27) 吉川ひろみ (訳): COPM[カナダ作業遂行測定]第 4 版. 大学教育出版, 2007.
- 28) 梅崎敦子, 他: 作業に焦点を当てた実践への動機お

- よび条件と障壁. 作業療法, 27(4):380-393, 2008.
- 29)フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』: 自己実現理論. <<http://ja.wikipedia.org/wiki/>>
- 30)吉川ひろみ: アリソン・ウィックス (Alison Wicks) 講義録〜私にぴったり: 作業科学がいかに見方を変えたか〜. 作業科学研究, 3(1):36-38, 2009.
- 31)内閣府政策統括官 (共生社会政策担当): 内閣府青年国際交流事業報告書 2010. 平成 22 年度青年社会活動コアリーダー育成プログラム (第 9 回), 2011.
- 32)高木雅之: オーストララジアン作業科学センター研修報告. 作業科学研究, 4(1):45-47, 2010.
- 33)Hocking C: A model of interaction between objects, occupation, society, and culture. JOS: Australia, 1(3):28-45, 1994.
- 34)Hocking C: Person-object interaction model: understanding the use of everyday object. JOS: Australia, 4(1):27-35, 1997.
- 35)Hocking C: Having and using objects in the western world. JOS, 7(3):148-157, 2000.
- 36)鹿児島大学工学部建築学科 教職員と研究室. <http://aae.aae.kagoshima-u.ac.jp/aae/03_staff.htm>

作業科学研究の現在と未来

Clare Hocking

ニュージーランド工科大学

上地 修 (さくら翻訳事務所) 訳

要旨：今回の発表では作業療法研究と作業科学研究の違いについて述べる。作業療法研究においては、介入や専門的職業の手段として作業が用いられ、クライアントに焦点が当てられる。一方、作業科学研究においては人々の行いやそれが健康に及ぼす影響を理解しようとする。実証的研究が増加していることや、人々の日常生活の中にみることができる作業剥奪などの概念が調査されていることなど、作業科学における傾向を説明する。作業科学がどれほど作業療法実践の基盤となっているのかを述べ、応用されている作業科学の知識について、作業療法士たちの証言にそって見ていく。今後の作業科学の発展について論じ、そして作業療法実践の範囲を拡げてくれるであろう作業科学の可能性について提言する。

米国・南カルフォルニア大学における研究開始から 20 年が経ち、作業科学におけるいくつかの動向がはっきりしてきた。専門誌「the Journal of Occupational Science」の編集者を勤めていると全体の動向がよく見えるので、そこから得た知見をこの講義で伝えていこうと思う。初めに、作業療法研究と作業科学研究の違いについて述べる。次に私が把握している作業科学の傾向について概略を示し、作業科学が作業療法実践に新たな知見をもたらすものとなっているかを考察する。そのために、文献や作業療法士らが示した証拠を活用していく。結びに、この先、作業科学により広がっていきそうな作業療法実践の分野をいくつか述べる。これから発表することは私自身の観点であり、他の研究者らは違う説明をするかもしれないことをまず述べさせていただきたい。

作業療法と作業科学の分野でこれまで行われてきた研究について比較する前に、2 つの領域の違いについて明確にしておくが役立つ。簡単に言うと、作業療法士たちは作業を用いて健康や福祉を促進する一方で、作業科学者らは健康や福祉に作業がどう影響するのかということ进行研究する。

作業を用いた健康増進について知識をもっと増やすために、作業療法研究者らは 6 つの分野に焦点をあてている：クライアント、治療、理論、治療経過、生徒、そして専門職である。それらを手短かに説明する。

作業療法士たちがクライアントに関して行う研究は、

ちょうど他の医療分野の専門家らが彼らのクライアントに関して行う研究と似ている。例えば、健康状態や作業ニーズについてクライアント自身がそれらをどう理解しているかについて調査が行われている。クライアントが治療者について感じていること、治療目的や処置について理解していること、クライアントの課題遂行に影響を及ぼす要因のこと、治療者が処方した器具を放棄する理由のことなどが研究されている。また、我々作業療法士が作業の遂行に関心を向ける一方で、他の専門家らは運動や回復、服薬遵守などに関心を向ける。クライアントに関する調査の一例をあげると、Geusgens と同僚ら (2010) は、異なった環境において身近な作業がどう変化するかを調べている。調査結果はリハビリテーション分野で働く作業療法士にとって重要で、リハビリの環境から不慣れな環境へと技能を転用できるようクライアントは支援されなくてはならないことを示唆するのである。この研究がなぜ有用かという点、クライアントを理解することに役立つからである。

作業療法研究を成す 2 つ目の構成要素は、作業療法士が用いる評価ツールの開発、妥当性、信頼性に焦点を当てる研究であり、我々作業療法士の治療戦略の開発、効果、経済性の研究である。また、作業療法の結果として、例えばクライアントが社会の他のグループに属するようになったか、何に参加するようになったか、そしてこれらの結果は何によりもたらされたのかなど、治療効果に関する研究である。一例をあげると、Rand と Eng (2010) は加速度計を用いて高齢者の手の使い方を測定した。ふ

たりは機能障害が手の働きにどう影響するのかを測定するにあたって、果たして加速度計が実用的な測定方法なのか、そして加速度計が治療結果を評価するにあたり活用できるものなのかどうかを探ろうとした。別の例で、Murphy とその同僚ら (2010) は、介入計画に関する研究において、痛みや疲労を軽減のためには一般的な活動ペーシングを用いた介入よりも個別調整された活動ペーシングのほうがさらに効果的かどうかを調べた。そのような研究は有意義であり、質の高い治療を提供することに役立つ。ほとんどの作業療法研究はそのカテゴリーに属する。

いくつかの作業療法研究は理論開発に関するものである。複数の治療概念とそれらの関係を検証したり、理論が実践にどう応用されるのかを調査したりするものだ。例えば、カナダ人研究者らの研究によりスピリチュアリティと意味のある作業との関連性がより明らかになった。高齢者にとって作業が持つ意味は高齢者のアイデンティティに強く影響されることを彼女らの調査は示したのだ (Griffith, Caron, Desrosiers & Thibeault, 2007)。その他の研究としては、諸々の作業療法理論やアセスメントと作業療法以外の分野における理論とが適合するかを調べるというものがあり、例えば世界保健機構が開発した国際生活機能分類とOT理論の整合性に関する研究がある。そのような研究は多くはないものの、理論開発に資するものであり、現実の世界において我々作業療法士が用いる理論がどの程度通用するのか、そして我々のもつ世界観が我々とは違う背景の中で培われた知識とどう関連するのかといったことを検証しようとするものである。

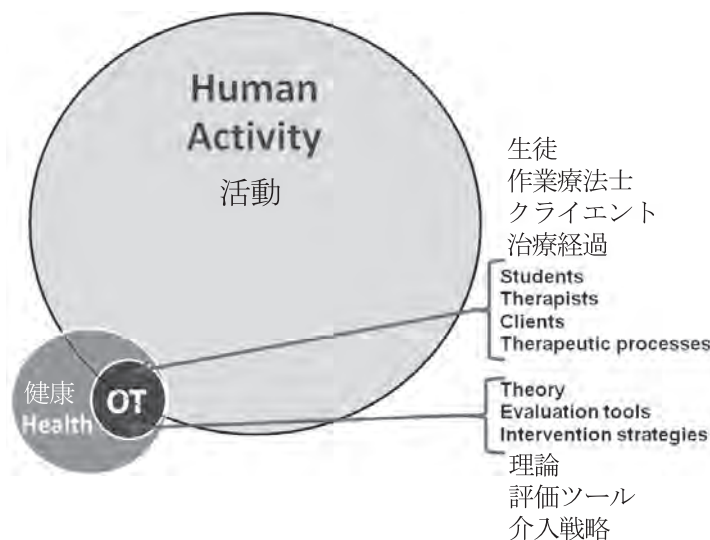
特定できた4つ目の作業療法研究分野は、作業療法士としての思考と行動のあり方についての研究であるが、これは過去の作業療法士たちが言っていた「実務技能」にかかるものだ。これは、より良い治療結果を目指した臨床推論と治療戦略をOTがどう用いるかについて研究する分野である。そのような研究の一例が Jessica Colyvas と共同研究者たち (2010) による調査であり、その中で児童を対象とする作業療法士たちがどのような方策を用いて子供たちの世話人を業務指導しているか調べている。もうひとつ、私の修士課程クラスの生徒の一人、Amanda White の研究があるが、認知機能障害のあるクライアントのアセスメントを実施している作業療法士らを対象に彼女は聞き取り調査を行い、クライアント参加型の評価がどのようにすすめられているかを明らかにした。これら

の研究は重要であり、作業療法が簡単なものではないということの説明にもなるし、また作業療法の学生たちに対して、作業療法士としての考え方や振る舞い方を理解してもらうのに役立つ。

作業療法研究の5つ目の対象には作業療法の学生の研究がある。研究者らは生徒たちの信条や知識、技能、学習過程に関心を向ける。生徒の業績、実地研修の経験、卒業後の実際の業務遂行能力などが調べられている (Holmes et al., 2010)。最近の例としてはカナダ作業療法ジャーナルに掲載されていたもので、世界作業療法士連盟が1,000時間と定めている実習時間を終えた学生の業績について調べ、学生の能力が実際に新入社員レベルに達しているかどうかを確定するためのエビデンス分析を行っている。このような研究から得られた知識は我々が作業療法教育を発展させることに役立ち、世界作業療法士連盟が定める教育の最低基準を基礎付けるものとなっている。

最後に私が確認できた作業療法研究は作業療法士に焦点を当てたものである。クライアントに関する研究と類似しているが、これらの研究は他の保健分野の専門家の手による研究と類似するものだ。内容としては、労働力問題を取り扱ったもの、専門家の人口学的データ、少数派グループ (例えば比較的女性が多い医療福祉現場における男性) の専門業界内における適応状況、スーパービジョンのような専門的な業務、業界内での新しい知識の取り込まれ方、根拠に基づいた実践の遂行、様々な状況が及ぼす実践への影響、専門性の発達と時間的推移などがある。そのような研究の例として、スーパービジョンを受けた作業療法士たちの体験について私の監督の元で行われた研究が一つある (Herkt & Hocking)。また、カナダ作業療法士会が理論化した「作業の可能化」がどう実践へと移されているかを調べる継続中の一連の研究もある。このような研究は重要であり、作業療法士が仕える地域社会において、例えば作業療法士の不足はないか、知識・技能の遅れはないか、実践能力の欠如はないかなど、取り組む必要のある重要な問題を明らかにするからである。

作業療法研究を正しく理解するために、人々の健康と福祉を向上させるべく世界規模で膨大な量の研究が行われており、作業療法研究はほんの一部を占めるにすぎないというふうに思い描いてみるのだ。健康保健分野の他の領域でも行われているのと同様、いくつかの作業療法



研究は、人間の活動、つまり人々がすることに焦点を当てる。つまり、作業療法士やクライアント、学生たちがどんな作業をしているのか、そして作業の結果はどうか、ということに関心を向けているのだ。さらには、他の保健分野の研究同様、いくつかの作業療法研究では、人間の活動に焦点を当てないものもある。人間の活動ではなく、概念や査定方法、人口統計学的傾向、実務における法制度的・財務的制約などのテーマが研究対象となっている。テーマが人間の活動であってもなくても、作業療法研究は発展し続ける作業療法実践に役立つのである。

このように、作業療法研究テーマとなるのは、一般的に、作業療法士、クライアント、学生、治療関係や治療過程、評価手法の開発、作業療法士による介入計画の効果などである。対照的に作業科学研究においては、健康に問題のある人も対象になるかも知れないが、健康な人も対象となり、また一般的には、むしろ人々の日常の作業に焦点を当てて研究するのであり、患者としての経験が焦点となるのではない。作業科学研究を包括的に説明するために、過去5年間に作業科学ジャーナルに掲載された論文を振り返り、それらを8つの研究テーマに分類してみた。

分類したテーマの中で論文の数が最も多かったのは、作業と健康の関係についてある側面を研究したものである。これらの研究の多くは作業バランスについて取り上げている。他の研究はフロー状態や身体活動など作業療法士にとっても馴染みのある概念を論じている。他には健康状態が作業に及ぼす影響について、または健康と福祉の作業因子と相関関係について調べている研究がある。

Occupational therapy research 作業療法研究	Occupational science research 作業科学研究
Participants : 研究に参加してくれる人 : <ul style="list-style-type: none"> • Therapists 作業療法士 • Clients クライアント • Students 学生 	Participant : 研究に参加してくれる人 : <ul style="list-style-type: none"> • People with a health condition なんらかの健康状態にある人たち • Other people その他の人たち
Topic テーマ : <ul style="list-style-type: none"> • Therapeutic relationships 治療関係 • Evaluation tools 評価ツール • Intervention efficacy 介入効果 	Topic テーマ : <ul style="list-style-type: none"> • Everyday occupations 日常の作業

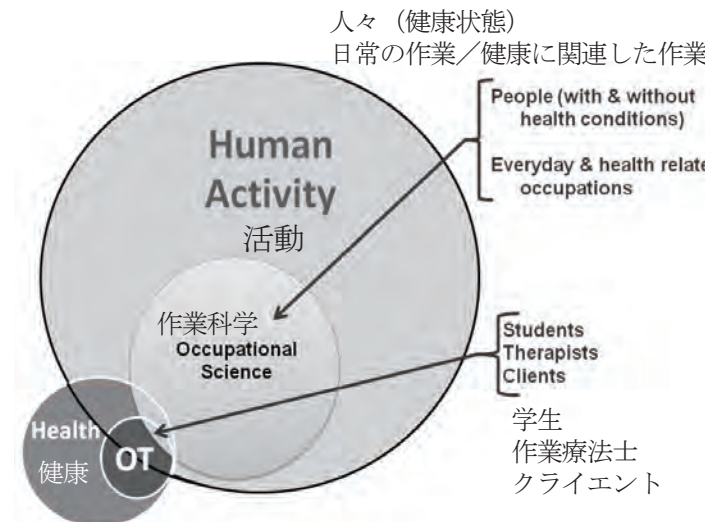
私はこの分野の日本人による論文を二つ見つけたが、両方とも研究の場が医療現場だという点が他とは異なっていた。2008年に浅羽エリックは、日本の精神科医療の場における割り箸の袋入れ作業に関する分析について発表した。この作業の参加者は患者たちであり、精神科病院の場における研究であったが、浅羽は作業を理解することに焦点を当てたのである。袋入れ作業に含まれる手順、必要とされるスキル、参加者たちにとっての意味、彼らの健康に寄与する点などであった。2010年4月に小田原悦子は、ある高齢女性が作業参加を拒んでいた状態から意味のある作業をする状態へと移行し、地域社会に復帰し、ウェルビーイングを体験することになった例を民俗学的に報告した。これも医療現場における研究ではあるが、ここでは健康的な生活へと作業的に移行したことが焦点となっている。

二つの密接に関連した作業科学の研究テーマが作業への参加と作業がもつ意味である。参加に関しては、参加者各々が自らの経験をどう語るかについてよく焦点が当てられるが、作業科学研究者らも、定年退職といった作業的移行期の性質を明らかにしようと研究に着手している。参加に焦点を当てた研究の一つに、カナダ人男性が家や家族の事に関する作業に加わるときに、どのような要因が影響するのかということを調べた和田峰子の研究がある。作業がもつ意味の研究では、行為が及ぼすアイデンティティーへの影響についてたびたび調べられているが、それ以外にも次のような特定の研究テーマにも取り組んでいる。例えば、慣れ親しんだ作業について移住者たちが移住先の地で見いだす意味の数々 (Boerema,

Russell & Auilr, 2010), 他人の存在によって意味がどのように形づくられるか (Reed, Hocking & Smythe, 2010), 作業の意味について文化はどう影響しているのか (Hocking et al., 講演当時未発表) といったテーマである。作業への社会政治的影響はまた別の焦点であり, 政治, 立法, 地域社会がもつ作業への影響がいくつか特定されている。作業的不公正を体験している人々の調査もこの種の研究に含まれている。

その他に四つの, それほど一般的ではない研究テーマがある。一つは, 人々がすることを記録することであり, 生活時間分析の手法が用いられることが多い。もうひとつは, 作業科学研究者らによって提案されている, 様々な理論的概念を発展させる研究である。例をあげれば, セルフケアや仕事, 余暇活動といった伝統的な作業分類方法に取って替わる新しい分類方法をつくり出す研究, そして, 共作業といった概念を発展させることに資する研究などがある。共作業とは二人以上の参加者を必要とする作業であり, 例えば, 美容室において美容師が客の髪を切っているような状況, あるいは遊び場において二人の子供がシーソーで遊んでいるような状況を指す。作業と場所の関係というテーマは作業科学の中では新しい研究分野であり, 例えば時間地理学や個人-他者-社会環境の有機的な相互作用というトランザクションの観点からみた場合には個人の作業への従事はどう見えるかなど, 色々な方法論が用いられている。最後に, 作業科学の発展そのものを調査してきた研究もいくつかある。

作業科学研究と作業療法研究の相互関連を概観するために私が作った図である。作業療法研究の円よりも作業科学研究の円が大きくなっているのは, その分野が人間の活動についてより広範に研究するからであるが, これら二つの円は重なっている。なぜかという, 作業療法研究に参画する学生や作業療法士, クライアントたちは作業科学研究にも参画する場合が考えられるからである。これまで論じてきたように, いくつかの作業科学研究は健康や福祉に直接関係するものであり, これらの円もまた重なっている。作業療法研究と作業科学研究は別々であると同時に重なるものであり, そのように描くことで, 作業科学が作業療法の基礎を形づくるものであり, 作業科学研究によっては作業療法実践の中から生じた疑問について答えものがあることを示そうとしたのである。



作業療法研究と作業科学の違いに私が思っていることについて述べたところで, ここからは私が把握している範囲で作業科学研究に関する5つの国際的な傾向について説明していきたい。一番目の傾向は, 理論から研究によって裏付けられた知識へと進展したことである。私が言う知識とは, 省察や文献の学術的な調査に由来する見解のことであり, 聞き取り調査や観察, 調査などで収集した実証的データの分析から得られたものではない。この傾向は, 作業がどう定義されているかを色々みても, おそらくもっとも明らかになる。様々な定義が提案される中, 研究者らは作業に関する初期の認識と向き合い, それを広げている。初期段階の仮説に異議を唱えることとなった発見の一例として, Spitzer (2003) による自閉症児らの作業に関する研究がある。いくつかの作業については, Yerxa と同僚ら(Yerxa et al., 1989, p.5)が前提とした「文化的な語彙の中に見出すことができる」ものではないということをその研究は示した。手ですくった土を落として埃を立ててみたり, おもちゃと衣類をいっしょにして, その美しさに喜びを感じるという創作活動をしてみたりといった作業に名前はないのだが, 自閉症児らは Spitzer が見たところ繰り返し目的を持ってこれらの作業に従事したのだ。作業に関する当初の解釈を拡充させた, 研究により裏付けられた知識のもう一つの例として, Reed (2010) が行った作業の意味に関する現象学的探求がある。その中で明らかになったのは, 誰かといっしょにいること, 作業へと向わせる理由(心の声)があること, 作業によって可能性が開けるのか閉ざされるのかといったことは, 作業のもつ意味と結びつくということである。

同様に、作業科学分野において先駆的な研究をした人たちは、作業と健康との間には関係があることを表明した。特にオーストラリア出身の Ann Wilcock (2001) は、この関連性は何世紀にも渡り認識されているものであることを示した。さらに最近では、研究者らはこれら二つの関係性について調査している。Erlandsson (2006) は例えば、あれもこれも色々なくてはならない日常の作業に何度も邪魔に入られているというふうに見なされると、知覚された健康と福祉のレベルが低くなるという関連性を特定した。ニュージーランドにおいて最近完成した研究には、移民者たちが新しい環境において、幸福感を生み出すためにどのような作業に従事しているかということとを調べたり (Nayar, 2006)、重度かつ慢性の精神疾患を持つ人々が回復の異なる局面において作業をどのように体験するのかということを探求する (Sutton, 2008) というものがあった。

作業科学者らにより提唱された概念を裏付ける、経験から得られた証拠も増えている。例えば、Wilcock は作業剥奪という概念を 1990 年代半ばに博士課程を終える過程で発展させた。Liz Townsend の社会的不公平に関する論文に触発され、Wilcock は作業的公正という用語を創ったのだ (Wilcock & Townsend, 2000)。それ以降、作業的不公正と作業剥奪の事例が特定され記述されている。作業的不公正の一つ事例を記録したものに Jakobsen (2004) の分析がある。その中で彼は社会的構造や業務水準により障害を持つノルウェー人女性が雇用から排除されていたと述べている。さらに Steindl と Winding, Runge が 2008 年に発表した研究に、オーストリアの難民収容所内の女性たちの生活に関する民俗学的研究があり、その女性と子供たちが経験した作業的不公平が浮き彫りにされた。別の研究例ではノルウェー国内の亡命者たちが経験した作業的不公平に関する記録が今年 8 月に発表された (Horghagen & Josephsson, 2010)。これらの研究によって、作業の剥奪と不公正を生んでしまう社会政治的な状況について様々な側面が明らかとなり、それらが及ぼす人々の生活と福祉への影響について詳細を理解できるようになった。

作業科学ジャーナルに掲載された論文を読んで感じた二つ目の傾向は、作業をみる観点が静的なものから動的なものへと変化したことである。つまり、生活のなかで起こる事態をあるがままに記述していたこれまでの文献とは違い、最近の論文では、事態がどのように起こり、そのために生活者が作業をどのように成し遂げ、その結

果として事態がどう変化していくのかという説明になっているのだ。作業のカテゴリーや関係、経験や観点を記述することから、作業の過程や変化、視点形成を考察することへとという動きがある。いくつか例をみてみよう。私が静的な観点から書かれた論文だと言っているものには Christiansen (1994) の作業の分類方法に関する考察、Pentland と Harvey, Walker (1998) による脊髄損傷の男性らの時間使用方法と健康に関する調査結果、それから交代制勤務労働者がその仕事にする理由とその物理的・社会的影響を労働者の視点から説明した Walker (1996) の報告などである。動的な観点から作業を把握しているものとしては、Jonsson と同僚たち (2000) による定年退職への移行していく人たちについて長期にわたり研究したもの、Crooks と同僚たち (2009) による多発性硬化症に罹患した大学の教官たちが雇用維持のためどのような戦略を用いているのかを記述した論文がある。

私が知る 3 番目の変化は作業科学者らは、他の学問分野で生み出された知識ではなく、作業に基づく概念を用いることにますます自信を付けてきている。フロー体験や仕事と生活のバランス、ストレスといった概念の論考は続くものの、2009 年から 2010 年の 1 年間に作業科学ジャーナルに発表された論文のタイトルを見てみると、次のような概念を採り入れることが多くなっている。列举すれば、日常の作業、リスク志向性と作業、トランザクション的機能に着目した作業、本人にとって貴重かつ満足感をもたらす作業、単独作業・複雑な作業・共作業、作業的結果、作業的発達、作業への携わり、作業的アイデンティティ、作業的知性、作業的可能性と潜在力、作業的満足感、作業的移行などである。高齢女性の食事に関する作業を研究する国際チームの一員として私自身が体験したことだが、作業や作業をする人、または作業をする環境といった作業的視点に基づいた質問になるよう私たちは努力した。それに合わせて、私たちは心理学者が論じてきた効力感や熟達といった見解あるいは人類学者が質問しそうな文化や移行についての質問は避けた。代わりに、我々は作業そのものについて質問した。何がなされたか、いつそれが始まるのか、道具は何が使われているか、作業に関わった人々は誰か、すべきことをどのようにして知ることができるのか、といったことを聞いた。また、作業が行われた環境についても尋ねた。

もう一つの傾向としては、哲学的な考察と議論の高まりである。作業科学は質量そろった長期的な研究から生み出された知識が必要となるであろうという広範な議論

を除いて、作業科学の哲学的基盤は当初から確立されていたのではなかった (Clark et al., 1991). しかし、ここ数年は、John Dewey が示したトランザクションの視点 (Dickie, Cutchin & Humphry, 2006) と現象学的伝統 (Barber, 2004, 2006) の優劣についての議論や、また作業的満足の本質について哲学的に探求するといったことが見られる。

※訳者注

ジョン・デューイのトランザクション (transaction) について、ジョン・デューイは20世紀前半のアメリカを代表する哲学者・教育者・心理学者であり、進化論思想の影響を受け、生物の有機体と環境との間には相互規定的な関係があることを論じ初め、やがて回路概念からトランザクション概念へと思想を発展させた。生物一個の行為 (アクション) →環境との相互行為 (インターアクション) →生物個々と環境の全体的システマ的過程 (トランスアクション) を提唱した。インターアクションは相互やりとりが繰り返されるだけで、機械的で発展がみられないという意味であるのに対し、トランスアクションは個体が環境から働きかけられているうちに自らを変化させ、違ったパターンで環境に働きかけるため、環境になんらかの変化が生じ、今度は変化した環境がまた個体に影響を及ぼし、それを受けて個体がまた変化する・・・という絶えず変化する、個体と環境のダイナミックな関係や発展を全体的に捉える視点のこと。

私が把握している最後の傾向としてはその領域で用いられる研究方法が着実な拡大をみせていることである。そのことは、ひとつには、他の学問分野で開発された方法を作業科学研究者らが採用していることによる。一例として、Kroksmark と同僚ら (2006) は時間地理学の手法を用いて、作業療法と理学療法の学生らが時間をどのように使っているかを調べたものがある。さらに、Clark と同僚らが1991年に予測したように、作業を理解するための、専用の新しい研究戦略がいろいろ考え出されている。研究戦略の例を作業科学ジャーナルから拾ってみよう。

- 1995年にBowdenは作業に従事する子供たちの会話を引き出す一方法を考案した。
- 2005年にWoodは認知症のある人々の時間の使い方とQOLを観察するための測定方法について概説した。
- 2006年にErlandsson と同僚らは、個人が行う日常の作業における煩雑さの度合いを視覚的に確認してみようと、一つの方策を発表した。

- 2010年にShordike と同僚らは、異文化研究の立場から作業を調査した際に、発話者により生成される意味をイーティックの観点から把握する方法について発表した。

※訳者注

イーティック (etic) について、イーティック (etic) はエミック (emic) と並び、アメリカの著名な言語学博士 Kenneth Lee Pike による造語である。Tegmemics という博士が創設した文法論が言語学の世界では特に有名であるが、その学問体系の中でエミックとイーティックは重要な概念として位置づけられている。The Summer Institute of Linguistics というアーカンソー州の農村部の小さな教室で恩師の William C. Townsend からグアテマラのマヤインディアン文化や言葉について学び、その後、博士自身もメキシコのワハカに住むインディアンの部族と生活を共にし、彼らの言語を学び、部族内に困った人がいれば援助の手を差し伸べたりしていたので、部族の人々もPike博士に信頼をよせていたという記述がある^{1,2)}。部族の人々の発話の微かな音の違いや、微妙な意味世界にも耳を傾け、やがて博士の体験的・学術的蓄積は音韻論へと発展していった。博士は言語だけではなく文化や生活にも尽きない興味を示していた。そのような文化人類学的バックグラウンドを持つ言語学者ならではの概念と言えるかも知れない。エミック (emic) とイーティック (etic) は対概念である。エミックな視点とは、発話する本人の内面にある (文化の場合はその文化の内側にある) 意味や価値観をみる視点であり、イーティックな視点とは、そのような発話を聞き手の側の理解や解釈で記述したものである。エミックは言うなればインサイダーの声であり、イーティックはそれを外側で聞いた、いわばアウトサイダーによる解釈・記述である³⁾。この二つの概念を混同させてはならないし、きちんと分けて用いることにより、個人や文化が持つ独特の意味や価値観を可能な限りあるがままに理解しようと努力するのである。一方で、意味や価値観を外側から聞いて理解しようとする (イーティックな立場にいる) 者もまた自身の価値観や意味的・文化的世界を持っているのであり、よく言われるように色眼鏡でみてしまう自分自身を自覚する必要がある。中立的な立場でエミック的な発話を理解・解釈するのは、文化人類学的な臨床の知⁴⁾を必要とし、簡単にできることではない。中立的な立場を守りながら発話者の意味世界を他者として記述しようとするとき、これらの対概念はひとつの指針を提供してくれるのではないだろうか。このように、ふたつの概念は示唆に富むものであるため、

医療現場における臨床的応用もここで検討されているということなのであろう。

- 1) The Mystery of Culture Contacts, Historical Reconstruction, and Text Analysis: An Emic Approach, Pike, Kenneth Lee, et.al. (Page viii)
- 2) SIL International homepage: <http://www.sil.org/sil/history.htm>
- 3) Etic and Emic Stories, Franklin, Karl J. SIL International
- 4) 「臨床の知とは何か」中村雄二郎 著, 岩波新書

この発表をまとめるにあたり、作業科学の創始者たちが思い描いていたように、その学問が作業療法実践の基礎を築くものとなっているかどうかを考えることも重要である。そのことを探るために、作業療法分野で一番長く出版され続けている教科書、Willard と Spackman の 2009 年版より、そこに掲載されてある引用文献のリストをみてみた。確認のために数えたのは、作業科学ジャーナルに発表された論文や様々な作業科学の教科書 (Wilcock, Zemke & Clark) に掲載されている論文、「作業科学」や「作業的不公正」といったテーマを取り扱っている論文、そして作業を特定している論文などである。「作業を実践に生かす」とか「作業を中心に据えた評価」、「作業に焦点を当てた実践」といったテーマのものは数に入れていない。健康と福祉、人々の作業への従事、作業的公正、子供の発達、健康の促進、ナラティブ、疾病と障害、環境または場所、そして文化など、それらのテーマに触れている章では作業科学に関する論文を活用していることがわかる。もっとも頻繁に引用されている研究者は、Wilcock, Townsend, Clark, Hasselkus, Zemke, Yerxa であった。

加えて、活動や作業の分析、治療関係、専門家としての推論、仕事、介護、子育て、遊び、余暇活動など、それらのテーマも作業科学の論文からの引用がみられる。筋骨格機能、運動技能、認知知覚機能、感覚と感覚処理など、作業遂行の構成要素を取り扱っている章では作業科学からの引用はなく、また、物理的環境と支援技術の修正について触れている章にも引用は見られない。この調査によって導かれた結論は、作業科学は作業療法の基礎を築くことを示すいくつかの証拠があるということだ。もし私と一しょにこの研究をさらに進めたいのなら、私に連絡して欲しい。

作業療法士たちの報告に作業科学をどのように実践に用いているかという事が書かれてあるわけだが、作業科学が作業療法に役立つ知識を生み出していることの証拠

は、そのような報告の中にもっとも説得力のある形で表されるだろう。3つの例をみてみよう。最初の例は、高齢女性が食事をどう準備するかについて調べた国際的研究から得られた作業科学の知見を実践に応用した Rachel Thibeault の記述である。食べ物に関連した作業が高齢女性にもたらす意味について私たちが見出したことを、カナダ人作業療法士である Thibeault は、彼女が手掛けるシエラリオネ共和国（アフリカ大陸西部の国）の地域開発に応用した（2006 年 7 月の私と Thibeault との個人的な会話より）。反乱軍によって捕らわれていた少年兵や "ヤブの中の女房" と呼ばれた人たちが地域社会の中に再び溶け込めるよう支援するために、急いで地元の女性たちと関係を築き上げる方法を見出すことが Thibeault にとって必要だった。

※訳者注

彼女が用いた解決手段は、その女性たちを自分のところに招待し、いっしょに食事をつくり食べることであった。その過程で、彼女と現地の女性たちの間あった垣根はなくなり、共に笑い、相互の交流と信頼が生まれたのである。そのことが発端となり、なすべき事業内容が特定され、実行に移され、暴力の被害者と加害者が共に手を組み、地域再生のために働くことができるようになった。

二つ目の例は、日用品の意味領域についての筆者の研究成果をオーストラリア人作業療法士が自身の勤務する精神科病院において応用したことである。日用品が人々にとってどんな意味をもつか、そして物を所有し使用することで人々のアイデンティティーがどのように創られ、周囲に伝えられているかというテーマの研究を私は行った (Hocking, 1994, 1997, 2000)。この作業療法士はある粗暴行為のある若い女性に対し、これらの知見を用いた。その女性は、新しい技能を学習する能力に制限があり、また、数名の看護師とは何年も顔見知りであるにもかかわらず、職員のことを誰一人として名前と呼んだことがなかった。その女性が音楽グループ・アバの曲に合わせて歌っているのに気付いて、その女性は、周囲が思っている以上に潜在的な能力を持っているのではないかと、その作業療法士は考えた。その作業療法士は私の論文をいくつか読んでいて、身近に感じることで物を与えることにより、その女性のアイデンティティーが構築されていくはずだと思ったのである。作業療法の場面でその女性がつくった絵と、外出した際に撮った彼女の写真は、彼女のベッドサイドに飾られた。その女性には自分の服、化粧品そしてアクセサリーなどが与えられ

た。少しずつであるが、変化がみられた。画期的だったのは、その女性が看護師たちを名前で呼んでいることに看護師たちが気付いたことだった。そのことを私が耳にしたときには、その女性の粗暴行為は著明に減っていて、地域にある支援付きホームへの入居が検討されていた。

最後の例は、小規模型居宅介護施設における高齢者らの作業剥奪である。作業剥奪とは、個人のコントロールが及ばない要因により、長期にわたり作業へのアクセスが制限されていることを指し (Whiteford, 2000), 高齢者から作業を剥奪することは、うつ状態や精神運動障害が高い発生率につながるという証拠がいくつかある。もう一つの証拠は、小規模型居宅介護施設の高齢者が作業に対してより高い満足を感じている場合にはより長生きする (Mozely, 2001) ことに加え、より高いレベルの活動をしており、機能低下もより穏やかであることだ。その知識を用いて、ニュージーランドにある認知症治療室にて勤務する作業療法士の Grace O'Sullivan はその治療室内に作業ステーションをつくることに取り組み、入居する高齢者が立ち寄って馴染みのある作業に従事できるようにした。不穏の度合いや手がつけられないほどの行動は激減し、Grace は 2008 年に業績が認められ受賞した。

結論と将来の方向性

私はこれまで、作業科学研究が作業療法研究と違う点について概観し、作業科学研究のこれまでの傾向について明らかにしてきた。また、作業科学研究が作業療法の実践の基礎を築くものであるということの、いくつかの根拠を示してきた。このプレゼンテーションを締めくくりにあたり、私が理想とする作業科学の方向性について、ここで少し話しておきたい。第一に、作業療法においてよく用いられる作業の詳細な学識を育むことにより、作業科学者たちは作業療法に対してある一定の役割を果たすことができると私は考えている。浅羽による割り箸の袋詰め作業の研究がその一例であり、国際的な食事に関する研究もその例だ。同じように重要なのは、健康や回復をもたらす生活様式の研究である。とても複雑な時間の使い方をしたり、幾度となく邪魔が入ったりするとストレスと結びついてしまうことを明らかにした Erlandsson の研究はよい例である。これこそは健康を促進するために作業療法士たちが用いることのできる知識なのである。もう一つは、Gail Whiteford の研究により示された方向性であるが、作業が剥奪された状況に置かれた人々がどのように順応するかを調査することである。その考えをさらに推し進めて、作業科学者たちは有益な調

査を行い、作業に関する様々な課題に直面している人々がどのように適応し反応するか調べることもできる。最後に述べたいのは、精神疾患からの回復や退職後のプラン、ホームレス問題、移住先において移民者たちが定住の過程で経験する問題など、広範な社会問題に対して作業の視点から眺めてみることを研究者たちが絶えず教えてくれるのではないかということだ。

このプレゼンテーションのしめくりに、私の楽観的な見通しを述べたい。それは作業療法研究と作業科学研究が相互補完的な知識体系を造りあげるというものだ。このような知識はある程度、現存する作業療法実践の基礎を築くものであり、現存するクライアントにサービスを提供している作業療法士たちにとって役立つものだ。さらに興味をかき立ててくれるのは、私見では、作業剥奪のような新しい概念が作業科学の中に出てくるのではないかということ、そして作業科学者たちの研究のおかげで作業療法士たちは今までの実践を超えて役割を広げることができるようになるのではないかということだ。そのような学識を携え、切迫する 21 世紀の健康問題や社会問題に技術と知識をもって対処する、公衆衛生と地域開発における中心的な存在に作業療法士たちがなるものと私は思い描いている。

文献

- Asaba, E. (2008). Hashi-ire: Where occupation, chopsticks, and mental health intersect. *Journal of Occupational Science*, 15, 74-79.
- Barber, M. D. (2004). Occupational science and phenomenology: Human activity, narrative and ethical responsibility. *Journal of Occupational Science*, 11, 105-114.
- Barber, M. D. (2006). Occupational science and the first-person perspective. *Journal of Occupational Science*, 13, 94-96.
- Boerema, C., Russell, M., & Aguilar, A. (2010). Sewing in the lives of immigrant women. *Journal of Occupational Science*, 17, 78-84.
- Bowden, S. (1995). Development of a research tool to enable children to describe their engagement in occupation. *Journal of Occupational Science: Australia*, 2, 115-123..
- Christiansen, C. (1994). Classification and study in occupation: A review and discussion of taxonomies. *Journal of Occupational Science*, 1(3), 3-20.
- Clark, F., Jackson, J., Scott, M., Carlson, M., Atkins, M., Uhles-Tanaka, D., Rubayi, S. (2006). Data-based models of how pressure ulcers develop in daily living contexts of adults

- with spinal cord injury. *Archives of Physical Medicine and Rehabilitation*, 87, 1516-1524.
- Clark, F. A., Parham, D., Carlson, M. E., Frank, G., Jackson, J., Pierce, D., Wolfe, R. J., & Zemke, R. (1991). Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. *American Journal of Occupational Therapy*, 45(5), 300-310.
- Colyvas, J. L., Sawyer, L. B., & Campbell, P. H. (2010). Identifying strategies early intervention occupational therapists use to teach caregivers. *American Journal of Occupational Therapy*, 64, 776-785. doi: 10.5014/ajot.2010.09044
- Crooks, V. A., Stone, S. D., & Owen, M. (2009). Multiple sclerosis and academic work: Socio-spatial strategies adopted to maintain employment. *Journal of Occupational Science*, 16, 25-31.
- Dickie, V., Cutchin, M. P., & Humphry, R. (2006). Occupation as transactional experience: A critique of individualism in occupational science. *Journal of Occupational Science*, 13, 83-93.
- Erlandsson, L-K., & Eklund, M. (2006). Levels of complexity in patterns of daily occupations: Relationship to women's well-being. *Journal of Occupational Science*, 13, 27-36.
- Geusgens, C. A., van Heugten, C. M., Hagedoren, E., Jolles, J., & van den Heuvel, W. J. (2010). Environmental effects in the performance of daily tasks in healthy adults. *American Journal of Occupational Therapy*, 64, 935-940. doi: 10.5014/ajot.2010.07171
- Griffith, J., Caron, C. D., Desrosiers, J., & Thibeault, R. (2007). Defining spirituality and giving meaning to occupation: The perspective of community-dwelling older adults with autonomy loss. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 74, 78-90. doi:10.2182/cjot.06.0016
- Herk, J., & Hocking, C. (2010). Participating in supervision: Strategies and consequences for New Zealand occupational therapists. *New Zealand Journal of Occupational Therapy*, 57(1), 27-34.
- Hocking, C. (1994). A model of interaction between objects, occupation, society, and culture. *Journal of Occupational Science: Australia*, 1(3), 28-45.
- Hocking, C. (1997). Person-object interaction model: Understanding the use of everyday objects. *Journal of Occupational Science: Australia*, 4(1), 27-35.
- Hocking, C. (2000, September). *Having and using objects in the Western world*. Paper presented to the Third Australasian Occupational Science Symposium, Albury, New South Wales.
- Hocking, C., Shordike, A., Vittayakorn, S., Bunrayong, W., Rattakorn, P., Wright-St. Clair, V., & Pierce, D. (Unpublished manuscript). Different ways of doing food: The methods, findings and implications of the international multisite study of preparing and sharing food. In D. Pierce (Ed.), *Occupational science for occupational therapy*. Thorofare, NJ: Slack.
- Holmes, J. D., Bossers, A. M., Polatajko, H. J., Drynan, D. P., Gallagher, M. B., O'Sullivan, C. M., ..., Denney, J. L. (2010). 1000 fieldwork hours: Analysis of multisite evidence. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 77, 135-143. doi: 10.2182/cjot.2010.77.3.2
- Horghagen, S., & Josephsson, S. (2010). Theatre as liberation, collaboration and relationship for asylum seekers. *Journal of Occupational Science*, 17, 168-176.
- Jonsson, H., Borell, L., Sadlo, G., & Rosenthal, C. (2000). Retirement: An occupational transition with consequences for temporality, balance and meaning of occupations. *Journal of Occupational Science*, 7, 29-37.
- Krokmark, U., Nordell, K., Bendixen, H. J., Magnus, E., Jakobsen, K., & Alsaker, S. (2006). Time geographic method" Application to studying patterns of occupation in different contexts. *Journal of Occupational Science*, 13, 11-16.
- Morgan, W. J. (2010). What, exactly, is occupational satisfaction? *Journal of Occupational Science*, 7, 204-211.
- Mozely, C. (2001). Exploring connections between occupation and mental health in care homes for older people. *Journal of Occupational Science*, 8(3), 14-19.
- Murphy, S. L., Lyden, A. K., Smith, D. M., Dong, Q., & Koliba, J. F. (2010). Effects of a tailored activity pacing intervention on pain and fatigue for adults with osteoarthritis. *American Journal of Occupational Therapy*, 64, 869-876. doi: 10.5014/ajot.2010.09198
- Nayar, S., & Hocking, C. (2006). Undertaking everyday activities: Immigrant Indian women settling in New Zealand. *Diversity in Health and Social Care*, 3, 253-260.
- Odawara, E. (2010). Occupations for resolving life crises in old age. *Journal of Occupational Science*, 17, 14-19.
- Pentland, W., Harvey, A. S., & Walker, J. (1998). The relationships between time use and health and well-being in men with spinal cord injury. *Journal of Occupational Science*, 5, 14-25.

- Rand, D., & Eng, J. J. (2010). Arm–hand use in healthy older adults. *American Journal of Occupational Therapy*, 64, 877–885. doi: 10.5014/ajot.2010.09043
- Reed, K., Hocking, C., & Smythe, L. (2010). The interconnected meanings of occupation: The call, being-with, possibilities. *Journal of Occupational Science*, 17, 140-149.
- Shordike, A., Hocking, C., Pierce, D., Wright-St. Clair, V., Vittayakorn, S., Rattakorn, P., & Bunrayong, W. (2010). Respecting regional culture in an international multi-site study: A derived etic method. *Qualitative Research*, 10(3), 333-355. doi: 10.1177/1468794109360145
- Spitzer, S. L. (2003). With and without words: Exploring occupation in relation to young children with autism. *Journal of Occupational Science*, 13, 67-79.
- Steindl, C., Winding, K., & Runge, U. (2008). Occupation and participation in everyday life: Women's experiences of an Austrian refugee camp. *Journal of Occupational Science*, 15, 36-42.
- Sutton, D. (2008). Recovery as the re-fabrication of everyday life: Exploring the meaning of doing for people recovering from mental illness. Unpublished dissertation, Auckland University of Technology, Auckland, New Zealand.
- Wada, M., & Beagan, B. (2006). Values concerning employment-related and family-related occupations: Perspectives of young male Canadian medical students. *Journal of Occupational Science*, 13, 117-125.
- Walker, C. (1996). Shift work: In search of the worker's perspective. *Journal of Occupational Science: Australia*, 3, 99-103.
- Whiteford, G. (2000). Occupational deprivation: Global challenge in the new millennium. *British Journal of Occupational Therapy*, 63(5), 200-204.
- Wilcock, A. A. (2001). *Occupation for health: A journey from self health to prescription* (Volume 1). London: British Association and College of Occupational Therapy.
- Wilcock, A., & Townsend, E. (2000). Occupational justice. *Journal of Occupational Science*, 7, 84-86.
- Wood, W. (2005). Toward developing new occupational science measures: An example from dementia care research. *Journal of Occupational Science*, 12, 121-129.
- Yerxa, E. J., Clark, F., Jackson, J., Parham, D., Stein, C., & Zemke, R. (1989). An introduction to occupational science. A foundation for occupational therapy in the 21st century. *Occupational Therapy in Health Care*, 6(4), 1-17.

Current and future research in occupational science

Clare Hocking

Auckland University of Technology

The presentation describes differences between occupational therapy research, which focuses on clients, using occupation as an intervention and the profession, and occupational science research which seeks to understand the things people do and how that influences their health. Trends in the occupational science research are described, including the increase in empirical research and investigating how concepts such as occupational deprivation manifest in people's daily lives. The extent to which occupational science is informing occupational therapy practice is also addressed, and evidence of occupational therapists applying occupational science ideas are given. The future development of occupational science is discussed, and its potential to help occupational therapists to extend the scope of practice is proposed.

Twenty years after its beginnings at the University of Southern California, some trends in occupational science research are evident. In this presentation, I share my perceptions, from my vantage point as the editor of the Journal of Occupational Science. To begin, I will talk about the difference between occupational therapy research and occupational science research. Next I will outline trends I have identified in the occupational science research, and consider whether occupational science is informing occupational therapy practice. To do that, I will draw on evidence from literature and from therapists. To conclude, I will talk about ways that occupational science might extend the boundaries of occupational therapy practice in the future. I need to preface my remarks by saying that I will be presenting my own perspective – other people would describe things differently.

Before I begin to compare the research traditions of occupational therapy and occupational science, it might be useful to clarify the difference between the disciplines: In simple terms, occupational therapists use occupation to promote health and well-being, while occupational scientists study occupation to understand how it affects health and well-being.

To develop their knowledge about using occupation to improve health, occupational therapy researchers have six distinct focuses: clients, therapy, theory, the therapeutic process, students, and the profession. I will briefly explain each of those.

The research occupational therapists do in relation to clients is similar to the research other health professions do in relation to their clients. For instance, there is research investigating client perceptions of their health condition & occupational needs, how clients perceive therapists, client perceptions of therapeutic goals & treatment, factors that affect clients' task performance and the reasons clients abandon the equipment therapists prescribe for them. In addition, we are concerned with occupational performance, while other professions are more concerned with exercise, recovery, compliance with medication and so on. One example of occupational therapy research involving clients is Geusgens and colleagues (2010) examination of how different environments affect people's performance of familiar tasks. The findings are important for occupational therapists working in rehabilitation, suggesting that people need assistance to transfer skills from rehabilitation settings to unfamiliar environments. This kind of research is useful because it helps us understand the clients we work with.

A second strand of occupational therapy research, I suggest, focuses on the development, validity and reliability of the evaluation tools occupational therapists use; the development, efficacy and cost effectiveness of our treatment strategies; the outcomes of occupational therapy – for instance whether clients are integrated into other groups in society and what they participate in; and what influences those outcomes. In one example, Rand and Eng (2010) used accelerometers to measure older adults' hand use. They were trying to find out whether accelerometers are a viable way to measure how impairments

affect hand function and whether accelerometers can be used to assess intervention outcomes. Another example is Murphy and her colleagues (2010), who examined an intervention strategy - tailored activity pacing - to find out if it is more effective at reducing pain and fatigue than a general activity pacing intervention. This kind of research is useful because it helps us provide high quality therapy. Most occupational therapy research is in this category.

Some occupational therapy researchers are also concerned with theory development - their work involves testing theoretical concepts and relationships, and investigating how theory applies in practice. For example, a group of Canadian researchers have added to our knowledge of the relationship between spirituality and meaningful occupation, showing that for older people, the meaning an occupation holds is very much influenced by their identity (Griffith, Caron, Desrosiers & Thibeault, 2007). Others have examined how well occupational therapy theories and assessments match other theories, such as the International Classification of Functioning, Disability, and Health developed by the World Health Organization. Although there is very little research of this kind, it is important because it assists with the development of theory, testing how well our theories work in the real world, and understanding how occupational therapists' world views relate to knowledge that is being developed in other contexts.

The fourth strand of occupational therapy research I have identified is about the ways we think and what we do as occupational therapists - what therapists in earlier times called the "art of practice". This research is about clinical reasoning and the strategies therapists use to enhance therapy outcomes. One example of this kind of research is by Jessica Colyvas and her co-researchers (2010), who investigated the strategies that occupational therapists who work with children use to teach caregivers what to do. Another example is one of my master's students, Amanda White, who is interviewing occupational therapists who conduct assessments with clients who have a cognitive impairment, to find out how therapists engage those clients in the assessment process. Studies such as these are important because they help us describe how complex occupational therapy is, and help occupational therapy students understand the ways we want them to think and how to behave as occupational therapists.

The fifth focus of occupational therapy researchers is occupational therapy students. Researchers are interested in what students believe, their knowledge and skills, and how they learn. Student achievement, the fieldwork experience, and graduate competencies are also studied. A recent example from the Canadian Journal of Occupational Therapy was an analysis of evidence about students' achievement on fieldwork placement, to determine whether they achieve entry-level competence by the time they have completed the 1,000 hours of fieldwork specified by the World Federation of Occupational Therapists (Holmes et al., 2010). Knowledge generated by this strand of research helps us develop occupational therapy education, and informs the development of the World Federation of Occupational Therapists' Minimum Standards for Education.

The final strand of occupational therapy research that I have identified is research that focuses on occupational therapists. Similar to the research that involves our clients, these studies parallel the research undertaken by other health professions that are also concerned with workforce issues such as the demographics of the profession, how minority groups (such as men) fare within the profession, professional practices such as supervision, how new knowledge enters the profession, the implementation of evidence based practice, contextual influences on practice and how the profession is developing and changing over time. Examples of this kind of research are a study I supervised that investigated therapists' experience of supervision (Herkt & Hocking), and a series of studies that are currently underway, that are exploring the ways the Canadian theories of enabling occupation are translated into practice. This strand of research is important because it addresses issues that are important to the societies we serve - whether there are enough occupational therapists and whether we are up to date and competent to practice.

To put occupational therapy research into context, I picture it is a small part of a vast amount of research being undertaken to improve the health and well-being of people around the world. Some of the occupational therapy research, like research undertaken by other health researchers, focuses on human activities - the things people do. That is, it is concerned with the occupations of therapists and clients, and students, and the outcomes of those occupations. In addition, some occupational therapy research, like other health research, does not focus on

human activities. Instead it investigates concepts, assessments, demographic trends, legislative and financial constraints on practice, and so on. Whether it is about human activities or not, occupational therapy research contributes to the ongoing development of occupational therapy practice.

So, occupational therapy research is generally concerned with therapists, clients and students, therapeutic relationships and processes, the development of evaluation tools, the efficacy of intervention strategies used by occupational therapists and so on. In contrast, occupational science research may involve people who have a health condition but also involves healthy people, generally focusing on their everyday occupations rather than their experiences as clients. See figure. To give a comprehensive account of occupational science research, I looked back over the research articles published in the *Journal of Occupational Science* over the last five years, categorising them into eight different research topics.

The most frequent category is studies that investigate some aspect of the relationship between occupation and health. Many of these studies address occupational balance; others discuss concepts occupational therapists are equally familiar with, such as flow and physical activity. Still others investigate the impact a health condition has on occupation, or occupational predictors and correlates of health and well-being. I identified two articles by Japanese authors in this category, both of which are unusual in that they are set in a health context. In 2008, Eric Asaba published his analysis of the *Hashi-ire* – packing of chopsticks by patients in Japanese mental health settings. Although the participants were patients and the context of the study was a mental health setting, the focus was on understanding the occupation – the steps involved in the tasks, skills required, its meaning to the participants and its contribution to their health. In April of this year, Etsuko Odawara published an ethnographic account of an older woman's shift from resisting participation in occupation to being meaningfully occupied, reintegrated into society, and experiencing well-being. Again, the setting was a health context, but it was the occupational transition to healthy living that was the focus.

Two closely related occupational science research topics are people's participation in occupation and the meanings occupations hold. In relation to participation, individuals' account of their experience is often the focus, but occupational

scientists also embark on studies to describe the nature of occupational transitions such as retirement. One example of a study centred on participation is Mineko Wada's (2006) examination of factors that influence Canadian men's participation in family-related occupations. Studies of the meaning of occupation often examine how the things we do influence identity, but also address specific topics such as the meanings familiar occupations hold for immigrants (Boerema, Russell, & Aguilar, 2010), how meanings are shaped by other people (Reed, Hocking & Smythe, 2010), and cultural influences on the meaning of occupation (Hocking et al., unpublished). Socio-political influences on occupation are another focus, with political, legislative, and community influences identified. Studies of people who experience occupational injustices are included in this strand of research.

There are four other, less common occupational science research topics. One strand is documenting what people do, often using time use methodologies. Another strand is research undertaken to develop theoretical concepts proposed by occupational scientists. Examples include research that generates new ways to categorise occupation, replacing the traditional categorisation of occupation as self-care work and leisure, and studies that contribute to the development of concepts such as co-occupation. Co-occupations are those occupations that require the participation of two or more people – for example, a hairdresser cutting someone's hair or two children playing on a seesaw. The relationship between occupation and place is an emerging area of research within occupational science – using methodologies such as time geography or taking a transactional view of individuals' engagement in occupation. Finally, there are studies that have investigated the development of occupational science itself.

I developed this diagram to give an overview of the way that occupational science research and occupational therapy research relate to each other. I drew occupational science research bigger than occupational therapy research to indicate its scope to investigate a broader range of human activities, but I depicted them as overlapping because the students, therapists and clients who participate in occupational therapy research might also be recruited as participants in occupational science research. As I have discussed, some occupational science research is directly concerned with health and well-being, so those circles also overlap. In depicting occupational therapy

research and occupational science research as separate but overlapping, I also intend to show that occupational therapy is informed by occupational science, and some occupational science research is designed to answer questions arising from occupational therapy practice.

Having discussed the ways I think occupational therapy research is distinct from occupational science research, I will go on to describe five trends that I perceive in occupational science research internationally. The first trend is the progression from **theories to knowledge derived from empirical research**. By theories, I mean ideas derived from reflection or scholarly examination of the literature, rather than from analysis of empirical data gathered from interviews, observations, surveys and the like. This trend is perhaps most apparent in relation to definitions of occupation. While many have been proposed, researchers are starting to challenge and extend those initial understandings. One example of findings that challenge early assumptions comes from Spitzer's (2003) study of the occupations of children with autism. That study showed that some occupations cannot be "named in the lexicon of the culture" as Yerxa and her colleagues had assumed (Yerxa et al., 1989, p. 5). Names do not exist for occupations such as dropping handfuls of dirt to create a cloud of dust or placing toys and clothes together to make an aesthetically pleasing creation, yet the children Spitzer studied repeatedly and purposefully engaged in these occupations. Another example of knowledge derived through research that extends initial understandings is Reed's (2010) phenomenological exploration of the meaning of occupation, which uncovered that meaning relates to being with others, feeling called to occupations, and the possibilities that occupations open up or close down.

Similarly, pioneering scholars in occupational science asserted that there is a relationship between occupation and health. In particular, Ann Wilcock (2001) from Australia has shown that that association has been recognized for centuries. More recently, researchers have investigated the nature of that relationship. Erlandsson (2006), for instance, identified an association between complex patterns of daily occupation characterized by a high number of interruptions, and lower levels of perceived health and well-being. In New Zealand, recently completed studies have explored the ways immigrants engage in occupations that engender a sense of well-being in their new surroundings (Nayar, 2006), and how people with

severe and enduring mental illness experience occupation at different stages of recovery (Sutton, 2008).

Empirical evidence to support concepts proposed by occupational scientists is also mounting. For example, Wilcock developed the concept of occupational deprivation in the mid-1990s, in the course of completing her PhD. Inspired by Liz Townsend's work on social justice, she also coined the term occupational justice (Wilcock & Townsend, 2000). Since then instances of **occupational injustices and occupational deprivation** have been identified and described. One instance of occupational injustice is documented in Jakobsen's (2004) analysis of the way social structures and work-place expectations exclude Norwegian women with a disability from employment. A further study published in 2008 is Steindl, Winding and Runge's (2008) ethnographic study of the lives of women in an Austrian refugee camp, which highlights the occupational injustices experienced by the women and their children. Another example documenting the occupational injustices experienced by asylum seekers in Norway was published in August of this year (Horghagen & Josephsson, 2010). All of these studies reveal aspects of the sociopolitical conditions that bring occupational deprivation and injustice into being, and detail its impact on people's lives and well-being.

A second shift I perceive in the literature is from **static to dynamic** perspectives. That is, where earlier literature addressed things as they are, some more recent work explains how things came about, how occupation is managed or how things might change. So there has been some movement from describing categories, relationships, experiences and perspectives to consideration of processes, change and how perspectives are shaped. Let me give you some examples. Amongst the literature I would describe as giving a static view, are Christiansen's (1994) discussion of the way occupations are categorized; Pentland, Harvey and Walker's (1998) findings about time use and health for men with spinal cord injury; and Walker's (1996) account of shift workers' perspective of their reasons for doing shift work and its physical and social implications. More dynamic understandings are evident in Jonsson and colleagues' (2000) longitudinal study of the transition into retirement; and Crooks and her colleagues' (2009) description of the strategies academics with multiple sclerosis use to maintain employment.

The third shift I perceive is occupational scientists' growing confidence in using concepts grounded in occupation, rather than ideas generated by other disciplines. While discussions of concepts such as flow, work-life balance and stress will continue, the titles of articles published in the *Journal of Occupational Science* between 2009 and 2010 more frequently include concepts like Everyday occupation; Risk-taking occupation; Transactional occupations; Valued and satisfying occupations; Solitary, intertwined & co-occupations; Occupational consequences; Occupational development; Occupational engagement; Occupational identity; Occupational intelligence; Occupational possibilities & potential; Occupational satisfaction; and Occupational transitions. In my own experience as part of an international team studying the food-related occupations of older women, we worked hard to ground our questions in an occupational perspective; the occupation, the person, and the environment. Accordingly, we avoided ideas discussed by psychologists, such as efficacy and mastery, or asking about culture or tradition as anthropologists might. Instead, we asked participants about the occupation itself – what is done, when it starts, the objects used; we asked about the people involved and how they know what to do; and we inquired about the environment where the occupations take place.

Another emerging trend is the rise of **philosophical discussion and debate**. The philosophical basis of occupational science was not established at the outset, apart from broad discussion that this new discipline would require knowledge generated from both qualitative and quantitative research traditions (Clark et al., 1991). Recent years, however, have seen discussion of the relative merits of John Dewey's transactional view (Dickie, Cutchin, & Humphry, 2006) and the phenomenological tradition (Barber, 2004, 2006), as well as a philosophical inquiry into the nature of occupational satisfaction (Morgan, 2010).

The final trend that I perceive is a steady expansion of the **research methods** employed in the field. In part this is due to researchers adapting methods developed in other disciplines. One example is Kroksmark and her colleagues' (2006) use of the time geographic method to explore the ways occupational therapy and physiotherapy students use their time. Additionally, as predicted by Clark and her colleagues in 1991, new research strategies have been developed specifically for the study of

occupation. Examples drawn from the *Journal of Occupational Science* are:

- In 1995, Bowden designed a way to elicit children's accounts of engaging in occupation
- In 2005, Wood outlined an observational measure of time use and quality of life of people with dementia.
- In 2006, Erlandsson and her colleagues presented a strategy to visually identify the level of complexity of individual's daily occupations
- In 2010, Shordike and her colleagues published the derived etic method to conduct cross-cultural investigations of occupations.

To bring my presentation to a conclusion, it is also important to consider whether occupational science is fulfilling the vision of its founders, as a science to inform occupational therapy practice. To find out, I looked in the reference lists of occupational therapy's oldest running text book – the 2009 edition of Willard & Spackman. I counted articles published in the *Journal of Occupational Science*, occupational science text books (Wilcock, Zemke & Clark), articles with "occupational science" or "occupational justice" in the title, and articles that identified an occupation. I didn't count things like "putting occupation into practice", occupation-centred assessment, or occupation-focused practice. I found that chapters addressing health and well-being, people's engagement in occupation, occupational justice, children's development, health promotion, narrative, illness and disability, environment or place, and culture do draw on occupational science literature. The most frequently cited authors were Wilcock, Townsend, Clark, Hasselkus, Zemke, and Yerxa.

In addition, chapters about activity or occupational analysis, therapeutic relationships, professional reasoning, work, care giving, child rearing, play, and leisure also drew from occupational science literature. Chapters that discuss components of occupational performance, such as musculoskeletal function, motor skills, cognitive perceptual function, sensation and sensory processing do not draw from occupational science, and neither do chapters that discuss modifications to the physical environment and assistive technologies. From that investigation, I concluded that there is some evidence that occupational science is informing occupational therapy. If anyone would like to collaborate with me to extend that research, please contact me!

Perhaps the most convincing evidence that occupational science researchers are generating knowledge that is useful to occupational therapists comes from therapists' accounts of applying occupational science in practice. I will present three examples. The first is Rachel Thibeault's application of the findings from the international study of older women's food-related occupations. Thibeault, a Canadian occupational therapist, took our findings about the meanings food occupations hold for older women to her community development work in Sierra Leone (Thibeault, 2002, personal communication, July 2006). To assist the child soldiers and "bush wives" captured by rebel forces to reintegrate into the community, Thibeault needed to find a way to rapidly build relationships with the local women. Her solution is to invite them to prepare and share a meal with her. In the process, barriers break down, laughter is shared, and mutual friendship and trust emerges. That sets the stage to identify and implement projects that victims and perpetrators of violence can work on together, to rebuild the community.

My second example is an Australian occupational therapist who used my research into the meaning of everyday objects in her practice in a mental hospital. My work involved investigating what objects mean to people, and how people create and convey their identity through the things they have and use (Hocking, 1994, 1997, 2000). The therapist used those ideas with a violent young woman who displayed very limited ability to learn new skills, and never addressed anyone by name, even though some of the nurses who cared for her had known her over many years. After noticing her singing along to an Abba tune, the therapist realised this woman had more potential than anyone realised. The therapist had read my articles, and decided to build up her identity by giving her objects she could relate to. The pictures she made in occupational therapy and photographs of her on outings were hung by her bed. She was given her own clothes, cosmetics, and jewellery. Slowly, she changed. A breakthrough occurred when nurses noticed the woman addressing them by name. When I heard this story, the violent behaviour was markedly reduced and the woman was being considered for placement in a supported home in the community.

My final example is about the occupational deprivation of older people in residential care. Occupational deprivation refers to restricted access to occupation for a prolonged time, due to

factors outside the control of the individual (Whiteford, 2000) and there is some evidence that depriving older people of occupation results in a high incidence of depression and psychomotor retardation. There is also evidence that older people in residential care who report greater satisfaction with their occupations survive longer (Mozely, 2001), and have higher levels of activity and slower decline in functional abilities. Using that knowledge, Grace O'Sullivan, an occupational therapist who works in a secure dementia unit in New Zealand set about installing "occupation stations" in the unit, where residents could stop to engage in familiar occupations. The level of restlessness and out of control behaviour dramatically declined, and Grace received an award for her work in 2008.

Conclusion and Future Directions

I have presented an overview of the ways in which occupational science research differs from occupational therapy research, identified trends in the occupational science research over time, and given some evidence that occupational science research is informing the practice of occupational therapy. To conclude my presentation, I will spend a few moments describing the directions I would like occupational science to take. Firstly, I think that occupational scientists could serve occupational therapy by developing detailed knowledge of occupations commonly used in therapy. Asaba's description of hashi-ire is one example; the international food study is another. Equally important is research into healthy or restorative ways of living. Erlandsson's study linking highly complex patterns of time use and multiple interruptions with stress is a good example. This is knowledge occupational therapists can use to promote health. Another research direction suggested by Gail Whiteford is to investigate how people respond adaptively to occupational deprivation. Taking that idea further, occupational scientists could usefully investigate how people who face all manner of occupational challenges adapt and respond. Finally, researchers might continue to bring an occupational perspective to a broad range of social issues, such as recovery from mental illness, retirement planning, homelessness and the settlement process that immigrants experience.

To conclude the presentation, I present a hopeful view of occupational therapy researchers and occupational science researchers developing complimentary bodies of knowledge. Some of that knowledge will inform existing practice, helping

occupational therapists to serve our existing clients. More exciting, from my perspective, is the possibility that new concepts arising in occupational science, such as occupational deprivation, and the work of occupational scientists will equip occupational therapists to extend their role beyond our

traditional practice. Armed with that knowledge, I envisage occupational therapists becoming key players in public health and community development, with skills and knowledge to address the pressing health and social issues of the 21st century.

私の作業科学

吉川ひろみ

県立広島大学

教育講演の目的は、初心者のために作業科学をわかりやすく伝えることである。初心者といっても多様なので、初心者であった私が作業科学とどう出会いどう付き合っているかを紹介することで、これから作業科学を学ぼうとする人の参考にしていただきたいと思います。

作業を探究する学問との出会い

作業科学の歴史と私と作業科学との出会いを表 1 に示した。1989 年南カリフォルニア大学に作業科学の博士課程が設置された頃、私は群馬大学医療技術短期大学の助手をしていた。American Journal of Occupational Therapy で Occupational Science を知り始めた時¹⁾には、日本の作業療法基礎研究会（現・日本作業療法研究学会）²⁾と似たようなものだろうと思っていた。1992 年に留学して、Yerxa³⁾が変数を設定して現象を単純化してとらえようとする見方（oversimplification）は、作業の理解を妨げると言っていて共感もしたが、それまで作業療法に必要だと考えた知識を否定されている気がして不安になった。その

頃 Mosey⁴⁾が、作業療法は医学や心理学など多くの基礎学問の応用科学であり、作業療法固有の基礎学問（作業科学）は不要だという論を展開しており、少なからず私も賛成だった。

1995 年の日本作業療法士協会主催の全国研修会で、南カリフォルニア大学からクラーク（Florence Clark）先生とゼムケ（Ruth Zemke）先生が来日し、作業科学のワークショップに参加し、作業科学の基礎が理解できたと思う。それは、作業科学が作業に焦点を当てた学問であるということだ。当時は、人間作業モデルやカナダ作業遂行モデルと並ぶ作業療法理論の一つだと作業科学を考える人もいたので、実践応用を目的として開発された作業療法理論と、固有の学問である作業科学との区別は重要だった。現象学、文化人類学、フェミニズムといったこれまで馴染みのなかった学問の中にある作業の知識を抜き出し発展させることも、作業科学の使命だと理解した。また作業の探究に適した研究方法には、グラウンデッドセオリーやエスノグラフィなど質的研究法があることも理解した。

表 1 作業科学との出会い

作業科学関連事項	年	私の作業科学との出会い
USC*に作業科学（OS）を学べる大学院が誕生	1989	
	1991	OS を紹介する論文を読む
	1992	Yerxa 論文，Mosey 論文を読む
Journal of Occupational Science: Australia**創刊	1993	OS ワークショップ参加
日本作業療法士協会全国研修会テーマ	1995	OS セミナー参加開始，翻訳
第 1 回 OS セミナー（札幌）	1997	USC の OS シンポジウム参加
世界作業科学者研究会設立（米，豪，加・・・）	1999	
	2000	Wilcock 講演を聞く，授業名 OS へ変更
	2002	Kielhofner 講演を聞く
	2005	大学院 OS 担当
日本 OS 研究会設立，WFOT の OS 声明書採択	2006	世界 OS シンクタンク参加
世界 OS 研究会（ISOS）設立	2007	第 2 回世界 OS シンクタンク参加

*USC：南カリフォルニア大学 **現在 Journal of Occupational Science

その後は、佐藤剛先生がいらした札幌医科大学で毎年開催された作業科学セミナーに参加し、クラーク、ゼムケ、ウィルコック (Ann Wilcock) という作業科学創始者の講義を聴く機会を得た。印象に残っているのは、ウィルコック先生の「私は作業療法士になって 30 年間、作業に焦点を当て損なってきた」という言葉だ。本当にそうだった。そして今やっと、作業に焦点を当てて、物事をみたり考えたりする所 (作業科学) ができてきたんだと思った。ウィルコック先生は Journal of Occupational Science の創刊者である。

職場の勉強会では、南カリフォルニア大学の大学院での研究や、毎年開催されている作業科学シンポジウムの講演録などを収めた「作業科学」⁵⁾を 1 章ずつ読んだ。1999 年にはロサンゼルスに行き、南カリフォルニア大学の作業科学シンポジウムに参加した。2002 年にはストックホルムで開催された世界作業療法士連盟学会のプレワークショップ「作業的公正 (occupational justice)」に参加し、米国以外の各国の作業療法士たちが自分のしていることを臨床実践 (clinical practice) ではなく、社会实践 (social practice) と言うのを聞いた。同じ学会で、キールホフナー (Gary Kielhofner) の講演も聞いた。人間作業モデル発表当初は、作業療法士に作業の知識が必要だと考えていたが、それは誤りで、作業療法士に必要なのは作業の知識ではなく、作業療法のモデル (理論) なのだと述べ、拍手喝采を浴びているのを見て、作業科学に対する反発があることを知った。2000 年からは大学の作業療法学科 1 年生の必修科目として「作業科学」を開講し、2005 年からは大学院修士課程で「作業科学」を専攻する学生の指導を開始した。

私にとって作業科学との出会いは、作業療法を見直す機会となったが、今の私の作業療法は、作業科学と同時期に出会ったカナダ作業遂行測定 (Canadian Occupational Performance Measure, COPM) や運動とプロセス技能評価 (Assessment of Motor and Process Skills, AMPS) による影響の方が大きい⁶⁾。COPM も AMPS も作業療法の特性を生かした評価法 (作業療法実践の道具) であり、作業科学とは直接関係ない。作業科学に強い関心を示す人の作業療法が、作業に焦点が当たっていないと思うことも多い。

心に残る作業科学文献

1991 年に作業科学を紹介する文献¹⁾を読んだ時には、本当にピンとこなかったが、1993 年のペニー・リチャードソンのストーリーは興味深かった⁷⁾。これは 1992

年の米国作業療学会のスレーグル講演録であり、内容を拙著で紹介した (pp.79-84)⁸⁾。脳卒中になった大学教授のペニーの人生を研究対象として、エスグラフィという手法を使って行われた作業科学研究である。作業という視点でみていくということを学べたと思う。人を作業的存在 (occupational being) として捉えることを学ぶためには、よい文献だと思う。この研究プロセスはグラウンデッドセオリーとしても紹介されている⁹⁾。

ウィルコックが提唱する、作業は人間の基本ニーズであるという文献には、社会科学研究としての重厚さを感じた¹⁰⁾。人類の進化過程での物作り、産業革命、マルクスが指摘した人間疎外概念が、現代の人間の作業ニーズをとらえる視点を提供するというものだ。人は狩猟や耕作といった作業をすることで生き延び、道具や機械を発明することで、作業の生産性や効率性を高める。楽しみや喜びを表現する芸術などの作業によって、より豊かで充実した人生を送る。これが人間であるから、作業することは人間の基本ニーズなのである。

囚人の作業に関する Whiteford の研究¹¹⁾は、作業がない状況で、人はどのようになり、いかに作業を求めるかが明らかにされていた。作業がない状況を指す作業剥奪 (occupational deprivation) という概念が打ち出された。

2004 年から数年間「作業科学」の授業で使った Pierce の教科書¹²⁾からは、作業の力を十分に知るためには、作業の主観的側面と作業が行われる文脈を考慮する必要性を学ぶことができた。この本を土台にして、作業科学入門書の第 2 章と第 3 章を書いた⁸⁾。こうした中で、ライリー (Mary Reilly) の「その気になって考えてやってみれば、もっと健康な自分になれる (man, through the use of his hands as they are energized by mind and will, can influence the state of his own health)」¹³⁾というフレーズが強く心に響くようになっていった。

作業科学における作業の捉え方

南カリフォルニア大学で作業科学を創設させた時、作業は「文化的、個人的に意味を持つ活動の集まりであり、文化の語彙の中で名付けられる」と定義された¹⁾。世界作業科学協会では、作業は「人々が家族の中で、コミュニティと一緒に、個人として毎日することであり、時間を占有し、人生に意味と目的をもたらす」と定義されている¹⁴⁾。原文を表 2 に示した。

表 2 作業の定義

- chunksof culturally and personally meaningful
集まり 文化的 個人的に 意味をもつ
activity in which humans engage that can be
活動 人が結び付く
named in the lexicon of the culture (Clark他, 1991)
名付けられた 語彙の中で 文化の
- the things people do everyday as individuals, in
こと 人々が する 毎日 個人として
families and with communities to occupy time
家族の中で コミュニティと一緒に 時間を占有し
and bring meaning and purpose to life (ISOS, 2007)
持ち込む 意味 と 目的を 生命・生活・人生に

作業科学と作業療法の関係をめぐる議論

Polatajko は、作業科学について次のように述べている (p. 91) ¹⁵⁾。作業科学は、人の作業的性質と自分の環境での経験や困難に対して、作業をすることを通してどのように適応していくか、についての研究である。作業科学は、作業的な人間理解のために、どのように多くの理論基盤を統合するかといった思考方法と知識基盤を提供する。作業科学は、作業療法士の作業的知識基盤を作り上げてきた。作業科学は、実践への応用が可能な様々なトピックについての見解やデータを作業療法士に提供し始めている。

Molke は、作業科学と作業療法との関係について大きく 2 つの異なる考えがあると指摘している (p. 94) ¹⁵⁾。Zemke と Clark⁵⁾は、作業科学は実践で知識をどのように使うかということを考えずに、作業の多面的性質を研究する学問として創造されたが、今後は作業療法の関心事と密接に関連づけて、実践の知識を発達させるべきだと考えている。一方 Mounter ら ¹⁶⁾や Wilcock¹⁷⁾は、作業療法のために作業科学が研究されるという位置付けになれば、作業科学の多くの潜在力が失われてしまうと主張する。この 2 つの考えを図 1 に示した。Molke は、作業科学が作業療法の学問的基盤を確固たるものにするために存在するのか、心理学や社会学のような学問領域としての発展を目指しているのか、そのどちらに焦点を当てるのかについてのコンセンサスがない状況を否定的に受け止める人がいるかもしれないが、こうした異なる立場からの議論や対話が成長と発達には不可欠だと指摘する ¹⁵⁾。

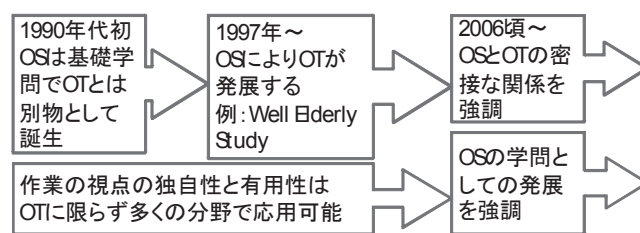


図 1 作業科学と作業療法の関係についての 2 つの考え

意味のある作業とは何か

筆者は、作業科学を学ぶ中で、作業の意味をどのように捉えたらよいか、意味のある作業とは何なのか、という疑問をもった。作業の定義に登場する「意味のある (meaningful)」は、具体的にはどのようなものなのだろうと考えていた。松田の修士論文と一緒に作成する中で、障害児をもつ母親が、さまざまな家族の作業をどのように行っているか、その作業から何を得ているのか、何がその作業を行うことを促進するのかを学ぶことができた ¹⁸⁾。さらに、筆者自身の博士論文を作成するために読んだ雨宮の著書 ¹⁹⁾に、さまざまな作業が生き生きと描かれていることを知ったが、その作業の意味をどのように記載したらよいかわからなかった。そこで、作業の意味を考えるための枠組みを開発しようと考えた。作業科学は作業の形態 (form)、機能 (function)、意味 (meaning) を研究する ²⁰⁾ という記述があることから、作業科学文献には、作業の意味が記載されていると考え、1993 年の創刊から 2008 年までの Journal of Occupational Science 誌の要旨に Occupation と meaning の語がある 50 編を対象に、記載されている作業の意味を抜粋した。その結果、作業の意味は次の 8 側面から捉えることができるという提案をした (表 3) ²¹⁾。

表 3 作業の意味を考えるための 8 側面

1. 引き出される感情
2. 手段か目的か
3. 人・場所・時間とのつながり
4. 生活習慣との関連
5. 自分自身 (アイデンティティ) との関連
6. 健康との関連
7. 社会の中で意味
8. 作業の分類

ある作業をすることで何らかの感情が引き出されたら、その作業は行為者にとっての意味をもつだろう。楽しいとか嬉しいといった快感情ばかりではなく、悔しいとか悲しいといった不快感情が生じる作業も、意味をもつ。筆者の調査では、自分にとってためになると思う作業（以下、プラス作業）では、快感情が生じる場合もあれば、不快感情が生じる場合もあった²²⁾。

作業は、何か別の目的を達成するための手段（means）になる場合もあるが、その作業をすることそのものが目的（ends）となる場合もある。筋力増強という治療目的を達成するために行う木工は手段にしかないが、木工が好きで作品完成のために作業をする場合は、その木工作业をすることそのものが目的だといえる。

作業をすることで人や時間や場所とのつながりが生まれることがある。子育てや合奏など他者と一緒でなければできない作業もあるし、作成した作品をプレゼントするとか、家族のために家事をするというように、作業が人間関係を形成・維持する媒介となる場合がある。作業するには場所が必要である。場所は物理的制約を加えたり、作業拡大の可能性を保証したりする。情報科学が進んだ現代ではインターネット上に存在するバーチャルな場所もある。また、作業を通して時間のつながりが生まれる。世代を超えて引き継がれる文化行事は、先祖から子孫への絆ともいえる。ある作業が人生に一貫して現れるような場合には、その作業をすることで、自分の過去と現在と将来がつながり、首尾一貫した人生を送ることができるかもしれない。

作業は生活を組織化する力もある。ある作業が日常に習慣として入りこむことにより、リズムのある日常生活が送れるようになる。あるいは、ある作業が既成の生活習慣を崩壊させ、新たな生活習慣を生み出すきっかけとなる場合もある。

人は自分が誰であるかを紹介する場合に、職業をいうことが多い。職業は自分自身のアイデンティティ形成に深く関与する。職業以外でも、熱中する趣味のある人は、その作業により自分を語る場合もある。作業をすること（doing）により、現在の自分が何者であるか（being）が定義される。

世界各国に作業療法が存在し、治療や健康づくりのために作業が使われるという事実は、作業が健康と関連することの証明である。しかし、作業が不適切に行われると健康を害することも知られている。過剰労働によるストレス過多や過労死は、作業が健康に悪影響を及ぼす例である。このように健康との関連で作業の

意味を考えることができる。

作業には、その作業の行為者が考える意味と、その行為者が所属する社会が与える意味がある。その作業を行うことが、所属集団の中での役割を果たすという意味をもつことがある。

作業には、さまざまな分類法があるが、すべての人や状況に共通に役立つ分類はない。しかし、人は作業を語る時に、仕事や遊び、義務や自由など、何らかのカテゴリーで表現することがある。どのカテゴリーに属するかによって、その作業の意味を表現することがある。

文献

- 1) Clark F, et al. Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. *American Journal of Occupational Therapy*, 45, 300-310, 1991.
- 2) 日本作業療法研究学会
<http://www.geocities.jp/groundstudyofot/>
- 3) Yerxa EJ: Seeking a relevant, ethical, and realistic way of knowing for occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy* 45: 199-204, 1991.
- 4) Mosey AC: Partition of occupational science and occupational therapy. *Amer J Occup Ther* 46: 851, 1992.
- 5) Zemke R & Clark F (佐藤剛監訳): 作業科学. 三輪書店, 1999 (原著 1996).
- 6) 吉川ひろみ: 作業療法がわかる COPM・AMPS スターティングガイド. 医学書院, 2008.
- 7) Clark F: Occupation embedded in a real life. *American Journal of Occupational Therapy* 47: 1067-1077, 1993.
- 8) 吉川ひろみ: 「作業」って何だろう. 医歯薬出版, 2008.
- 9) Clark F, Ennevor BL, Richardson PL (村井真由美訳): 作業的ストーリーテリングとストーリーメーキングのためのテクニックのグラウンデッドセオリー. Zemke R & Clark F (佐藤剛監訳): 作業科学. 三輪書店, 1999. pp.407-430.
- 10) Wilcock AA: A theory of the human need for occupation. *Journal of Occupational Science: Australia* 1 (1): 17-24, 1993.
- 11) Whiteford G: Occupational deprivation and incarceration. *Journal of Occupational Science: Australia* 4 (3): 126-130, 1997.

- 12) Pierce D: Occupation by Design. FA Davis, Philadelphia, 2003.
- 13) Reilly M: Occupational therapy can be one of the great idea of 20th century medicine. AJOT 16, 1-9, 1962.
- 14) International Society for occupational Science <<http://www.isocsci.org/>>
- 15) Townsend E. Polatajko H (吉川他訳): 続・作業療法の視点: 作業を通しての健康と公正. 大学教育出版, 2011 (原著 2007) .
- 16) Mounter C. Illot I: Updating the United Kingdom journey of discovery. Occupational Therapy International 7: 111-120, 2000.
- 17) Wilcock AA: Occupational science: The key to broadening horizons. British Journal of Occupational Therapy 64: 412-416, 2001.
- 18) 松田かほる, 吉川ひろみ: 障害児の母親が捉えた家族の作業. 作業療法 29 : 568-576, 2010.
- 19) 雨宮処凛: 生き地獄天国—雨宮処凛自伝 . 摩書房 , 2007.
- 20) Larson E. Wood W. Clark F: Occupational science: Building the science and practice of occupation through an academic discipline. In Crepeau, EB, Cohn, ES, and Schell, BAB Ed, Willard & Spackman's Occupational Therapy 10th edition, Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, 2003, pp. 15-26.
- 21) 吉川ひろみ: 作業の意味を考えるための枠組みの開発. 3(1), 20-28, 2009.
- 22) 吉川ひろみ, 港美雪: 作業の意味を考える枠組みを用いて検討したプラス作業とマイナス作業の比較. 作業療法 30 : 71-79, 2011.

本稿は, 2010 年の講演時の資料を基に作成した。

ある脳卒中者が経験した作業の変化～指向性～

小田原悦子¹⁾, 辻 郁²⁾

1) 聖隷クリストファー大学, 2) 大阪保健医療大学

要旨：身体障害でおこったライフクライシスの作業を理解するために、脳卒中女性をインタビューし、その経験を現象学的に分析した。脳卒中後、彼女の作業は変化し、operational intentionality（操作的志向性：自動的に起こる動作）と intentionality of action（行動の指向性：目標にむかって時間的経過の中でおこる活動）は滞った。徐々に作業に従事することによって新生活構築への可能性に気づき、行動の指向性が回復し、さらなる従事で新生活の構築がすすむにつれて、指向性はさらに回復するという変化があることがわかった。さらに、倫理的責任（他者の存在によって行動が影響されること）が、脳卒中後のライフクライシスにおける指向性を刺激することが指摘された。

キーワード：作業従事，現象学，可能性，気づき

はじめに

臨床現場の作業療法士は、クライアントが病気、障害などで困難になった生活を再構築し、より健康に生活することを目標に援助する。作業科学の研究者は、人の作業の本質、形、機能、個人的あるいは社会的意味を研究することによって臨床の作業療法に貢献する¹⁾。病気、障害により作業はどのように変化するか、変化した作業を個人はどのように経験するのか、その後の新生活構築の経過の中で、作業はどう変化するのか、解明して臨床家の役に立てることはその貢献の一つになるだろう。

作業療法・作業科学の研究者は、障害による作業の変化をとらえるために役立つ視点を提示してきた。日常生活上の機能の変化としてとらえる作業パフォーマンスの視点^{2,4)}、個人が経験する、障害前と障害後の作業従事のギャップを作業経験の視点で捉えた研究^{5,6)}、障害後の状況にどのように適応するのか、その戦略を明らかにした研究^{7,8)}がある。さらに、障害による作業従事がどのように変化したかを探索した研究では⁹⁻¹¹⁾、作業に従事し、新生活を構築することによって、クライシスを解決することが可能であることが指摘された。しかし、ライフクライシスの経過における、作業従事の変化については明らかにされていない。

本研究では、ある脳卒中後遺症者の経験から、障害によってもたらされたライフクライシスにおいて作業がどのように変化し、その変化はどのように経験されるのかを、ライフクライシスの視点と現象学的活動の

見方を使って分析する。

ライフクライシスの理論：van Genneep は、人々が、人生の節目で社会的地位を移行してゆくために取り行われる通過儀礼（例えば、青年が成人になる儀式、結婚式、葬式など）を、実際のライフコースを象徴する現象として捉え、そのライフクライシスの内容を分析し、ライフクライシスの経過中に、個人と社会との関係、及び個人の意識状態に変化がみられること、経過が進行するに従って、分離・移行・再統合の各段階があること、そして、この順序で経過すると指摘した¹²⁾。

van Genneep の各段階の特徴は、分離：クライシスに陥った人は、まず社会から離れる、移行：社会におけるその人の存在、役割は失われ、新しい存在に替わる、再統合：新しい存在に必要な作業を獲得し、新しい役割として社会に帰る、とした。新成人を例として述べると、各段階の内容には、van Genneep によれば、地域集落から辺鄙な所に連れ去られ（分離の段階）、子供としての社会的地位を失い、成人という新しい地位を与えられ（移行の段階）、その役割に必要な活動を習得し、新成人として社会に戻り新しい地位につく（再統合の段階）、が含まれる。

現象学的「人間の活動」の理解：現象学者は、人間の意識と対象の性質を理解するために、信頼性のある論理的方法を目指して研究した¹²⁾。そのユニークな点は、人間は、身体を世界に開き、知覚を通して世界と交流し、そこから経験したものに基づいて対象（世界）を知るととらえる Husserl からの姿勢であり、作業に

従事する人の視点からその経験を理解しようとするものである^{14,15)}。現象学の視点は、作業が従事する人にとって何を意味するかを理解することを可能にする点で、作業科学にとって有益である^{16,17)}。

現象学は、人間は世界（にある対象）を知覚して、働きかけ、知覚を介して世界（対象）を経験し交流しているにとらえる。そのような、我々が世界に向ける意識の性質を指向性¹⁸⁾という。人間が世界に向ける指向性には、運動の指向性の他に、情緒的、性的、言語的指向性があると Merleau-Ponty は指摘する¹⁹⁾。本研究では活動にかかわる指向性に焦点をあてる。

人間の活動にかかわる指向性には、Merleau-Ponty の提唱した「操作的指向性」と Schutz の提唱した「行動の指向性」という異なる2つのレベルの指向性があると言われる²⁰⁾。操作的指向性：われわれが、日常生活の中でほとんど意識せずに自動的、習慣的に行う運動に、常に向けられている指向性である。つまり、行為者である我々は滞りなく活動できることを当たり前として、身体を動かしながら、世界(対象)と交流して、日常の活動を行なっている。例えば、ドアを開けて、部屋から廊下に出る時、我々は、自分の背中や肩や腕の動きにはっきりとは、意識を払っていないが、ドアにぶつからずに通過する。また、自転車を操作している時に、腕、脚の動きを考えずとも我々の身体は自転車を操作する。特に意識せず、バランスをとり、膝、大腿、股関節にどのくらい力を入れるか、抜くか、身体が知っている。意識せずに身体を介して、対象の自転車を操作している。操作している時、明確に意図して身体の各部分を動かしているわけではない。これらの活動は計画、企画なしに自動的、習慣的に行われている。突然、転びそうになって、初めてハンドルを握る手や、地面を踏ん張る足を、意識する。ページをめくるときも、手首や肘をどのくらい曲げて、各指の関節を何度曲げて、どのくらいの力で紙をつまんで、右にひいて、めくろうとは考えていない、それは身体が知っている²¹⁾。我々は、通常、何の問題もなく自動的に行われることを、当たり前のこととして、身体の動きは、気にしていない。

もうひとつは、Schutz が指摘した行動の指向性である²²⁾。われわれが、これから行う行動、活動を通して将来に向ける指向性である。通常、われわれは、何か活動をしようとする時、これから自分がおこなう活動のイメージを描いている。実際にはまだ行っていないが、その未来完了形の行為を想定して、活動を計画して、行動を起こし、遂行する。例えば、セーターを編

もうと思っている時は、すでに、編んでいる自分のイメージがある。あるいは、これからウィンドウショッピングに行く時、我々は細かいことはわからなくて、こうやって何かを探して、ぶらぶら歩き、商品を見ているという、先のイメージを持っている。この指向性には、意図や計画が含まれる。その実行が行動の目的や動機となる。

目的

障害によってもたらされたライフクライシスの中で、作業従事がどのように変化し、個人が作業従事の変化をどのように経験するのかを理解することが本研究の目的である。この目的のために、ある脳卒中後遺症者の作業の変化をライフクライシスの視点と指向性の見方を使って、理解することを目指す。

方法

本研究は、ナラティブ分析の手法を使った、現象学的研究であり、ケーススタディーである。研究協力者ミチ(仮名)は夫と3人の娘がある59歳の主婦であり、脳卒中後遺症者である。7年前の脳卒中発作以来、左半身の麻痺と左無視の障害を持っている。データ収集のため、ミチに個別インタビューを5回施行した。インタビューを半構造的な構成で行い、彼女の生活史、脳卒中以来の出来事、経験したこと、日常の作業について自由に話してもらった。インタビューは録音し、逐語録を作成し、彼女の経験を深く理解するためにナラティブ分析を行った。逐語録を繰り返し読み、起こった出来事を時系列に理解し、ミチの経験した出来事と経験と作業の関係を追った。ミチが頻繁に時間を過ごす運動施設、デイケア、患者会の活動に同行し、6回の参加観察を行い、フィールドノートをつけ、データとした。ミチの経験を理解するための、補足的情報収集として、彼女の担当作業療法士に治療経験についてのインタビューを2回行った。データの内容は、本人に確認した。本研究の方法論とデータの解釈について信頼性を確保するために、質的研究を行う作業療法士とピアレビューで解釈について話し合った。本研究の研究計画は聖隷クリストファー大学の倫理委員会の倫理審査で承認された。以下に、ミチの脳卒中後の経験の分析結果を述べる。ミチの経験は、脳卒中によってもたらされたライフクライシスとそこからの解決（回復）と理解された。考察では、ライフクライシスから解決への経過をどのように理解したのかを詳しく述べ、その間の作業の変化を指向性の概念で解釈する。

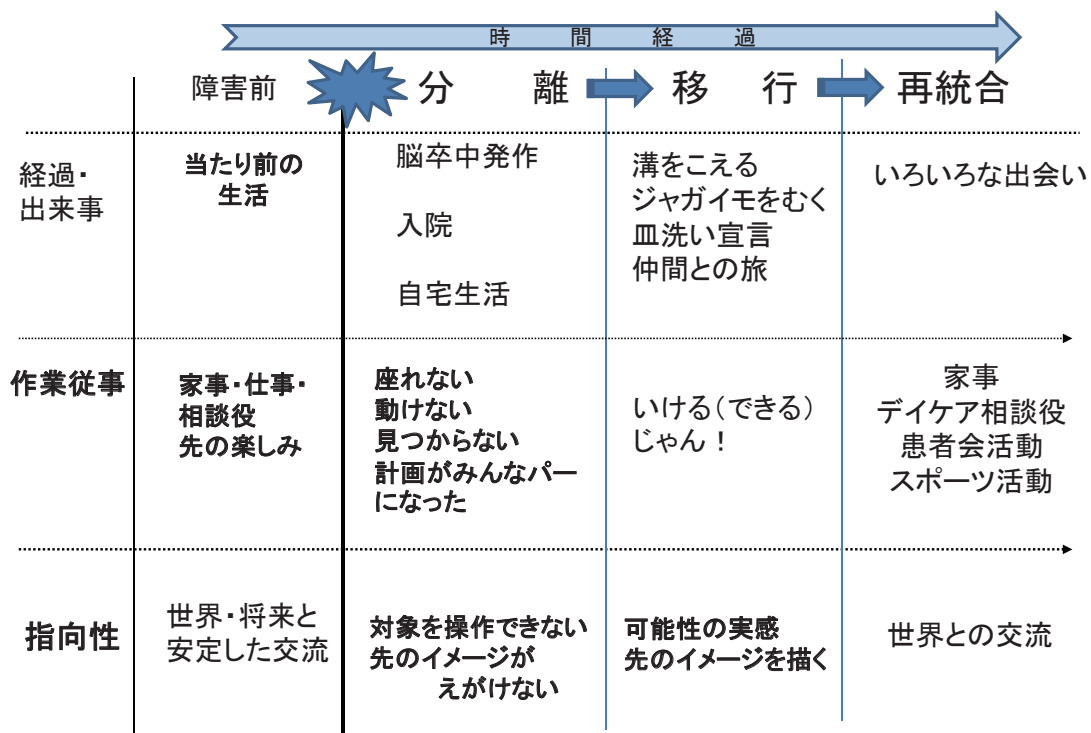


図 ライフクライスの作業の変化

結果

1. ライフクライシスの経過の3段階

データのナラティブ分析を行った結果、ミチの脳卒中後の経過は、①それまでの生活から離れ、②ある転機をむかえ、③その後新たに生活を作り始め、家族を含む社会に脳卒中前とは異なる位置で戻るといふ、van Genneep のライフクライシスの3段階：分離、移行、再統合に対応する経過をたどったと理解された。そのため、本論では van Genneep の用語である、分離、移行、再統合を使って、経過を述べる。

2. 作業の質の変化

ライフクライシスを経過するにつれて、ミチの作業従事が質的に変化していたことがわかった。さらに、その変化は、世界に向かう意識（指向性）の変化として理解された（図）。

考察

1. ライフクライシスの経過の3段階

分離：ミチは、病前には、夫と娘3人と生活し、子育て、パートタイムの仕事にがんばり、バレーボールが大好きな、活動的な女性だった。しかし、脳卒中による障害のために、それまで当たり前だった生活が、一遍に大きく損なわれ、何をどうしていいかわからなく

なった。身体が変わって、入院中には、不思議な経験をした。背もたれ付きのベッドに座っていても、身体が傾くのをどう仕様もない状態だった。退院後の自宅生活では、家族が準備した食事を食べ、テレビを眺め、友達と電話で話していた。家族に誘われると、嫌々散歩をしていた。ミチは、退院後の生活についてインタビューで、「何もできないと思っていた... 何もしていなかった。子どもたちが食事はしてくれるから、食事や言われたら... 行くぐらいで、何もしてなかったです... 外にもあんまり出てなかったですね。引っ込み思案です。」と話した。ミチは、障害前に家族や社会の中で持っていた、「家事」、「娘たちの相談にのる母親」、「パートタイムの清掃の仕事」などの役割を失い、社会からも、それまで築いてきた自分の生活史からも、離れてしまったと考えられる。

移行：自分からは何もせずに、受身的な態度で時間を過ごしていたミチに質的に大きな変化が起こり、その作業は新しい段階へと移行した。ミチは、自宅で何もせず過ごし、出された食事を食べ、誘われれば、断らず一緒に外出しても、実際には楽しめず、「おいてけぼり」と感じ、何とかしなくてはいけないと思っていた。そんなライフクライシスの中で、いくつかの出来事がきっかけで、「できるじゃん。」という作業の可能性を経験した。例えば、散歩中に溝を越えたことや、

作業療法外来のカレー作りでジャガイモをむいたことが、きっかけ（はずみ）になり、自分から主体的に日常的な作業に従事するようになった。何もできないと思っていたが、できる作業があるという可能性の気づきが、彼女の作業従事を促進したと理解される。この段階は、ミチが、社会から分離した、役割のない状態から、社会に存在する、社会で役割を持つ状態への転換を促し、（まだ明瞭には見えていない）新しい役割に向けて、必要な作業を獲得するように、生き方を転換するという、「移行」の段階であったと理解された。

再統合：弾みがつくように、ミチは家族生活の中で、できないと思っていた作業の中から、自分で探し、試し、あるいは、知り合いに声をかけられたことがきっかけになって、多様な作業に従事するようになった。ミチは、家族生活や地域における異なる場面で作業に従事することによって、社会に参加し、脳卒中以来、失っていた社会との結びつきを回復していった。ミチの作業はモザイクのように組み合わせり、彼女の新しい生活を構築していった。作業を通してミチが社会の中で新しい役割を獲得した様子を以下に述べる。

ミチは通院先の待合室で、同世代の外来患者に誘われて、脳卒中の患者会に入会していた。健康体操や障害者スポーツに参加し、身体の動かし方を繰り返し練習し、ボッチャーやフライングディスク（身障者スポーツ）の技を磨いた。練習後のお茶会では、患者会の先輩たちから話を聞くのが楽しみだった。動きの練習に夢中になり、自宅で話しているときにも、ミチは、突然新しい動きを目の前でやって見せては娘や夫を驚かせた。

会員として体操やゲームに参加するうちに、体育係のマネージャーとして、他の身障者グループとの試合の調整を引き受けるようになり、障害者スポーツ大会に代表選手として出場した。

外来作業療法がきっかけとなり調理に従事するようになったミチは、自分でも日常生活で使用する道具ややり方を工夫し、実践を重ね、調理の技術とレパートリーを広げ、おいしい料理で、自分も周囲の人々も楽しませるようになった。発作後中断していた季節の佃煮作りを再開し、知り合いに贈って喜ばれている。自分の料理の可能性に気づいたミチは、徐々に家族のために料理を引き受けるようになった。ミチは娘の結婚を祝うために、ウェディングドレスのアクセサリを作り、引き出物にするために佃煮を作った。

病前には経験したこともなかった卓球、水泳を他の人たちと楽しむようになった。知り合いに卓球を勧め

られると、担当の作業療法士が転倒の危険性を心配しても、卓球を始めたいと説得し、ついに近所の体育館に家族と通うようになった。腹を卓球台に押しつけて身体を安定させて、向かって来る球を追って楽しんだ。

通所者として通うデイケアでは、自分が積み重ねてきた日常生活の工夫や技術を他の参加者に指導し、新しく障害を持った人の相談役を果たし、スタッフを相手に、デイケアの活動プログラムの立案や運営のためにアドバイスを引き受けている。ミチはいろいろな作業に従事しては、その役割を獲得したと理解される。

van Genneepによれば、ライフクライシスにある人は、離れていた社会に戻り、それまでと異なる新しい役割につくために、その役割を遂行するために必要な作業（のスキル）を、この再統合の段階で習得する。ミチが、作業に従事し必要なスキルを習得し、患者会の体育担当マネージャー、家事担当者、結婚する娘の母親、スポーツ愛好家の複数の役割に新たについて、社会に復帰した経過は、van Genneepのライフクライシス理論と対応すると考えられた。

2. 作業の質の変化

脳卒中に遭って、ミチの日常生活は全く変わった。障害前は当たり前に行っていた日々の作業ができなくなり、家庭や地域での役割、社会との交流の大部分を喪失した。しかし、いくつかの出来事が転機となり、可能性に気づき、いろいろなことに挑戦し、作業に従事するようになり、スキルを身につけ、社会の中で新しく役割を身につけ、家族をはじめとする社会に復帰した。このライフクライシスの分離から解決（新生活の構築）への過程で、作業がどのように変化していったか、ミチは作業をどのように経験していたか、を理解するために、ここでは、指向性（見方）を使う。

脳卒中の前：ミチは、家族と5人で生活し、活発な主婦であり、パートタイム労働者だった。活動的に日常の作業に従事することは、当たり前のことであり、彼女は、生活を楽しんでいた。ミチは、調理、洗濯の家事仕事、娘の相談役、パート勤務の掃除、新聞配達、自動車の運転、ママさんバレーなどの日常の活動に従事し、もうじきやってくる娘の成人式の準備を楽しみに計画して生活していた。

脳卒中がもたらしたライフクライシスにおいて、ミチが日常の作業をどのように経験し、作業がどのように変化したのかを理解するために、活動に関わる2つのレベルの指向性（操作的指向性と行動の指向性）に

について検討する。

分離：脳卒中後、入院、及び退院後自宅生活の時期
1) “不思議な”経験：ミチは、入院中に身体が麻痺し、左側を無視していた時の経験を、インタビューで振り返って次のように話した。

何が何かさっぱりわからないじゃないですか。自分でもわからないし。で、入院してても、前の方たちはベッドからすっと下りて、トイレもすっと行って、パッと帰ってきて、ベッドにでもすっと上がられるんですよね。「ええ？なんで、すっと上がれんの？私、上がれないのかな？」って、そういう気しかなかったんです。自分でも、リモコンで上げ下げ、あれ（著者注：電動ベッド）があっても私は座ってられなかったんです、全然。食事の時も挙げてもらっていたんです。

食べ物（カレーライス）でもそうやって、テーブルのお盆にのってくると、こっちの左が見えないんですよ。ほいたら（そしたら）、自分の好きなものでも、何でもそうですけど、お隣の方を見ると、いや、果物もついててね、すごいいいな。私ないわと思ったり...

最初のナラティブで、病室で背もたれ付きのベッドに座っているときに、座位バランスを維持できず、身体が傾いた経験と、同室の患者が、ベッドから起き上がり、トイレへ歩いて行くのを見ながら、自分（の身体）はそうならないという、それまでにない経験、不思議な感じを、インタビューで語った。2 番目のナラティブも、食事時に配膳された皿の左にあったカレーや果物を見落としていたことに後で気づいたときに感じた不思議な経験だった。

ミチは、脳卒中になる前は、自分でははっきり意図しなくても、身体が自動的な運動で、バランスをとり、手足を動かして室内を移動し、視覚でとらえたリングに手を伸ばしていた。つまり、操作的指向性を通して、対象に対応して、世界と交流していた。それは当たり前のことだった。しかし、脳卒中後は、この自動的運動として世界に向かっていった操作的指向性が世界に向かって行かないことに、ミチは不思議な経験したと理解される。

2) 消えた将来の作業

脳卒中になる前、ミチは、近い将来に娘の成人式の準備をするのを楽しみにしていた。娘のために着物

の生地や帯を選び、自分が娘に着つけるのを楽しみにしていた。我々は、日々の生活の中で、将来に自分とする作業のイメージを描きながら生きている。障害前は、ミチは行動の指向性を通して将来と交流していたはずだが、障害後、彼女の将来の作業のイメージは、どうなったのだろうか？ミチはインタビューで、脳卒中後の経験を次のように話した。

今まで子育てやってたのが、やっと今、手離れて、やっとこれからやなって、いう時だったからね.... 子どもが3人いるんですよ、娘ばかり、.... あの時（脳卒中になった時）一番下の子が高校3年生でしたから、成人式のとき、こないしだろうとか、考えたところあるじゃないですか、と思ったのが、全部ことごとくパーになって、してやられへんし。

ミチは脳卒中前には、これから実行するいろいろな作業のイメージを描いて、生活していたが、脳卒中後には、すべて喪失する経験をしたと考えられる。近い将来、娘のために成人式の着物を選び、着つけることを、当たり前のこととして、思い描いてきた。このナラティブで述べられたのは、その行動のイメージが描けないという経験だったと理解される。つまり、(世界の一部である)将来と交流する行動の指向性が滞って、将来に自分のイメージを描くことができなくなった経験だったと理解される。将来に橋がかけられない、希望が持てない経験と考える。ミチは、自宅に帰ったあとの生活については、次のように話した。

そんなに早く起きてませんでしたね。ほんまにブラブラブラブラしてましたね、何にもしないし。ーご飯ができたらご飯を食べて？

そう。ほんで、ゆっくりで後はもうテレビなんか見る。子どもたちがちょっと今日はお天気いいから、ちょっと散歩に行こうとか、..... ーそれは、娘さんが、「行こうよ」みたいな感じですかね。

そうですね。子どもとか、主人とかが連れていってくれましたね。（自分から）行こうというのは全然なかったですね。

このナラティブから、退院後の生活で、ミチは、出された食べ物を食べ、散歩や買い物に誘われたら、嫌々について行ったことがわかる。脳卒中以前には、同じ買物をするときにも、ミチは自分が買い物しているイ

メージを持ってその活動に従事したはずだが、嫌々行動しているこの時は、先に何かをしようと、イメージを描いて活動に従事していたのではなかったと理解された。世界へ向かう行動の指向性が滞った状態だと考えられた。さらに、彼女は、このような買い物の経験を「家族は楽しんでいて、(自分の経験としては)置いてけぼり」と、表現した。彼女の主体性の欠如とともに、(家族とともに行動しているにも関わらず)社会的交流の欠如を経験したと理解される。

移行：自宅生活、外来作業療法、患者会活動の経験
出された食事を食べ、TVを見てぶらぶら過ごし、誘われれば嫌々散歩に出るという、受身な態度で生活していたミチに、大きなターニングポイントがやってきた。いくつかの出来事が質的な変化を彼女の生活態度にもたらしたことが、これから出てくる彼女のナラティブから明らかになる。これがきっかけになり、ミチは様々な作業に従事し、新しい生活を構築し始めた。ミチを移行へ導いたいくつかの出来事と質的变化について述べる。

出来事① 溝を越える：ミチは、あるとき、いつものように家族に誘われて散歩にいった。事前には予想していなかったが、溝を越えた時のことを次のように話した。

「あ、いけるじゃん」って。「ああ、こんなのできるんか」と思うようになってくる。洗濯物を(家族に)隠れてしよう(取り込もう)とするんですよ。

実際に溝を越えた経験から、これまでなかった可能性に気づいたことがわかる。さらに、家族に隠れて洗濯物を取り込むという日常の作業へと動機づけられたことが理解される。この気づきから、将来の生活の中で、歩いて活動する自分のイメージを持つようになったと理解される。病前当たり前だったが、一度失っていた作業の可能性が彼女の中に再び生まれた瞬間であり、将来との交流が可能になった経験であると考えられた。そして、脳卒中の発作以来、ミチが喪失していた行動の指向性が回復し始めた瞬間であるとも考えられる。溝を越えたという可能性の気づきは、ミチに自動的な歩行という運動を日常の中で繰り返し実行するように促し、いろいろな作業に従事して、将来との橋渡し、社会との橋渡しという意味ある作業の機能を実現していったと考えられる。

出来事② 皿洗い宣言：ミチは家族との生活に戻ったが、依然のように、夫や娘に頼りにされたり、相談を受けることはなく、一緒に買い物に行っても、「置いてけぼり」と感じていたとインタビューで話していた。そのような日常の状況で、ミチは夕食後に皿洗いを始めると宣言したことを話した。

(夕方、家族は)疲れて帰ってきて、(私は)何にもできない。じっとして家にいる・・・少しでも、何か、食事の用意でもしとったら、ちょっとは楽かなあと思ったんですよ。何もできないけど、「後片付けだけでも私がするわ」、ということで(夕食後の皿洗いを)し出したんです。

仕事から帰った家族の疲れた表情が、ミチを、家族のために、皿洗いをしようと動機づかせたことがわかる。家族という(自分以外の)他者の存在が、ミチの行動をはずませたと考えられる。他者の出現や、他者の健康・幸福のためにという動機で、人は刺激され、行動に促されることがあると現象学者の Levinas が指摘した²³⁾が、家族の健康・幸福のために、という動機が、それまで滞っていた彼女の行動の指向性を解放し、ミチを皿洗い宣言に導いたと考えられる。

ミチの夕食後の皿洗いは、休みなく続いた。ミチは毎日夕食後、車いすから立ち上がり1枚の皿を右手で洗い、座ってひと休みし、次の一枚を洗う、を繰り返した。徐々に、立位の耐久性も改善し、一度立つと数枚の皿を洗えるようになった。皿洗いが日課になり、日常生活の自動的な作業に変化する中で、ミチの操作的指向性は日常生活の中で開放されて(回復して)いったと考えられる。

出来事③ 作業療法外来でじゃがいもをむく：ミチは脳卒中発作以降、調理はできないと思い、家族まかせにしていた。つまり、このときミチは、調理する自分のイメージを描けなかったと考えられる。娘が作業療法士に相談し、作業療法外来で初めて調理することになった。ミチの選んだ献立、カレーを作るために、作業療法士がテーブルの上に準備した釘付きまな板と包丁、ジャガイモを目の前にした時の経験を、ミチは以下のように話した。

(カレーを作るためにジャガイモをむくことは)わかっていても、どういう風にしていいかわかんないわけですよ。包丁握ったじゃなくて、どういうふうにし

たらよいか、皮のむき方もわからないし、そうかと言って、釘あれしなくても、わかんないじゃないですか。……

先生が来て「こんな風に、してはるよ、みんなは。」と。(作業療法士は、目の前で、釘付きまな板にジャガイモを刺し、右手に持った包丁でむいて見せた。)

それで、ああ、そうなんだと、初めて、そこでは、包丁でむいたの。

左手が使えないので、じゃがいもはむけない、料理はできないと思っていたミチは、片手動作でじゃがいもがむけるところを見て、自分で実際にやってみて、その可能性に気づいた。この時のミチの経験を分析すると、いままで知らなかった道具とジャガイモを目の前にして、むき方がわからずに、困っていたが、実際に新しい方法を経験することによって、ああ、そうなんだと、可能性に気づき、自分が調理をするという将来のイメージを持つようになったと理解される。

作業療法外来のじゃがいもむきをきっかけに、ミチは、日常的に料理をするようになった。始めた時は、ピーラーを使った皮むきは不器用なぎこちない動きだったが、後には、「そんなん、ピャピャーですわ。」と彼女が表現するくらいに自動的な動きになり、日常的な調理を可能にした。ミチが、実際に身体を使って対象と交流した経験を通して可能性に気づき、生活の中でその作業従事が繰り返され、習慣的動作になっていったことが理解される。妨げられていた操作的指向性と行動の指向性が解放された経験だったと考えられる。

出来事④ 仲間との旅行

ミチにとって、患者会の集まりや活動に参加することは、どのような経験だったのだろうか。とても意味のある経験だったことが、以下のインタビューからわかる。

ほら、みんな同じ障害者じゃないですか？・・・自分だけじゃなくて相手もおんなじ身体じゃないですか。だから、相手の気持ちもだいたいこうわかるし。

みんながそういうふうなあれがあるから、なんていうのかな、無茶なことも言わないし。なんかしてても、「あ、それで大丈夫だよ。ゆっくりしいや。」と。

言いたいこと言ってもみんながそれを受け止めてくれるじゃないですか。

気を使わなくて済む。みんなね。

患者会の仲間との活動は、彼女に「大丈夫」「ゆっくり」「うけとめられる」、居心地のよい、経験だったと理解される。どうしてそんなに意味のある経験なのだろう？インタビューで、ミチは、患者会の仲間と行くグループ旅行と、健常者相手のツアーに夫と参加した時の経験を対比しながら、行きたいツアーについて話をした。そこには、作業を可能にする経験の秘密、つまり、将来の作業を生み出す可能性が見いだされた。

ほーんとに、元気な人とツアーなんか行ったら、疲れますもんね。

元気な人と、私、ツアー行ったんですよ。やっぱり、普通のツアーじゃないですか。何時までに集まれと言われたら... みんなに迷惑かけたらいかんというのがああるから... 必死じゃないですか、付いていくのに。迷惑かけたらあかんというのがああるから... 主人も気を使うじゃないですか？

ここ(患者会の旅行)はそうじゃないからね。

ここに対比された、二つの旅の違いは何だろう？一番目に挙げた旅は、自分の動きがそのツアーの速度に合わず、楽しむ余裕もなく、楽しめなかった。もう将来にそのイメージを描けなかった作業だと考えられる。もう一つは、自分の活動のテンポが合っているから、将来のイメージが描ける作業だったから、ミチは、そこに可能性を見つけることができたと考えられた。

ここで問題にされた作業の特徴は、自分の活動のテンポやリズムが、他者のそれと合う経験である。ここでミチが経験した作業は、Csikszentmihalyi が示した、挑戦とスキルが拮抗するフロー(その個人の最大のスキルを使って自分の活動に没頭する)経験ではなく²⁴⁾、スキルに十分な余裕があり、ゆっくりした速度の、社交的な要素も含む作業が表現されている。ミチは、テンポ、リズムを共有できる仲間との作業を経験して、自分が受け入れられ、安心感を味わって、また、旅行に行こうと、将来に旅する自分のイメージを描くことができたと考えられる。

身体を使った作業の経験を通して、可能性に気づいたことがきっかけになり、行動の指向性が将来へと向かい、ミチは先の作業のイメージを描くことができるようになっていったのだろうと考えられる。可能性の気づきによって、弾みがついた作業が、繰り返して従事されることによって、習慣的自動的な動きになっていくことは十分に考えられる。

再統合：いろいろな活動に参加しては、社会的な位置（役割）を獲得しながら、構築した新しい生活に、ミチはどのような意味を持たせているだろう？

元気なころは、まさかと思うような人と、患者会でも、友達もみんなそうじゃないですか、仲間もね、普通元気やったら、すれ違ってもわからない人ばかりじゃないですか。それが、今では、いろんなことわかり合って、知り合って、家族とも仲良くなったりしてる中で、患者会でも、そうですし、スポーツも、まさか、こんなできるなんて思わなかったのが、普通にやってるじゃないですか。

障害がもたらしたクライシスを乗り越え、作業に従事しながら新しい社会的存在になっていった経験を、障害が運んできた人々との出会いと楽しみという意味付けをしたと考えられる。

結語

障害によりライフクライシスに陥った個人の作業の変化を、ライフクライシスの視点と指向性の視点で分析した。その個人と社会との関係の変化と当たり前だった活動（身体を通して、自動的な動きとして世界と交流していた活動）、自分の活動のイメージを通して将来へ交流していた指向性の明らかな変化を見つけた。障害によるライフクライシスにある個人は、二つの活動の指向性が滞って可能性を持てない経験をすると考えられる。作業を通して新しい生活を構築するためには、ライフクライシスにある人が、「あ、いけるじゃん」と、将来のイメージが浮かんでくるような、作業を探し、提供することが求められる。そのような瞬間のために、その人が世界と交流するために使える自動的な運動、その人の将来の行動として浮かんでくる作業とともに探す努力が求められると考えられる。その作業には、その人の培った生活史、日常の作業の連続性をつなぐ可能性があるかもしれない。

文献

- 1) Clark F. Wood W. Larson E: Occupational science: Occupational therapy's legacy for the 21st century. In Neistadt M E. Crepeau E B (eds), Occupational Therapy, 8th. Lippincott, 13-21, 1998.
- 2) Nelson D: Occupation: Form and performance. Amer J Occup Ther 50: 775-782, 1988.
- 3) Fisher A. Kielhofner G: Mind-brain-body performance subsystem. In Kielhofner G (ed), A model of human occupation: Theory and application. Lippincott, 83-89, 1995.
- 4) Law M. Steinwender S. Leclair L: Occupation, health and well-being. Canadian J Occup Ther 65: 81-91, 1998.
- 5) Clark F: Occupation embedded in a real life: Interweaving occupational science and occupational therapy, Amer J Occup Ther 47: 1067-1078, 1993.
- 6) Eriksson G. Tham K: The meaning of occupational gaps in everyday life in the first year after stroke. OTJR, 30: 184-192, 2010.
- 7) Jackson J: Living a meaningful existence in old age. In Zemke R. Clark F (eds), Occupational science: The evolving discipline. F A Davis, 339-361, 1996.
- 8) Frank G: The concept of adaptation as a foundation for occupational science research. In Zemke R. Clark F (eds), Occupational science: The evolving discipline. F A Davis, 47-56, 1996.
- 9) 小田原悦子: よい老いのためにウチを作る. 作業療法, 27 (4): 394-402, 2008.
- 10) Odawara E: Occupations for resolving life crisis in old age. JOS 17: 14-19, 2010.
- 11) 小田原悦子, 坂上真理: 高齢期の危機と気づき—ユリとハナの新生活構築. 作業療法ジャーナル, 44 (8): 873-878, 2010.
- 12) van Gennep A: The rites of passage. The University of Chicago Press, 1960.
- 13) Barber M: Occupational science and phenomenology: Human activity, narrative and ethical responsibility. JOS 11: 105-114, 2004.
- 14) Merleau-Ponty M: The phenomenology of perception. Humanities, 1962.
- 15) 13)と同誌
- 16) 13)と同誌
- 17) Clark F: Phenomenology and occupational therapy. 作業療法, 21(特): 66-69, 2002.
- 18) 13)と同誌
- 19) 13)と同誌
- 20) 13)と同誌
- 21) Merleau-Ponty M: The phenomenology of perception. Humanities, 1962.

22) 13)と同誌
23) 13)と同誌

24) Csikszentmihalyi M: Flow: The psychology of optimal experience. Harper & Row, 1990.

Change of occupation experienced by a stroke survivor ~Intentionality~

Etsuko Odawara¹⁾, Iku Tuji²⁾

1) Seirei Christopher University, 2) Osaka Health Science University

To understand occupation in life crisis brought on by physical disability, I interviewed a woman with stroke and conducted a phenomenological analysis of her experience.

After the stroke, her occupations had changed: operational intentionality (automatic behavior) and intentionality of action (action emerging for a purpose across time) were disrupted. Gradual occupational engagement in everyday life prompted awareness of the possibility to establish a new life, and intentionality of action. Through occupational engagement, her new life was established and intentionality increased. Also, ethical responsibility (behavior influenced by the other's existence) was found to promote intentionality in life crisis after stroke.

Key words: occupational engagement, phenomenology, probability, awareness

幼児の作業の可能化を目指す幼稚園教員との協働的アプローチ ～作業療法士が提供する情報の扱い方に焦点をあてて～

仲間知穂¹⁾，酒井ひとみ²⁾

1) 琉球リハビリテーション学院，2) 関西福祉科学大学

要旨：本論文は，地域の幼稚園・小学校にボランティア作業療法士（以下 OT）として行った巡回相談について，幼稚園の 1 教員への支援を振り返る形で，OT の情報の扱い方に焦点を当てて考察を深めた．OT は教員自身が幼児に感じる問題を解決するための力を持てるよう，エンパワーメントを意識した取り組みを行なった．その実現には，教員が幼児に対して願っていた意味のある作業を選択し，その実現に向けて教員自身が問題解決に参加していけるための情報の扱い方が重要であった．この情報の扱い方とは，介入初期に OT と教員が同等なパートナーであるという立場を明確にすること，教員が願う幼児の作業について無知の姿勢で聴くこと，教員が幼児の作業を冷静に選択できるよう問題を外在化すること，さらに親しみや所有感を持てる情報提供の工夫に特徴があることが分かった．

キーワード：エンパワーメント，情報共有，クライアント中心，協働

はじめに

筆者は作業に焦点を当てた作業療法の関わりを伝えるために，過去 2 年間地域の幼稚園にボランティアとして週 1 回の巡回相談を行ってきた．Polatajko ら¹⁾は Miller(1992)の研究から，意味ある作業は，成長と発達を促進する要となる役割を果たしていることを強調しており，筆者も子どもが作業を実現していけることを大切にしている．教育機関においては，子どもの作業の実現に向けて，課題や環境を主となって調整することを担っているのは教員である．そのため OT は，教員と協働し，子どもの作業の可能化を目指し関わってきた．

しかし作業の可能化を目指した協働的アプローチについて，実践では上手くいかずに悩むケースも少なくない．クライアント中心の実践について，パートナーシップとして意思決定に加われるだけの十分な情報提供の重要性など情報の共有について述べたものはある²⁾が，実際の具体的な介入方法については不明瞭な部分も多い．今回筆者は教員と協働し子どもの作業の可能化を幾つか経験することができた．それらのケースを振り返ると，共通点があることがわかった．それは，協働していく教員が問題を感じる幼児の作業に焦点を当て，その問題解決に向け情報を共有することであった．

そこで本論では，スムーズに教員との協働的アプ

ローチがおこなえたケースについて，OT の情報の扱い方に焦点を当てて紹介し，考察を深めたい．

ケースの紹介

A 君³⁾，5 歳，男児．3 歳の時呼び掛けに対し反応がないなど気になる点があり，小児発達センターを受診し自閉症と診断される．保護者の希望で一般幼稚園に入園．教育委員会も特別支援員を 1 名担当する体制づくりを実施した．在籍している幼稚園は，単年制で，隣接する小学校へ入学する前の修学準備として位置づけられている．

OT 評価・介入

1. OT インテーク（OT の目的と役割の共有）

作業療法開始時，担任教員 B と OT がパートナーとして関係を築くことを目的に，教員 B に以下の OT の目標と役割を伝えた．

「学校生活には，その子が期待されている作業（勉強・友達と協力して掃除することなど）やしたいと感じる作業（友達と一緒に遊ぶこと，先生に褒められることなど）があると思います．この『作業』をおこなっていけることがその子の健康的な学校生活に重要です．『作業』は，その子らしくいられること，子ども達が自ら成長していくことを可能にします．作業療法では，子ども達が『作業』をおこなっていけることで健康的

表 1：対象幼児 A 君に対する介入前の教員 B の様子
A 君⁴⁾に対する教員 B の様子 (XX 年 5 月 28 日)

教員 B は障害児教育の経験はなく、医療職種と仕事をするとも A 君が初めてであった。作業療法についての知識は全くなかった。

教員 B は自閉症の A 君に対し、自閉症の本を読み対応を模索していた。幼稚園で期待している活動の参加はできなくても仕方が無いと考え、A 君の安全のためだけに常に側に付き、問題行動に対し抑制を行っていた。

な学校生活を営めるということを大切にしています。そして、このことの実現に教員が力を持てることを目標にしています。そのため、OT は、教員が問題を感じている幼児の作業に対し、“どうしてできないのか” “どんなことに困っているのか” など、OT がわかることを教員に伝えることで、教員自身が支援を考え行っていけるようお手伝いします。」

2. 介入前の教員 B と対象幼児 A 君の様子

教員 B は問題に感じる A 君の行動が全て自閉症によるものではないかという漠然とした不安を抱き、期待したい作業とその問題の解決策を持てずにいた(表 1)。そのため OT は、教員 B が A 君に期待している作業を明確にしていく必要性があると感じた。

3. 教員 B が問題を感じる A 君の作業遂行上の問題の明確化

OT は教員 B に、A 君に感じる問題と目標についてカナダ作業遂行測定 (以下 COPM) を使い、共に確認した。

OT は、教員が目の前の対応できない問題 (例えば A 君がホウキを振り回してしまうことなど) に対し、障害や機能に焦点を当て、その子が“(その機能で) 何が

できるか” を考える傾向にあり、教員が本来願っている幼児にとって意味のある作業を選択することができない状況であること、さらに、OT に支援方法 (対応策) を教えてもらおうといった受け身の姿勢であることを強く感じた。そのため、初めの段階で COPM を実施し、教員が幼児に問題を感じる作業に焦点を当て、その問題を感じる作業がどうなって欲しいのか (その作業の達成を通して教員は幼児に何を期待しているのか) を聞くことにより、教員が表現できていない幼児に本当に期待する作業に気付いていくまでの過程を大切にした。その上で、教員の意思決定が重要であることを認識できるよう心掛けた。これらのやり取りを通して、OT と教員は、同等⁴⁾なパートナーであるという立場を理解してもらうよう努めた。

OT はインタビューの中で、教員 B の A 君に期待している作業とその作業の意味にも焦点を当てることを意識し、教員 B が幼児に感じている問題に対し「なぜ問題とを感じるのか」を聞いた (表 2 の“作業の意味”の項参照)。さらに、教員 B が幼児に対し本当に期待する作業を自由に考えていけるように、「どうなって欲しいと願っているのか」「なぜそうなって欲しいと感じるのか」について聞くことも意識した。

教員 B は「クラスの友達と A 君が互いに意識し学んで欲しい」と目標を話し、そのために問題とする作業として、A 君は、友達と関わりが持てないこと、グループの一員としての役割の参加が難しいことなどを挙げた (表 2)。

4. A 君のしたい作業について教員 B との共有

教員 B が障害や機能ではなく、幼児の個性に寄り添い、尊重できる視点を持てるよう、A 君がしたいと願っている作業について OT が評価した情報を教員 B と共有した (表 3)。OT は教員と幼児の関係を大切にするた

表 2：A 君に対する教員の COPM 初期評価 (XX 年 6 月 2 日)

作業遂行の問題	重要度	遂行度	満足度	教員が A 君に期待する作業の意味
友達と関わりを持てない	10	3	3	他の子どもたちのことを見ることで、学べることなどがある。A 君にもその機会をあげたい。A 君が友だちを気にしてくれるだけでもいい。
グループの一員としての役割の参加が難しい (掃除当番・給食係)	5	2	2	キリングループとして一緒に掃除に参加することは、グループの一員として頑張ることであり、グループ意識や、参加意識を A 君と友だちが互いに感じて欲しいと願っている。
スコア		2.8	2.6	

表3：A君のしたい作業

A君のしたい作業
遊び時間や掃除時間のA君の行動観察より『何か同じ作業を通して友達と関わる』がA君にとって大切な作業であると感じることができた。

表4：教員が選択した作業

A君への支援
教員Bは、同じ作業を通して友達と関わりたいと願うA君の想いを尊重したいこと、友達とA君が互いに参加意識を感じあえる機会となることを理由に、『グループの一員として掃除に参加すること』を取り組みたいと話した。

め、幼稚園の環境内で、個別に幼児と関わることを避けている。そのため、今回行動観察を中心に行った。

5. 教員Bの優先する作業遂行の決定

インタビューおよび幼児がしたい作業の結果を教員Bにフィードバックし、教員BとOTが取り組んでいく作業について話し合い、最終的には、教員B自身が優先する作業を選択した（表4）。

6. 教員Bの選択した作業について（ここまでのプロセス）のフィードバック

教員BがOTのここまでの情報を主体的に活用するためには、再度パートナーシップを深める必要があるとOTは感じていた。そこで、これまでとこれからのプロセスが教員Bの選んだ目標と問題の解決に向いていることを伝えるためのフィードバックを実施した。教員Bが情報に対し責任を持ち、自由に使っていくことを助けるためには、情報が自分のものであると感じられるような所有感を育むことが重要であった。具体的な工夫としては、見やすく理解されやすい内容や提供方法（専門用語を使用しない、写真を入れる、紙面

と口頭の説明）、全情報の共有、情報の責任者として教員の名前も入れるといったことに注意を払うことであった。さらに“A君に対し教員Bが何を期待し、その実現に向けて問題となる作業遂行は何か”というように、情報の関係性をつないで伝えることを意識した（図1）。OTの情報で教員をコントロールせず、教員の情報の受け取り方（OTの情報を受けて教員がどんな関わりを持ちたいと思うのか）に自由度を持てるよう物語風（主人公を幼児とし、そのストーリーの中で教員が準主役のような形で登場する）の内容にまとめた（図2）。

フィードバックを通し、教員Bが今までの流れと情報に対し理解できたことを確認し、作業の実現に向けてこれからOTが評価を進めていくことを教員Bと契約した。

7. A君の作業遂行評価

教員Bと契約した評価とその目的は、幼児の作業遂行上の問題を解決することにあるため、評価には学校版運動技能とプロセス技能の評価（以下 School AMPS）を使用した。また、School AMPSは評価を通し教員Bに説明しやすい点、再評価の際、初期評価と同じ課題を選択しなくても測定できる（幼児の成長や幼稚園の教育方針に課題を合わせられる）点、信頼性・妥当性が支持されている評価である点も、本評価を選択した理由にある。

A君：グループの一員としての掃除の遂行評価

School AMPSの結果³⁾より、A君は環境や課題を整えることによって、作業遂行が達成できると判断できた。そのことをふまえ、掃除の範囲を理解することが難しいこと、掃除の終りが何時なのかわかりにくいことなど、実際の掃除の様子を観察したことからわかる、A君の困っていることを教員Bと共有した（図3）。

COPM					
クライアント:	教員B	評価日	XX年6月2日		
セラピスト名:	仲間 知穂	所属:	琉球リハビリテーション学院		
	作業遂行の問題	重要度	遂行度	満足度	インタビューの具体的内容
1	一日の流れを理解して参加できない	10	2	2	1日の流れの理解は、小学校に行った時に準備や、みんなと同じことに参加するために必要なこと。A君なりの方法を考えて取り組めたい。
2	友達と関わりが持てる	10	3	3	他の子どもたちのことを見ることで、学べることなどがある。A君にもその機会を上げたい。A君が友だちを気にしてくれるだけでもいい。

図1：教員と共有した COPM（一部）

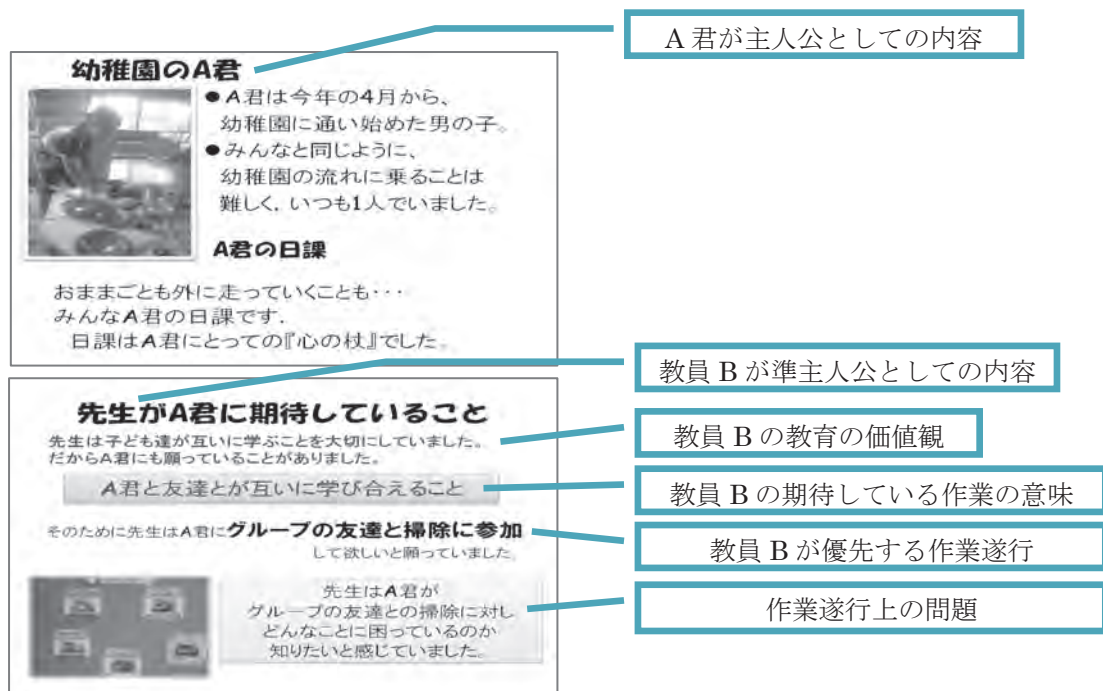


図2：教員と共有した流れ（物語風情報提示の例）

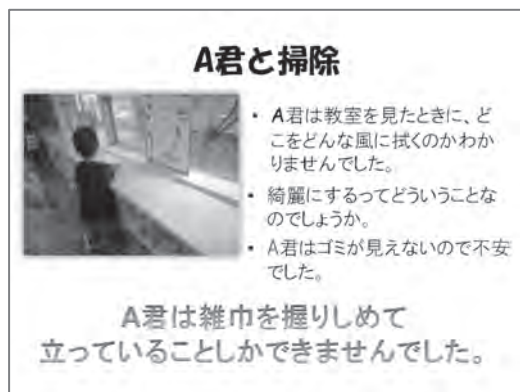


図3：教員と共有した掃除の作業遂行（物語風情報提示の例）

経過

1. 教員Bが行った支援

A君に対する直接的な支援は、教員B自身が支援内容を立案し実施した。OTは問題が生じた時などいつでも相談に乗れることを伝え、教員Bの支援を支える形をとった。教員BはA君が掃除の範囲を理解し、床にスタートからゴールまでのシールを貼るなど支援³⁾を行った。

2. 支援後のA君の変化

A君はホウキを振り回すことなく、全ての掃除を教員が付き添わず1人で参加できるようになった。友達から学ぶことでグループ全体の役割を果たそうとする

姿勢がみられ、その姿を見て友達も、A君と関わりを持つようになった。A君も友達とコミュニケーションを取るようになっていった。

OT再評価

1. A君の遂行再評価

School AMPSの再評価の結果、A君は運動技能、プロセス技能共に0.5 logits以上の変化が見られ、統計的、臨床的に変化があった⁵⁾という結果が示された(表5)。

2. 教員Bの変化

A君に対する教員Bの変化とCOPM再評価

COPMの再評価の結果、満足度、遂行度いずれも2.0点以上の有意な変化⁶⁾がみられた(表6)。教員Bは「今回の結果に満足している。これから運動会や学芸会があるが、今はどうしたらA君が参加できるのか考えていける気がする」と話し、作業療法を終了した。教員Bはその後、A君が運動会など行事に参加していけるよう様々な工夫を考え支援を実施し、A君はどの行事にも友達と協力し合い参加することができた。

考察

教員Bは介入前、自閉症に対し自身が受け取った情報から不安を抱き、問題と感じる行動を抑制することしか考えられない、A君に期待する作業を持てないな

表 5 : A 君 School AMPS 評価結果

幼児	運動技能	プロセス技能
A 君	1.06 logits→1.77 logits (同年齢の平均 : 1.03~2.87 logits) 差 0.71 logits	-0.56 logits→0.12 logits (同年齢の平均 : 0.14~1.66 logits) 差 0.68 logits

表 6 : A 君に対する教員の COPM 再評価

作業遂行の問題	初期評価		再評価	
	遂行度	満足度	遂行度	満足度
1日の流れを理解して参加できない	2	2	10	8
友達と関わりが持てない	3	3	10	10
危険なことへの認識をもてない	3	3	7	2
みんなで行動する時の指示が伝わらない	4	3	10	10
グループの一員としての役割の参加が難しい (掃除当番・給食係)	2	2	8	5
スコア	2.8	2.6	9	7
スコア差	遂行度	6.2	満足度	4.4

ど、教育の専門家として幼児と向き合うことができない状況であった。人はリスクの認識を共有できないことで不安が生じ、過剰な行動をとる場面も少なくない⁷⁾。教員もその状態であったと考えられる。筆者の関わる教育機関では、“気になる子”に対し、機能や障害を理解し支援方法を考えていく流れが強く、教員 B もまたこの環境の中で、教員として幼児と向き合うことができない作業的不公正⁸⁾な状況であったと考えられる。

教員 B が幼児の作業に焦点を当て、その実現に向けて問題解決に参加していけるエンパワーメント⁸⁾を可能にするためには、①介入初期に OT と教員 B が同等なパートナーであるという立場を明確にすること、②教員 B の作業を傾聴すること、③教員 B が自分の作業を冷静に選択できること、④OT からの情報に対し、親しみや所有感を持てることが重要であった。

以上の経過をふまえ、教員 B との協働的な情報共有の仕方について考察する。

1. “無知の知”の姿勢で情報を受け取る

今回 OT は、はじめの COPM 評価の段階で、教員 B の意思決定を尊重する姿勢の中で、OT と教員 B が同等なパートナーであるという立場を理解してもらうよう努めた。その結果、受け身的であった教員 B は、自身が実現していきたい A 君の作業について語る姿勢ができた。OT は、教員 B が A 君に期待する作業とその意味を自由に考え明確にできるよう、「なぜ問題と感ずるのか」「どうなって欲しいと願っているのか」など聞いている。これは、教員 B の A 君と向き合うということについて「もっと深く知りたい」という、教えてもらう姿勢であったと感じる。筆者自身、何度か経験した反省点でもあるが、例えば「掃除が上手く出来ない」という作業遂行に関する問題が出ると、『手順の見通しが立てられないかもしれない』『掃除以外に注意が向くことがあるのかもしれない』とその解決に医学的知識が先行し、本来のクライアントの作業とその意味を十分理解しないまま、介入に入ってしまう恐れがある。A 君の作業に対する教員 B の想いに対し無知であることを自覚し、教えてもらうという「無知の姿勢⁹⁾」が、本当に願う作業について教員 B が語ることを助け、さらに教員 B が教育の専門家であるという立ち位置を尊重されることで、OT とより良いパートナーシップを持つことにつながったと考える。

2. 所有感を生み出す情報を提供する

教員 B は、医学的情報の影響を受け、A 君に対しその子の障害特性に合わせた支援方法をしなくてはいけないと思い込み、教員としての専門的な能力を発揮することができない状況であった。これは教員としての作業疎外¹⁰⁾の状態にあったと考えられる。教員 B は目の前の問題に対し、『A 君が幼稚園の流れに参加できないのは自閉症の特性なのではないか』と、問題に対しその原因を A 君または教員自身の内部に見ていた。このように、普通、問題は「内在化⁹⁾」される傾向にある。特に医学や心理学などの専門家のモデルは内在化するようできており¹¹⁾、教員はそういった専門家のモデルの影響を受け、問題の原因を考える環境にあったといえる。そして教員 B は問題に対し、手に負えないと不安だけを感じるようになっていった。この状態では、教員 B は何が問題なのかを考えることもできない状況に陥っていたと考える。

今回 OT は情報共有の際、A 君を主人公、教員 B を準主役とし、A 君の作業に焦点を当てた問題に対し、教員 B と A 君にどんな状況が生じているのかを物語風

に示した。その結果、問題そのものを外在化⁹⁾させ、問題とそれに対する影響を分離させたといえる。例えば、『A 君が掃除に参加できない』という問題に対し、教員 B が“友達と A 君が互いに学び合って欲しい”という教員として幼児に願う作業を持てずにいること、そして A 君が、“何か同じ作業を通して友達と関わりたい”という A 君自身のしたい作業をできずにいることを物語として表現することで、教員 B は何が問題でそれに対する影響は何なのかということを冷静に知ることができたと考えられる。実際教員 B は、複数の原因が絡み合い、どうしていいかわからずにいた問題に対し、自分自身がどんな影響を受け、A 君がどんな想いでその問題と向き合っているのかという、新しい視点から冷静に問題を見ることができた。そのことで、A 君にとって意味のある作業として『グループの一員として掃除に参加すること』を取り組みたいと選択し、向き合っていく力を持てた。問題を外在化することで、教員の問題に対する視点に変換し、問題に取り組む姿勢に変化が生じたのではないだろうか。その結果、教員が知識を持ち、自分が教育の専門家として子どもの作業がうまくできるように支援できるという自信を持つことにつながり、OT からの情報を受け入れやすくし、その後の活用につながったと考えられる。

以上から、問題を客観的に受け止められるよう情報を外在化し、クライアントの知識（教員 B の場合は、教員としての専門知識）に統合できるように咀嚼した情報を提供していくことで、OT からの情報がクライアント自身のものと感じられる情報になる。そして、所有感のある情報であるからこそ、その情報に責任を持って使用できるようになったと考える。

3. 作業的公正へ導くための OT の役割

OT の提供する情報は、協働するパートナーにとって受け入れられるものでなくては、いかに有益な情報であっても意味をなさない。例えば医学用語は教員にとって理解が難しいが故に、医学用語で問題や現象を説明した途端、教員は OT に支配される立場に置かれてしまだろう¹²⁾。理解されやすい内容であることや、実際の幼児の写真を入れた説明といった情報に親しみを持てる工夫、共有した情報にパートナーの名前を入れるなど、協働するパートナーが情報に対し所有感を持つことができる情報の工夫は、パートナーが情報を受け入れ、責任を持ち自由に活用していくために重要であると考えられる。実際、作業疎外の状態であった教員 B も、教員として自身と A 君に意味ある作業に気付

き、その実現に向けて OT の情報を自由に使い、支援を立案、実施することができた。これは教員 B にとって、教員としての作業的疎外から脱却できた出来事であった。Fiddler ら¹³⁾は作業的公正について“作業的公正は人が社会の中で作業従事を選択し、コントロールできる力量・資源・機会・権利を持った時に作業的公正が存在する”と述べている。教員 B の場合も、教員としての作業的疎外の状態から作業的公正の状態へと変化した一例といえるのではないだろうか。つまり、教員の抱える幼児の作業的問題に対し、教員自身がコントロールできる情報を OT が提供するといった協働の仕方が、作業疎外の状態から教員が脱し、教員が本来願っていた自身と幼児にとって意味のある作業を選択し、その実現に向けて問題解決に参加していける、作業的公正を導いたと考える。協働するパートナーにとって所有感のある情報提供は、そのパートナーの作業的公正を促がすための一手段であると考えられた。

おわりに

今回 OT は、パートナーである教員自身が幼児に感じる問題を解決するための力を持てるよう、エンパワーメントを意識した取り組みを行なった。教員が本来願っていた幼児にとって意味のある作業を選択し、その実現に向けて教員自身が問題解決に参加していけるためには、介入初期に OT と教員が同等なパートナーであるという立場を明確にすること、幼児に期待する教員の作業への想いに対し無知の姿勢で聴くこと、教員が自分の作業を冷静に選択できるよう問題を外在化すること、さらに OT からの情報に対して親しみや所有感を持てるなど、情報提供の工夫が重要であった。この教員との関わりを通して、協働し作業の可能化を目指すには、協働するパートナーの作業的公正を促すことが重要であり、その一手段として、パートナーにとって所有感のある情報を OT が提供する必要性を学んだ。

本研究の研究計画は関西福祉科学大学の倫理委員会の倫理審査で承認された。なお、今回の 2 年間の活動が認められ、平成 23 年度（今年度）から金武町教育委員会の特別支援教育事業の一環として、地域の通常幼稚園・小学校に巡回相談を月 4 回おこなうこととなり、ボランティア活動から有償の公務へと変化した。現在 2 つの幼稚園と 1 つの小学校に訪問しており、各学校あたり週 1 回程度訪問している。

謝辞

本プログラムに御理解と御協力いただいた、学校長、教員、お子さん及び保護者の方々、さらにこの活動を支えてくださった琉球リハビリテーション学院の皆様に深く感謝いたします。

文献

- 1) Polatajko HJ (吉川ひろみ訳) : 作業科学・作業療法の必須要件. Townsend EA, Polatajko HJ (吉川ひろみ, 吉野英子監訳) : 続・作業療法の視点. 大学教育出版, 107, 2011.
- 2) Canadian Association Occupational Therapists (宮前珠子, 山崎せつ子訳) : 作業療法の中心概念. Canadian Association Occupational Therapists (吉川ひろみ監訳) : 作業療法の視点. 大学教育出版, 57-110, 2000.
- 3) 仲間知穂, 酒井ひとみ : 幼稚園教諭の作業の可能化を目指す協働的アプローチ. 第 14 回作業科学セミナー : 26-27, 2010.
- 4) Clark F. Ennevor BL, Richardson PL (村井真由美訳) : 作業的ストーリーテリングとストーリーメイキングのためのテクニックのグラウンデッドセオリー. Zemke R & Clark F (佐藤剛監訳) : 作業科学. 三輪書店, 407-430, 1999.
- 5) Fisher AG, Bryze K, Hume V, Griswold L : School AMPS School Version of the Assessment of Motor and Process Skill 2nd Edition , 129, 2007.
- 6) Law M, Baptiste S (吉川ひろみ訳) : COPM 第 4 版. 大学教育出版, 68, 2007,
- 7) 宮口英樹 : 臨床に活かすリスクコミュニケーション I. 作業療法ジャーナル, 44, 49-53, 2010.
- 8) 吉川ひろみ (著) : 「作業」って何だろう. 医歯薬出版株式会社, 70, 92, 2008.
- 9) 野口裕二 : 物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ. 医学書院, 70-106, 2002.
- 10) 1)と同誌 107-113
- 11) 野口裕二 : ナラティブ・アプローチとは何か. 作業行動研究, 第 9 巻 : 1-10, 2006.
- 12) Sumsion T (森下孝夫, 石附智奈美訳) : 実践上の問題. Sumsion T (田端幸枝, 森下孝夫, 近藤敏, 山田大豪, 吉川ひろみ他共訳) : 「クライアント中心」作業療法の実践. 協同医書出版社, 27-31, 2001.
- 13) Fiddler A, Peerla D : The Kitchenuhmaykoosib Inninuwug and the Struggle for the Right to Say No. Journal of Occupational Science, 16(1), 10-11, 2009.

Collaborative approach with kindergarten teacher that aims at enabling occupation ~Focusing on information handling by occupational therapist~

Chiho Nakama¹⁾, Hitomi Sakai²⁾

- 1) Ryukyu Rehabilitation Academy
- 2) Kansai University of Welfare Sciences

This research paper is for reviewing the case work that I involved as a volunteer Occupational Therapist (OT) and supported a local kindergarten teacher and conducted a study of focusing on the information handling. Conscious effort of OT in this case was to develop the teacher's empowerment and enhanced her ability to resolve the problem that with the student. To make this happen, the teacher must select the meaningful occupation for the student. Properly handle of information was the important factor in order for the teacher to participate in problem resolving. Furthermore, clarify the position equivalency between OT and the teacher within early intervention, listen the teacher's expectations with student in simple minds, assist the teacher with externalizing the problem and enables her to select the meaningful occupation in composure manner. Additionally when providing information, make sure with familiarity, specify its ownership and characterized by the ingenuity.

Key words: empowerment, information handling, client-centred, collaboration

資料

第 14 回作業科学セミナー演題発表抄録（2010 年 12 月 11・12 日）

意味ある作業の参加状況が健康関連 QOL に及ぼす影響～健康中高年を対象とした 1 年間の追跡調査～

今井 忠則 他

作業を再び始めることと「活力」：身体障がいのある高齢者における移行（トランジション）や
適応（アダプテーション）の経験に関する探究

ボンジェ ペイター 他

ある脳卒中者が経験した作業の変化～指向性～

小田原 悦子 他

幼稚園教諭の作業の可能化を目指す協業的アプローチ～作業療法士が提供する情報の扱い方に焦点をあてて～

仲間 知穂 他

脳血管障害回復期病棟への作業を基盤とした作業療法プログラムの導入

岡 千晴

「作業の持つ力」を考える～作業の持つ力を有効に使う為の作業療法士の役割とは～

原田 伸吾 他

意味ある作業の参加状況が健康関連 QOL に及ぼす影響 ～健康中高年を対象とした 1 年間の追跡調査～

今井忠則，齋藤さわ子

茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科

【背景】

意味ある作業(本人にとって価値のある活動)が健康に重要な影響を及ぼすことについて根拠となる研究は少ない¹⁾。さらに、縦断研究となると僅かである²⁾。特に、日本において意味ある作業と健康の関係を調べた研究はほとんどない。著者らは、作業と健康に関する疫学的エビデンスを構築するために、日本の健康な地域中高年者を対象とした大規模な縦断研究(コホート研究)を実施している。これまでに 6 ヶ月間における、意味ある作業の参加状況と健康関連 QOL との関係を報告した³⁾。本研究では、さらに 6 ヶ月後の 1 年間の変化について報告する。

【目的】

本研究の目的は、意味ある作業の参加状況が健康関連 QOL に及ぼす影響を明らかにすることである。

【方法】

茨城県の地域中高年者 470 名を対象に 1 年間の追跡調査を実施し、390 名(男性 87 名、女性 303 名、平均年齢 63.4 歳、範囲 50-79 歳)を分析対象とした。意味ある作業の参加状況の測定は自記式作業遂行指標(SOPI)⁴⁾を、健康関連 QOL は SF-36v2 を使用した。SOPI は、意味ある作業の参加状況を測定するために、カナダ作業遂行モデルを理論的基盤として開発された 9 項目の質問紙である。データ分析には、SOPI の変化量及び調整変数を独立変数とし、SF-36v2 の変化量を従属変数とする重回帰分析を使用した。なお、本調査は茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て行われた。

【結果】

性・年齢・社会経済的要因を調整した上で、SOPI 得点の 1 年間の変化量は、SF-36v2 の 8 つの下位尺度(PF, RP, BP, GH, VT, SF, RE, MH)及び 2 つのサマリースコア(PCS, MSC)の 1 年間の変化量のすべてに肯定的な影響が認められた($P<.01$)。

【結論】

意味ある作業の参加状況の改善は、健康関連 QOL に肯定的な影響を及ぼす可能性がある。本研究成果は、作業が健康に貢献している根拠となり作業科学にとって意義がある。

文献

- 1) Law M, et al : Occupation, health and well-being. Can J Occup Ther 65 : 81-91, 1998.
- 2) Clark F, et al : Occupational therapy for independent-living older adults — A randomized controlled trial. JAMA 278 : 1321-1326, 1997.
- 3) 今井忠則，齋藤さわ子：意味ある作業の参加状況が健康関連 QOL に及ぼす影響—健康中高年者を対象とした 6 ヶ月間の追跡調査—。作業療法 (印刷中)。
- 4) 今井忠則，齋藤さわ子：個人にとって価値のある活動の参加状況の測定—自記式作業遂行指標(SOPI : Self-completed Occupational Performance Index)の開発—。作業療法 29 : 317-325, 2010.

Effects of the participation in meaningful occupation on Health-related Quality of Life

— A one-year follow-up survey for healthy middle-aged and elderly in Japan —

Tadanori Imai, Sawako Saito

Department of Occupational Therapy, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

There are little evidence that meaningful occupation has an important influence on health¹⁾. Moreover, there are few longitudinal studies²⁾. Especially in Japan, only few studies investigating the relationship between meaningful occupation and health. The purpose of this study was to examine the influence of the participation in meaningful occupation on Health-Related Quality of Life (HR-QOL). We carried out a one-year follow-up survey for 470 community dwelling people over 50 years old who participated in the training course for volunteer leaders of health promotion exercise in Ibaraki Prefecture, Japan. Of 470 participants, 390 people were chosen for the analysis (87 men, 303 women, mean age 63.4, range 50-79). The participation in meaningful occupation was measured by the Self-completed Occupational Performance Index (SOPI)³⁾, and HR-QOL was measured by the SF-36v2. The SOPI was designed based on the Canadian Model of Occupational Performance to measure the quality of participation in meaningful occupation and consists of nine items. A multiple regression analysis was carried out in data analysis. We assumed the SOPI score as independent variable, and the SF-36v2 scores as dependent variables. From the data analysis, it was found that the change of the SOPI score during a one-year period had a positive influence on all subscales (PF, RP, BP, GH, VT, SF, RE, MH) and summary scores (PCS, MCS) of SF-36v2 after being adjusted for age, sex and socioeconomic factors. Therefore, it is concluded that the improvement of the quality of participation in meaningful occupation had a positive influence on HR-QOL.

References

- 1) Law M, Steinwender S, Leclair L : Occupation, health and well-being. Can J Occup Ther 65 : 81-91, 1998.
- 2) Clark F, Azen SP, Zemke R, Jackson J, Carlson M, et al : Occupational therapy for independent-living older adults — A randomized controlled trial. JAMA 278 : 1321-1326, 1997.
- 3) Tadanori I, Sawako S : Measuring the quality of participation in activities in everyday life —Developing the Self-completed Occupational Performance Index (SOPI). JJAOT 29 : 317-325, 2010.

演題発表

作業を再び始めることと「活力」：身体障がいのある高齢者における移行（トランジション）や適応（アダプテーション）の経験に関する探求

ボンジェ・ペイター^{1,2)}, 浅羽エリック²⁾, 田村由美¹⁾, ジョセフソン・スタッフアン²⁾

1) 神戸大学, 2) カロリンスカ医科大学

【目的】

突然の病気や事故によって身体に障がいを持つ高齢者は、入院中から継続して退院後も自宅や地域にある外来施設でリハビリテーションを続けていることが多い。したがって、リハビリテーションにおいてより重要になるのは、彼らが様々な文脈の中で日常生活上の作業（以下、作業）を再び始めるプロセスを理解することである。本研究では、作業を再び始めるプロセスを日本人の高齢者の経験から特徴づけることを目的とした。

【方法と対象】

身体に障がいを持つ日本人の高齢者 9 名（障がい発生から面接までの期間は 10 ヶ月～5 年間）から研究参加の同意を得て非構成的面接を実施した。参加者には、彼らの入院中から在宅復帰後のリハビリテーションのプロセスにおいて、彼らが作業を再び始めることに関して自由に語ってもらった。彼らの語りを逐語録にし、Bogdan と Biklen による継続比較方法によってデータ分析を行った。また、コーディングについては Boyatzis の方式を採用した。

【結果】

参加者の経験を特徴付ける 3 つのテーマを抽出した：「責任を果たす」「依存と和解する」「活力を得ると活力元」。これらのテーマから、高齢者における作業を再び始めるプロセスは、医療的、実用的な側面だけでなく、道徳的な側面も示唆している。

【考察】

特に「活力」の経験は、病気や事故の後彼らが作業を再び始めるのに必要な事柄の理解をしていく潜在的な概念として特徴付けることができる。「活力を得ることと活力元」は、機能している活力という概念であり、作業療法の実践においてリハビリテーション過程やアウトカムの評価に役に立つのではないかと考える。また、「活力」は、身体、心、魂のそれぞれの側面に多様な次元があるので、作業科学における医学と人間科学、あるいは社会科学とのパラダイムの間に互換性のある有用な概念要素になる可能性があるかもしれない。作業科学にとって、「活力」の潜在的な有用性についてセミナー参加者と共有し議論できることを期待する。

文献

Bogdan RC, Biklen SK. Qualitative research for education. An introduction to theories and methods. Boston: Allyn and Bacon; 2006
Boyatzis RE. Transforming qualitative information. Thematic analysis and code development. Thousand Oaks: Sage; 1998

Resuming occupations and vigor: Exploring experiences of transition and adaptation among elderly with physical impairments

P. Bontje^{1,2)}, E. Asaba²⁾, Y. Tamura¹⁾, S. Josephsson²⁾

1) Kobe University, 2) Karolinska Institute

Purpose

Elderly people recovering from a sudden illness or accident increasingly receive rehabilitation in the community as opposed to institutions. Therefore, understanding processes of resuming occupations in various contexts is evermore important in rehabilitation today. This research aimed to characterize processes of resuming daily life (occupations) from the experiences of elderly persons in Japan.

Method

Open-interviews were conducted with older Japanese persons with physical impairments. The nine elderly Japanese participants were asked to share their stories of resuming daily life during hospitalization, rehabilitation and after returning home. Ten months to five years had passed between the onset of illness or accident and the time of the interview. Data-analysis was based on a constant comparative methodology based on Bogdan and Biklen, with the coding method further informed by Boyatzis.

Results

Analysis resulted in three themes that characterize the participants' experiences: 'exercising one's responsibilities', 'reconciling to dependence', and 'drawing from and gaining vigor'. These themes suggest that processes of resuming occupations in elderly people are moral as well as medical and practical.

Discussion

The experiences of vigor will be explored as a potential concept to enhance understandings of what it takes to resume occupations after illness or accident. Vigor as something that functions as a source and something that can be gained seems a promising construct to use in evaluation of rehabilitation process and outcomes. Furthermore, vigor's multidimensionality as something with body, mind, and soul dimensions may provide occupational science with a construct compatible to both the medical and human/social science paradigms. The audience will be invited to share their thoughts on the potential usefulness of 'vigor' to occupational science.

References

Bogdan RC, Biklen SK. Qualitative research for education. An introduction to theories and methods. Boston: Allyn and Bacon; 2006
Boyatzis RE. Transforming qualitative information. Thematic analysis and code development. Thousand Oaks: Sage; 1998

ある脳卒中者が経験した作業の変化 ～指向性～

小田原悦子, 辻 郁
聖隷クリストファー大学

【目的】

我々は、障害後の生活の再構築に貢献する作業の特徴に興味がある。現象学者は、生活する本人の一人称の視点を尊重し、人の活動の特徴として、指向性（「おのずと向かう」意識の性質）を挙げた。この指向性とは、Barberによると、意図的、あるいは、目的にというより、意識が世界に向かっていく性質をさす¹⁾。Barberは、指向性として人の活動（作業）をとらえ、2つのレベルをあげた：operational intentionality（操作的指向性：自動的に起こる動作）と intentionality of action（行動の指向性：目標に向かって時間的経過の中で起こる活動）。指向性に影響を与える要因として、倫理的責任（他者の存在によって行動が影響されること）を指摘した。

本研究では、ある女性が脳卒中でライフクライシスに陥り、新生活を構築するまでの作業経験を指向性に焦点化して検討する。

【ケース紹介】

主婦でパートタイマーのミチ（匿名）は、52歳で脳卒中に遭い、左片麻痺と左無視が残った。5か月間の入院後、自宅退院した。現在8年目である。現在、主婦業をこなし、週に2回デイケアに通い、脳卒中患者会の活動に参加する。

【方法】

13か月の間にミチに4回のインタビューと参加観察を行い、担当作業療法士にインタビューを2回行った。インタビューは録音し、逐語録を作った。データの内容は本人に示して、フィードバックを取った。主観的経験を理解するために現象学的分析を行い、出来事と経験と作業の関係を追った。ピアレビューで方法論と解釈の仕方を話し合った。

【所見】

ミチの脳卒中後の新生活構築までの経過には3つの時期があり、van Geneppが通過儀礼に見出した「分離」、「移行」、「再統合」の段階と対応したので、ここではその名称を使って呼ぶ²⁾。各時期におけるミチの作業経験の特徴と指向性の変化を分析した。

指向性の変化：脳卒中後に2つのレベルの指向性（操作的指向性と行動の指向性）は低下したが、その後の作業従事を通して、増加していた。指向性の変化は他者の存在に影響されていた。

分離：身体の不自由や左無視のために、あたりまえと経験していた日常生活はわけがわからないものとなった。自宅に帰っても、ミチは起こった変化を認められずに、自分からは何もする気にならなかった。家族と外出しても、置いてけぼりと経験した。

移行：作業療法での調理や家族との歩行練習で新しい身体の使い方に気付き、将来のイメージを得た。家族のためにと意欲から皿洗いを始めた。

再統合：卓球、水泳に参加し、身体を動かす楽しさに気付いた。患者会の茶話会や旅行をとおして、健常者とは共有できなかった生きる困難を仲間と分かち合った。ミチは居心地のよい仲間と体操、旅行、ゲームを楽しんだ。家事を引き受けるようになった。

文献

1) Barber, M. Occupational Science and Phenomenology. J O S 11:105-114, 2004.

2) Van Gennep, A. The Rites of Passage. The University of Chicago Press. 1960.

Change of occupation experienced by a stroke survivor ~Intentionality~

Etsuko Odawara, Iku Tuji
Seirei Christopher University

Purpose

We are interested in the features of occupation contributing to reestablishing life occupations after disability. Phenomenologists respect the first person's perspective of the actor living a life and emphasize intentionality as a feature of human activity. Intentionality, in Barber's use, means 'being directed toward the world' rather than 'deliberately' or 'on purpose'¹⁾. Barber pointed out two levels of intentionality as human activity: operational intentionality (automatic behavior) and intentionality of action (action emerging for a purpose in a time process). He also suggests ethical responsibility as an element affecting intentionality. This study analyzes occupation experienced by a woman with stroke, from her life crisis to reestablishing a new life, focusing on intentionality.

Case introduction

Misa (pseudonym) was a homemaker who worked part-time. She had a stroke in her early fifties and was hospitalized for five months before returning home. Eight years post-stroke, Misa now performs housekeeping work, attends a day care program, and an association for stroke patients.

Methods

Four interviews coupled with participant observation, occurred over a 13-month period with Misa. Two interviews were also conducted with Misa's occupational therapist. Interviews were recorded and transcribed verbatim. A phenomenological approach was used to explore experiences and relationships with a focus on events and occupations. Triangulation was used in the form of discussing findings with participants as well as research methodology and interpretation with peers in a seminar.

Findings

Three phases were identified and named using van Gennepe's rite of passage terminology²⁾. Change of intentionality: After stroke each level of intentionality decreased but increased in Misa's occupations. The change was influenced by others' presence.

Separation: Physical dysfunction and left neglect turned her ordinary daily life upside down. Misa found it difficult to accept what happened to her and was not willing to do anything. In an outing with her family, she felt "outside".

Transition: She realized a different way of using her body while cooking in an OT session or walking exercise with her family. She started dishing after dinner to share house chores with her family.

Reincorporation: She knew pleasure of using body while playing tennis or swimming. She enjoyed participating in exercise, traveling and playing games with her peers, sharing pain in everyday life with them. She did housekeeping activities at home.

References

- 1) Barber, M. Occupational Science and Phenomenology. J O S 11:105-114, 2004.
- 2) Van Gennepe, A. The Rites of Passage. The University of Chicago Press. 1960.

幼稚園教諭の作業の可能化を目指す協業的アプローチ ～作業療法士が提供する情報の扱い方に焦点をあてて～

仲間知穂¹⁾、酒井ひとみ²⁾

1)琉球リハビリテーション学院, 2)琉球大学大学院人文社会科学部研究科

【はじめに】

地域の幼稚園から依頼を受け、教諭が将来的に学校生活に不安を感じる園児に対し作業療法士（以下 OT）として介入した。OT は園児に直接介入せず、教諭自身が園児に感じる問題を解決するための力を持てるよう、エンパワメント¹⁾を意識した支援を行った。その結果、はじめは学校生活で期待する作業に参加することは難しいとし、問題行動の抑制を行っていた教諭が、園児の作業の実現に向け、主体的に支援を考え遂行していけるまでの変化が見られた。今回の取り組みを振り返ると、エンパワメントを生み出す経過にはリスクコミュニケーション²⁾の活用や、アクションリサーチ（以下 AR）³⁾に似たアプローチを用いていることが分かった。しかしながら、加えてこれらは教諭に対して OT から発する情報の微妙な扱い方によって統合されていた。今回その OT の情報の扱い方に焦点をあて、教諭が変わっていった要因について検討する。

【経過・結果】

筆者は自閉症の N 君の問題行動に対し抑制を行っていた担任教諭に、N 君に感じる問題と目標についてカナダ作業遂行測定を使い共に確認した。教諭は「クラスの友達と N 君が互いに意識し学んで欲しい」と目標を話し、問題とする作業を具体的に挙げた。また、N 君の学校生活の観察から、N 君が友達と一緒にいたいと願っていることがわかった。筆者は教諭とこれらのことを共有した。情報を共有する際、①全情報の共有、②紙面と口頭の確認、③見やすく理解されやすい内容、④情報の責任者として教諭の名前も入れる、といったことに注意を払った。教諭はそれらの情報から N 君に叶えたい作業を選択した。筆者はその作業の遂行評価を実施し、N 君がどんなことに困っているのかを伝えた。その情報から教諭は、自ら作業の達成に向けて課題と環境を整え、N 君は友達と協力しながら掃除に参加することができるようになり、教諭は満足することができた。

【考察】

人はリスクの認識を共有できないことで不安が生じ、過剰な行動をとる場面も少なくない²⁾。教諭は介入前、自閉症に対し自身が受け取った情報から不安を抱き、行動を抑制せざるおえない状況であったと考えられる。教諭自ら、そのリスク対応方法を考えていくことを可能にするためには、教諭が感じる園児の作業的な問題に焦点を当て、教諭がその問題解決に向かえるような、相互作用的経過を生み出す OT の情報提供が必要であり、そういったリスクコミュニケーションが重要であったと考えられる。

今回 OT は、教諭が問題とを感じる園児の作業について、その作業に対する教諭にとっての意味を明確にすることで、教諭が園児と向き合うという作業の可能化を目指した。その実現には、情報に対し教諭が親しみや所有感、責任を持てるための工夫を OT が配慮し提供することが要になっていた。情報に対する所有感と責任を持てることとは、教諭自身が情報を自由に使い園児の支援を行えることである。このような形の情報を OT が提供することが、教諭が園児と向き合うという作業の可能化を引き出したと考えられた。

文献

- 1) 吉川ひろみ（著）：「作業」って何だろう。医歯薬出版株式会社，70，2008
- 2) 宮口英樹：臨床に活かすリスクコミュニケーション I 作業療法ジャーナル 44:49-53，2010
- 3) Alison Morton-Cooper（著），関戸好子（訳）：Action Research in Health Care ヘルケアに活かすアクションリサーチ。医学書院，7-27，2005

Research Presentations

Cooperation approach that aims at enabling occupation of kindergarten teacher ~Focusing on information handling by occupational therapist (OT)~

Chiho Nakama¹⁾, Hitomo Sakai²⁾

1) Ryukyu rehabilitation Academy

2) University of the Ryukyus College of Law and Letters The first term of doctor's course

Introduction

My intervention as OT was requested by the local kindergarten. I was asked to support a classroom teacher concerning a student who is having difficulties in daily school activities. OT intervention was indirect to student provided support to teacher to develop her ability of “empowerment¹⁾” to resolve the problem that with the student. At first, teacher was not expecting student to participate in any daily school activities and conducted behavioral discipline but as a result, the teacher carried out a proactive support and worked with student towards realization of its accomplishment. Looking back this effort, found that the “empowerment” was generated over using a similar approach to the Risk Communication²⁾ and Action Research (AR)³⁾. In addition however, these processes and approach were integrated by the subtle handling of information originated by OT. I would like to focus on the handling of information by OT and the factors to consider how the teacher has changed.

Progress/Result

Writer confirmed with teacher who conducted behavioral discipline with autistic child “N” and discussed the problems and objectives that the teacher feels with the student using Canadian Occupational Measurement. Shared the teacher's objectives and asked her to provide the specific problems. Teacher's primary concern is for “N” to establish good relationship with his classmates and to learn from others. Also, found from screening of “N's” daily performance that he wants to be with his friends. And shared these information with the teacher. When I shared the information, I paid special attention to the following: 1) Shared all the information. 2) Made paper and verbal confirmation. 3) Provided easy to understand viewing content. 4) Provided classroom teacher's full name as an in-charge of information. The teacher selected the occupation in which she wished “N” to become functional. The evaluation of occupation was conducted by OT by screening “N's” daily performance and informed the teacher which areas of functions that he is having a trouble with. According to the provided information, the teacher figured out the task and worked towards enhancing the environmental factors. As a result of this approaching process, “N” was able to accomplish his cleaning duty, cooperated with his classmates and made teacher proud.

Diagnostic Conclusion

People get anxiousness from not sharing the risk perception and overreact in some cases. Before intervention of OT, classroom teacher was very anxious because of what she received the information about dealing with an autistic child and under this circumstance made her overreact. The information provided by OT led the teacher to become independently working towards on the issue and brought up the interaction process and the risk communication, this was very important factor for solution. From this approach, the teacher focused on the problems that with student and found the way for solution. To clarify the meaning of occupation process by the teacher enabled her to face on the issue with the child. This time, OT paid special attention and consideration into providing information and made sure that the teacher takes responsibility in information and feels its ownership which was the key factor in this case. The ownership of information and using the information by the teacher made possible to establish a supporting process for the student. As a result, properly providing information by OT guided and enabled the occupation and brought out the resolving process which was the teacher to face on the child.

脳血管障害回復期病棟への作業を基盤とした作業療法プログラムの導入

岡 千晴

北原リハビリテーション病院

【はじめに】

急性期や回復期における脳血管障害をもつ患者の多くは、自分らしく生活をしていく事に対し不安を抱き、また「体さえ治れば」と、将来の生活のイメージを描く事が難しい場合がある。近年、作業に焦点を当てた作業療法の重要性が主張されるようになり、作業療法では、作業を通してそのような不安の解消やイメージの構築を援助する必要があるといえる。Clarkらは、健康な高齢者に作業を基盤とした「講義」「情報交換」「体験」「生活での発展」からなる作業療法を行い、そのプログラムが健康の維持・回復に効果的であることを実証した¹⁾。今回筆者は、Clarkらのプログラムや、障害をもつ高齢者の自分らしい生活に影響を与える作業の研究結果²⁾をもとに、脳血管障害の回復期でのプログラムとして、作業を基盤とした作業療法を導入した。本報告では、自分らしく生活をしていくことに不安を抱える回復期の作業療法対象者への作業に焦点を当てた介入を紹介し、その確立に向けて、対象者の反応や変化から、プログラムの内容について考察を深めたい。

【プログラムの概要】

本プログラムは、当院の脳血管疾患回復期病棟入院中の患者を対象として作成した。プログラムは大きく分けて①作業と健康、作業の行い方と自分らしさなどに関する知識を深め、脳卒中経験者の話を聞く機会を持つ②自分らしい生活につながる作業を自己分析する③自分らしい生活のための作業経験を積む、の3つのブロックからなり、週に1～2回、合計6セッションを約1ヶ月で行うものである。これまで1年半の間に発症後2～6ヶ月の9グループに対して行い、40～80歳代の計27名が参加した。

【結果と考察】

本プログラムでは、「自分らしい作業」や「障害をもって生きていくこと」に対する知識を深めることを一つのテーマとし、発症後2年以上経過した脳卒中経験者の話を聞く機会を設けた。また、自分らしい生活につながる作業を分析するよう促し、「行い方」の視点から、作業を行うための道筋を立てるグループ討論を行った。さらに、それらの作業を実際の生活に即すような形で遂行できるような環境を設定した。プログラム参加後、対象者は退院後の生活を「工夫しながら生きていく」「挑戦していく」という肯定的イメージを持つようになった。また、入院中に行いたい作業や、自分の作業目標を明らかにし、それらの作業の退院後の生活への導入を促した。さらに地域社会に即した状況で作業を遂行する経験を重ねることで、「社会の中に溶け込むような感覚を味わった」と語った。本プログラムは、未来の方向性や目標を見出し、それに向けた作業の行い方を自らデザインする機会を提供できたのではないと思われる。また、発症後早期の段階で、グループ全体や個人でその作業を行える環境を提供することは、障害と共にある自己をイメージしたり、社会の中に自分の存在を見いだすことを援助したと考える。

文献

- 1) 加藤貴行訳：自立して生活する高齢者への作業療法JAMA,19:74-81,1998
- 2) 岡千晴：自分らしい人生を作業で描くプロセス.作業科学研究.3:29-35,2009

Introducing occupation based practice into stroke rehabilitation facility

Chiharu Oka

Kitahara Rehabilitation Hospital

Introduction

It is an enormous concern for patients who suffer from strokes, particularly in the acute and rehabilitation stages on the extent of their rehabilitation and how they would live their lives in the future. Occupational therapists must understand and be able to treat their anxiety along with all their concerns. The occupation based practice has been increasingly emphasized in occupational therapy that the element of ‘didactic presentation’ ‘peer exchange’ ‘direct experience’ ‘personal exploration’ is contained. Based on the intervention by Clark et al.¹⁾ and research results of occupation that influences unique life²⁾, the occupation-based program was created and conducted at the rehabilitation facilities for stroke patients. The purpose of this presentation is to reflect and improve the program for stroke patients, particularly in the rehabilitation phases.

Summary of practice

The program was created for patients who were being treated in the rehabilitation facility in Kitahara Rehab. Hospital. It was a month long program, consisting of 6 group sessions. The program was structured in following three blocks. 1: Understanding occupation and health, understanding how to conduct occupations, and learning how to cope with everyday activities as a stroke survivor. 2: Analyzing occupations that are related to their lives and tailored to their own self. 3: Practicing these occupations. In the past 18 months nine groups of patients, who suffered a stroke 2-6 months prior, have already completed this program.

Results and Discussion

The focus of this program is: “Occupations” and “Living with Disabilities”. In one of the sessions, the speaker who we invited suffered a stroke two years prior. The program also included group discussions and analysis of how to perform daily occupations. As a result of the discussions, occupational therapists were able to create a proper setting that the patients can successfully carry out and conduct these occupations in a community setting. The response from the participants suggested that the program provided the opportunity to create positive images of ones self, and be able to live with this disability, and how to design their lives with these occupations. This program also enabled them to feel comfortable in the community and find their individual positions in society in the early stages.

「作業の持つ力」を考える ～作業の持つ力を有効に使う為の作業療法士の視点～

原田 伸吾¹⁾，酒井 ひとみ²⁾

1) ごきげんリハビリクリニック，2) 琉球大学大学院人文社会科学研究所

【はじめに】

作業科学に関する先行研究では，作業が健康を促進する報告は数多く見られるが，作業の用い方によって健康を阻害する可能性を示唆する報告は見取れなかった．筆者は担当したA氏を通して，作業の効果を実感すると共に，作業の拡がりの中に潜む危険性を見た．この危険性は作業の持つ力のもう一つの側面であると感じた．今回その危険性について報告し，作業の持つ力を効果的に使用する為の作業療法士（以下 OT）の視点について考察する．

【事例紹介】

50 歳代女性．夫と 2 人暮らし．平成 21 年 2 月から当通所リハの利用を開始（週 4 回）し，要介護度は 3 である．現病歴は平成 17 年 12 月に小脳梗塞を発症．病前は家事の全てを担っており，趣味はガーデニングであった．[OT 評価と介入経過]介入当初の COPM の結果，重要な項目は洋服を自分で着たい，自分でお風呂に入りたい，夫の為に料理を作りたい，昼食の準備の為にレンジを使いたいであった．それぞれが，重要度 10，遂行度 1，満足度 1 であった．A 氏の ADL は，生活の大部分に介助を要しており，自宅内は夫の介助で歩行し，屋外は車椅子を使用していた．5 ヶ月間の介入を行なった結果，COPM は遂行度スコア，満足度スコアの平均がそれぞれ 3.25 向上した．ADL は歩行が伝い歩きで自立となり，更衣と入浴の介助量が軽減した．レンジを用いた昼食の準備も可能となった．A 氏は，昼食の準備が出来るようになることで有能感を得ていった．また COPM の再評価によって，ガーデニングをしたいという新たな作業が出てきた．[介入の基本方針と介入経過]基本方針は，料理・更衣・入浴・ガーデニングをより安全に効率的に行なう為に，機能訓練の継続と動作練習，その為の環境設定とした．介入経過は，A 氏自らコンロを使った料理に挑戦し，成功した．また，ガーデニングを積極的に行い，徐々に筆者に事後報告の形となっていた．ガーデニングを行なう経過の中で，A 氏が尻もちをつくことがあった．有能感がより向上したことによって筆者の想定外で作業が広がった．筆者は，随時 A 氏が自宅で行なおうと考えている作業の内容の把握と対処方法の検討，環境設定，リスクについての話し合いを行なった．

【考察】

ダイナミックシステム理論¹⁾でも言われているように，A 氏の作業の拡がりにおける新しい行動は予測不可能性を持っていた．A 氏の転倒もその一つであろう．作業の持つ力にはこのような危険性も孕んでいる．OT は，作業遂行領域と作業遂行要素とクライアントを取り巻く環境を総合的に把握できる存在である．それであるからこそ OT は，クライアント自身が安全に作業を拡大する手段の獲得を行なえるように，適切な評価や戦略を提供できるのである．A 氏との関わりを通して，OT は作業導入時から作業に対するクライアントの自己認知を把握する必要があることを学んだ．そして，「作業が持つ力」をクライアントと共に調整するパートナーとしての視点を一つ追加することができた．

文献

- 1) Julie McLaughlin Gray 他（著），太田篤志（訳）：ダイナミックシステム理論の作業への適応．R Clark F, Zemke R（編著），佐藤 剛（監訳）：作業科学—作業的存在としての人間の研究．三輪書店，339，（1999）

Consideration of the effect of occupations

～The view point of OTs in order to apply the effect of occupations effectively

Shingo Harada¹⁾, Hitomi Sakai²⁾

1) Gokigen Rehabilitation Clinic

2) University of the Ryukyus College of Law and Letters The first term of doctor's course

Introduction

According to former researches, there are many reports that occupations promote people's health, however, there is no reports that show the potential of prevention for being health. Through this case, the author could feel the effect of occupations, on the other hand, the author could find some danger behind the expanse of activities. In this time, the author reports the danger in occupations, and considers the view point of OTs in order to apply the effect of occupation effectively.

Introduction of the case

50's female living with husband. She has been attended a day-care center 4 times in a week since Feb. 2009. Nursing-care insurance is grade 3. She got a cerebellar apoplexy (2005). Until she got the disease, she had all households, and her hobby was doing gardening.

OT evaluation and approach process

At the beginning of the result of COPM, important categories for her were wearing clothes, taking a bath, cooking for husband and using microwave oven to prepare for lunch. Each score were importance 10, performance 1 and satisfaction 1. She needed help for most of ADLs, she could walk with her husband support in house, and she was taking a wheelchair to go outside. The result of approach after 5 months, the average of each score of COPM improved about 3.25. She could walk with supporting wall independently and decrease the amount of assistance for wearing clothes and taking a bath. She has been able to manage microwave oven for preparing lunch, so she felt the capability by it. Furthermore, according to re-evaluation of COPM, gardening came out as the new activity what she would like to be able to do.

Basic policy and process of approach

The basic policy is keeping physical training to recover from disuse, getting safety movement and setting environment in order to do cooking, wearing, taking a bath and gardening more safety and efficiently. While the approach process, she succeeded in cooking with range by herself. She did gardening actively, and gradually she gave ex post reports for author. While doing gardening, she struck her buttock on ground. Her activities expanded more rapidly than author's expectation. The author discussed to recognize detail of occupational tasks and cope, environment and risk.

Consideration

According to the Dynamic System Theory¹⁾, her new action oriented by expanding activities has the potential of unpredictability. Her falling down might be one of it. The effect of occupation includes this kind of danger. OTs are the existences for total coordinator that occupational carry out territory, factor and environment around a client. Therefore, OTs are able to offer the proper evaluation and strategy in order to get the way to expand occupations safety on client's own. Through this case, the author could understand that OTs need to grasp a client's self cognition for occupation from the beginning of the approach. The author could add the view point as a partner who adjust the effect of occupation with client.

日本作業科学研究会会則

第1章 総則

(名 称)

第1条 本会は「日本作業科学研究会」(Japanese Society for the Study of Occupation)と称する。

(目 的)

第2条 本研究会は、作業科学の研究推進と学問的発展を目的とする。

(事 業)

第3条 本研究会は、次の事業を行う。

1. 学術研究会の開催
2. 情報の配信
3. 会員個人による研究交流の推進
4. その他 前条の目的達成に必要と認められる事業

第2章 会員

(会員と入会)

第4条 会員は、本研究会の目的に賛同するもので次の者をもって構成する。

1. 正会員：個人で所定の様式(別記第1号様式)にて入会手続きを行い、当該年度の会費を納めたもの

(会員の権利)

第5条

1. 会員は研究を学術研究会等で発表・講演することができる。
2. 会員は総会において、議決に参加することができる。
3. 会員は本研究会の企画するその他の行事に参加することができる。
4. 会員は本研究会の発行する配布物を受けることができる。

第3章 学術研究会長

(学術研究会長)

第6条 第3条1項の事業を行うための学術研究会長は、正会員の中から選任し、原則として担当する年度の2年以前に行う。

学術研究会長は学術研究会の企画・運営を必要に応じ本部事務局と連絡をとりながら行う。

第4章 役員

(役 員)

第7条 本研究会に次の役員を置く。

1. 会 長
2. 副会長
3. 理 事：7～10名
4. 監 事：2名
5. 事務局員

(役員の選出)

第8条

1. 会長は、理事の中から理事会において互選する。
2. 副会長は、理事の中から理事会において互選する。
3. 理事及び監事は、正会員の中から総会において選出する。
4. 事務局長は、会長によって理事の中から選任する。
5. 運営委員は、理事会において会員の中から選出する。
6. 事務局員は事務局長によって会員の中から選任する。

(役員の任期)

第9条

1. 役員の任期は、1期2年とする。但し、3期以内の再任を妨げない。
2. 役員に欠員が生じた場合は理事会の議を経て、これを補充することができる。
3. 補充により選任された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

(役員の任務)

第10条

1. 会長は本会を代表し、会務を総括する。
2. 副会長は会長を補佐し、会務を分掌する。また、会長に事故ある時は、会長の職務を代行する。
3. 理事は、理事会を構成し、本会の目的達成のために会務を分掌し執行する。
4. 事務局長は、本会の事務的業務を統括する。
5. 監事は会計を監査し、意見、提案を述べることができる。

第5章 選挙

(選挙管理運営委員会)

第11条 1. 会則第8条3項に規定する選挙を行うため、選挙管理運営委員会をおく。

(選挙管理運営委員会の構成)

第12条 1. 選挙管理運営委員会は、理事以外の3名により構成する。

2. 委員長および委員の選任は、会則第8条5項に従うものとする。

(選挙公示と立候補の締め切り)

第13条 1. 選挙管理運営委員会は、投票日の60日以前に、選挙期日、選挙すべき役員の定数及び

立候補の受付期間を公示し、立候補を受け付けなければならない。ただし、立候補の締

め切り日は投票日の40日前とする。

2. 郵送による立候補の届け出は、締め切り日までの消印があるものを有効とする。

(立候補の届け出)

第14条 1. 理事及び監事の選挙に立候補しようとする正会員は、文書でその旨を選挙管理運営委員

長に届け出なければならない。この場合の書式は、別記第2号様式に準じて作成するものとする。

2. 推薦による立候補は、2～3名の推薦者を必要とし、推薦者の代表が文書で届け出るものとする。

その書式は別記第3号の様式の1に準じて作成するものとする。この場合は、

本人の承諾書を添えるものとする。その書式は、第3号様式の2に準じて作成するものとする。

(理事会による立候補の推薦)

第15条 立候補者が定数に満たない時は、理事会が定員の同数の候補者を推薦する。その書式は別記

第4号様式の1に準じて作成するものとする。この場合本人の承諾書を添えるものとする。

その書式は第4号様式の2に準じて作成するものとする。

(届け出受理証の発行)

第16条 選挙管理運営委員会は、第14条及び第15条による届け出に対し、届け出受理証を発行しな

ければならない。その書式は別記第5号様式に準じて作成するものとする。

(立候補に伴う選挙管理運営委員の退任と補充)

第17条 選挙管理運営委員が立候補したときは、委員の資格を失う。この場合は、欠員を補充しなければならない。

(選挙の方法)

第18条 選挙は、総会において出席者の直接無記名投票により行う。

(選挙用紙の様式)

第19条 投票用紙は、選挙管理運営委員会指定のものとする。

(投票の順序と投票の様式)

第20条 役員の選挙と投票の様式は次のとおりとする。

(1) 理事(7～10名記号式投票) (2) 監事(2名記号式投票)

(開票立会人)

第21条 開票に際し立会人2名をおく。立会人は、選挙管理運営委員長が指名する。

(有効投票)

第22条 有効投票数は、投票総数の3分の2以上なくてはならない。

(無効投票)

第23条 次の投票は無効とする。

(1) 規定の記号以外のものを記載したもの

(2) 定められた欄以外の場所に記載したもの

(3) 第20条に規定する数を越える記載をしたもの

(当選人の確定)

第24条 1. 得票数の多い者より順次当選を決める。

2. 当選人を決めるに当たり得票数が同じであるときは、選挙会場においてくじで定める。

(無投票当選)

第25条 立候補者数が定員と一致した場合は、無投票当選とする。

(選挙運動)

第26条 選挙運動は次のとおりとする。

(1) 選挙管理運営委員会は、候補者の氏名、意見等を掲載した選挙公報を1回発行しなければならない。

(2) 候補者及び推薦者代表が、選挙公報に氏名、意見等の掲載を希望するときは、その掲載

文を文書で選挙管理運営委員会に申請しなければならない。

第5章 会議

(会議の種類)

(総会)

第27条

1. 定期総会は、原則として年1回開催する。
2. 定期総会は会長が招集し、理事会が運営する。
3. 定期総会は、委任状を含めた会員の3分の1をもって成立し、議決は参加委員及び委任状を持って参加会員の過半数の同意を持って成立する。
4. 定期総会の議長は総会の中から選出する。

(定期総会の審議事項)

第28条

1. 理事及び監事の選任
2. 議案、及び事業の承認
3. 予算、及び決算の承認
4. 会費に関する事項
5. 規約の変更にに関する事項
6. その他 理事会が必要と認めた事項

(理事会)

第29条

1. 理事会は当分の間、年1回以上開催する。
2. 理事会は過半数の理事の出席を持って成立し、議決は出席者の過半数の同意を必要とする。可否同数の場合は、議長の決するところとする。
3. 理事会の議長は会長がこれにあたる。

(理事会の業務)

第30条 本会の目的達成のため理事会は次の業務を行う。

1. 理事会は事業計画を立案しその執行に当たる。
2. 理事会は、必要に応じて役割担当を決定し、その執務に当たる。

(事務局)

第31条

1. 事務局長は会の一切の事業、会計、外渉を掌握し、会長、副会長及び理事会に報告し、連携を図る。
2. 事務局長は、事務局員の中に会計担当を選び、理事会に承認を得る。
3. 会計担当は、会費、事業に伴う収入、寄付金その他の収入支出の業務に当たり、事務局長の管理の下に年1回以上の会計監査資料を作成する。

第6章 資産及び会計

(資産と経費)

第32条

1. 本研究会の資産は、会費、事業に伴う収入、寄付金、その他の収入によって構成され、経費は資産によってまかなう。

(予算・決算)

第33条

理事会は事業計画に基づいて、予算を編成し、前年度の事業報告、収支決算を作成して、監事の監査に基づき総会の承認を得るものとする。

第34条

本研究会の会計年度は毎年10月1日より始まり9月30日に終了する。

(会費)

第35条

1. 正会員：年会費 2,000 円
2. 既納の年会費及びその他の拠出金は返還しない。
3. 会費の改訂は総会において決定する。
4. 会員は年度初め2ヶ月以内に当該年度の会費を納入するものとする。

(会則の変更)

第36条

この会則は、総会の議決がなければ変更できない。

第7章

(附 則)

1. この会則は平成18年12月2日から実施する。

2. 本会の事務局は、当分の間、札幌市中央区南3条西17丁目(〒060-8556 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科内)に置く

日本作業科学研究投稿規定

(2008 年 6 月 20 日付)

1. (資格) 投稿者(筆頭者)は原則として本研究会会員とします。ただし、依頼原稿についてはこの限りではありません。筆署名は5名までとし、それ以外は謝辞に含めるようにしてください。

2. (論文の種類と内容) 投稿原稿は作業科学の研究推進、学問的発展に寄与するもので、未刊行のものに限ります。論文の種類は次の通りとします。

- (1)総説 研究や調査論文の総括および解説などとする。
- (2)研究論文 明確な構想に基づいた研究調査結果をまとめたもの。事例報告も含まれる。
- (3)短報、資料など
- (4)書評、論文抄録など
- (5)その他 編集委員が適当と認めたもの

3. (論文の採択) 投稿原稿の採択および編集は編集委員が行います。場合により、加筆、修正をお願いすることがあります。また編集委員会の責任において、多少の字句の訂正をすることがあります。

4. (投稿原稿の提出先) 原稿は、研究会機関誌事務局宛に投稿してください。

原稿はできるだけ文書ソフト(Microsoft Word、一太郎等)を使用して作成して下さい。紙に印刷した原稿を一部研究会機関誌事務局に郵送してください。同じく原稿のファイルを電子メールで送るか、USBメモリ(後日返却いたします)を郵送してください。採択の可否は編集委員会から連絡いたします。

5. (編集委員会) 投稿原稿の審査・採択など、編集・発行に必要なことがらを行うため、編集委員を置くこととします。編集委員会には、編集委員長を置き、編集委員は委員長の指名によって任命します。

6. (掲載費用) 採択された投稿原稿の図ならびに表のうち、改めて作成する必要のある場合、および、別冊については、当分の間、投稿者の実費負担とします。

7. (その他) その他の必要な事項については、編集委員会で決定します。

8. (投稿の手続きについて)

(1)投稿の連絡:投稿を希望する方は最初に電子メールで研究会機関誌事務局まで連絡をください。投稿に関しての問い合わせも同連絡先にしてください。

(2)執筆形式の確認:後出の執筆要領にそっていることを確認してください。

(3)郵送:筆頭著者は原稿(希望する方はUSBメモリも同封。メールでファイルを送りたい方は紙面原稿のみ)を簡易書留で下記宛てに郵送してください。

＜研究会機関誌事務局＞

〒891-0111 鹿児島県鹿児島市小原町 8-3

介護老人保健施設 愛と結の街

村井 真由美

TEL: 099(260)6060 (代)

FAX: 099(284)5689

E-mail:mmurai@mx2.aitoyui.com

執筆要領 (2008 年 6 月 20 日付)

投稿原稿は以下の要領に従って記載して下さい。

1. 原稿は和文、欧文(英文を原則とする)のいずれかを使用し、横書きにして下さい。

和文原稿は、A4 サイズで一頁 40 字×30 行の体裁で打ち出してください。枚数(本文)は論文の種類に従って以下の通りとします。

①総説:14 枚程度(図表を含む)

②研究論文:14 枚程度(図表を含む)

③短報、資料、書評など:4~7 枚程度(図表を含む)

漢字は必要ある場合以外は当用漢字を用い、かなは現代かなづかい、送りがなを用い、句読点を明確につけて下さい。改行の場合は1字あけて書き出して下さい。

欧文原稿はA4版の用紙にダブルスペースでタイプまたはワープロで打ち出し、上下左右に3cm程度の余白をとって下さい。枚数は和文原稿の枚数に準ずるものとします。

図表は印刷面積によって原稿枚数に換算させていただきます。

2. 論文の表題は内容をよく示すものにして下さい。

3. 300 字程度の要旨と、内容を示す適切な 4 つ以内のキーワードをつけて下さい。要旨は日本語論文では、英語の要旨を、英語論文では、日本語の要旨をつけてください。

4. 表紙（第 1 枚目）上半分には、表題、著者名を書いて下さい。なお、表題、著者名、著者タイトル、所属に英文を付け加えて下さい。下半分には、原稿の枚数、図表の数、編集者への希望などを記載して下さい。

5. 著者名は、和文のときは「・」で連ねて下さい。ローマ字名の書き方は、名の頭文字を大文字、残りを小文字にして、姓はすべて大文字にして下さい。

6. 原則として、本文は緒言、方法、結果、考察（論議）、要約（結論）、謝辞、文献の順で記載して下さい。ただし、論文の種類によっては必ずしもこの限りではありません。

7. 表の原則は本文と別紙（A 4 版の用紙）を使って作成し、一括して原稿の末尾に添え、本文中の欄外余白に挿入箇所を赤字で指定して下さい。

また、表の番号と表題は表の上に「表 1」，“Table 1”のように書き、表の説明は表の下に入れて下さい。

8. 図の原稿は、本文とは別紙とし、そのまま使用できるように白紙または青色方眼紙を使って墨書し、一括して原稿の末尾に添えて下さい。また、図の番号と表題は図の下に、「図 1」，“Fig.1”のように書いて下さい。図に関する説明は本文と同じ原稿用紙を用い、図ごとに改めて下さい。

特に必要があれば、図は印刷のときの縮尺を明記し、掲載する部分を「枠」で示すものとして下さい。

9. 和文原稿で外国語を原語で記載するときは、固有名詞やドイツ語の名詞などを除き、小文字で記載して下さい。

10. 本文中の人名は、姓のみを書き、敬称は省いて下さい。欧文綴りのときは、頭文字を大文字、その後を小文字にして下さい。

11. 本文中の文献引用の形式は、著者名の後に文献欄の番号と対応させた番号をつけて下さい。この番号は小文

字で肩番号にし、)をつけて下さい。(例: 5)). 順番は引用した順またはアルファベットの順によって番号をつけて下さい。

引用文献の書き方

筆者名は、5 名までを記載し、6 名以上は“他”とすることを原則とし、表記の形式は以下の例にならってください。

①雑誌の場合

文献番号) 著者名：論文表題. 雑誌名, 巻(号) : p~p, 発行年 (西暦).

例)

1) 吉川ひろみ：作業療法における「作業」の変遷. 作業療法ジャーナル, 39(12):1160-1166, 2005.

2) Clark F. Carlson M. Zemke R. Frank G. Patterson K. et al: Life domain and adaptive strategies of a group of low-income, well older adults. Amer J Occup Ther, 50(2):313-321, 2004.

なお、雑誌名の省記法は慣用に従って下さい。

②単行本の場合

文献番号) 著者名：書名. 版, 発行社名, p-p, 発行年 (西暦).

例)

3) 浅海奈津美, 守口恭子: 老年期の作業療法. 三輪書店, 2003.

4) Zemke R. Clark F (著), 佐藤 剛 (監訳): 作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店, 2000.

5) 潮見泰蔵: 「健康観」に関わる評価指標の臨床活用. 内山靖・他 (編), 臨床評価指標入門—適用と解釈のポイント, 共同医書出版社, 294-296, 2003.

③同一著者のものが 2 つ以上ある場合は、年次順に配列して下さい。

④同一論文からの引用が並ぶときは、同誌 (ibid) と略して下さい。

「作業科学研究」編集委員会

委員 村井 真由美（介護老人保健施設 愛と結の街）
同 酒井 ひとみ（関西福祉科学大学）
同 青山 真美（西九州大学）
同 高木 雅之（県立広島大学）
同 向井 聖子（北海道文教大学）

作業科学研究 第5巻 第1号

2011（平成23）年12月1日印刷

2011（平成23）年12月8日発行

編集者：日本作業科学研究会機関誌編集委員会

鹿児島県鹿児島市小原町8-3

介護老人保健施設愛と結の街リハビリテーション部内

発行者：日本作業科学研究会

事務局：北海道札幌市中央区南3条西17丁目

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科坂上真理研究室内

電話 011(611)2111（内線2885／2983）

FAX 011(611)2155

URL <http://www.amrf.or.jp/jsso>

印刷：ワークホーム聖恵

広島県竹原市忠海中町3丁目16-1